兵庫県文化財調査報告　第 523 冊

兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ

－三本峠北窯跡の調査－

令和 4 （2022）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

兵庫県文化財調査報告　第 523 冊

兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ

－三本峠北窯跡の調査－

令和４（2022）年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

三本峠北窯跡灰原出土　刻画文陶器 1

三本峠北窯跡灰原出土　刻画文陶器 2

三本峠北窯跡灰原出土 刻画文陶器 3 菊花文

三本峠北窯跡灰原出土 刻画文陶器 4 瓜文・草花文

三本峠北窯跡灰原出土資料

三本峠北窯跡窯体内出土資料（丹波篠山市教育委員会蔵）

三本峠北窯跡灰原出土 甕

三本峠北窯跡灰原出土 焼台

例　言

1　本書は、兵庫県立考古博物館の研究テーマのひとつである「兵庫県内における窯業遺跡の調査研究（第1期）」に伴う報告書で、文化庁より補助金の交付を得ている。

2　三本峠北窯跡の調査に関しては、昭和52年9月17日から10月24日で実施され、1980年に「三本峠北窯調査報告書（遺物写真編）」が刊行されている。しかし、正式な報告書は刊行されていなかったため、平成29年度～令和3年度の5年間にわたり、昭和52年度調査資料を中心に既往の調査についてその成果を再整理し、成果を調査報告書としてまとめることとなった。

3　調査研究事業にあたっては、助言や検討を加えるため、下記の方々に共同研究員を委嘱した。
大槻伸（元丹波古陶館）　梶山博史（中之島香雪美術館）河野克人（元丹波篠山市教育委員会）
長谷川眞（兵庫陶芸美術館）山崎敏昭（三田市地域創生部）（敬称略・五十音順）

4　本文については、研究会での助言や検討の上、松岡千寿、岡田章一（兵庫県立考古博物館）の他に、梶山博史（中之島香雪美術館）河野克人（元丹波篠山市教育委員会）山崎敏昭（三田市地域創生部）（敬称略・五十音順）が分担執筆を行った。文責は、目次に表記している。
遺物写真撮影は岡田章一、実測は、八木和子、中村　睦、柏原美音、トレースは柏原美音、坂東知奈、編集は、柏原美音、和氣坂綾子、坂東知奈の補助を得て、松岡が行った。

5　本書の第6図は、兵庫県教育委員会発行『兵庫県遺跡地図』の「56谷川」「57篠山」「66比延」「67藍本」（平成23年3月発行）をもとに加工している。

6　本報告にかかる遺物については、
報告番号1～145は兵庫県立考古博物館
報告番号300～358、501～559は丹波篠山市教育委員会
報告番号359～361は三田市が所蔵している。
今回使用した写真・図面については、兵庫県立考古博物館が管理・保管している。

7　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
赤羽一郎　阿部　功　植木　友　大槻倫子　大村敬通　岡崎正雄　小川裕紀
古西遥奈　津山光輝　成田雅俊　村上由樹（敬称略・五十音順）
愛知県陶磁美術館　神戸市立博物館　丹波篠山市立歴史美術館
丹波篠山市教育委員会　丹波立杭陶磁器協同組合

本文目次

例言

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯　（松岡千寿）…… 1

第２節　調査研究事業と整理作業　（松岡）…… 2

第２章　周辺の丹波焼関連遺跡

第１節　丹波篠山市域の遺跡とこれまでの調査　（河野克人）…… 5

第２節　三田市域の遺跡とこれまでの調査　（山崎敏昭）…… 11

第３章　調査の成果

第１節　三本峠北窯跡の発掘調査　（松岡）…… 13

第２節　出土遺物について　（松岡）…… 22

第４章　まとめ

第１節　中世丹波焼窯の変遷　（河野）…… 27

第２節　三本峠北窯跡出土陶片に彫られた文様　－和鏡との比較から－　（梶山博史）…… 34

第３節　三本峠北窯跡の評価　（松岡）…… 44

遺物観察表　（岡田章一）…… 48

図版目次

図版１　三本峠北窯跡灰原資料１

図版２　三本峠北窯跡灰原資料２

図版３　三本峠北窯跡灰原資料３

図版４　三本峠北窯跡灰原資料４

図版５　三本峠北窯跡灰原資料５

図版６　三本峠北窯跡灰原資料６

図版７　三本峠北窯跡灰原資料７

図版８　三本峠北窯跡灰原資料８

図版９　三本峠北窯跡灰原資料９

図版10　三本峠北窯跡灰原資料10

図版11　三本峠北窯跡灰原資料11

図版12　三本峠北窯跡灰原資料12

図版13　三本峠北窯跡灰原資料13

図版14　三本峠北窯跡灰原資料14

図版15　三本峠北窯跡灰原資料15

図版16　三本峠北窯跡灰原資料16

図版17　三本峠北窯跡灰原資料17

図版18　三本峠北窯跡灰原資料18

図版19　三本峠北窯跡灰原資料19

図版20　三本峠北窯跡灰原資料20

図版21　三本峠北窯跡灰原資料21

図版22　三本峠北窯跡灰原資料22

図版23　三本峠北窯跡灰原資料23

図版24　三本峠北窯跡灰原資料24

図版25　三本峠北窯跡灰原資料25

図版26　三本峠北窯跡灰原資料26

図版27　三本峠北窯跡灰原資料27

図版28　三本峠北窯跡灰原資料28

図版29　三本峠北窯跡灰原資料29

図版30　三本峠北窯跡灰原資料30

図版 31　三本峠北窯跡灰原資料 31
図版 32　三本峠北窯跡灰原資料 32
図版 33　三本峠北窯跡灰原資料 33
図版 34　三本峠北窯跡灰原資料 34
図版 35　三本峠北窯跡灰原資料 35
図版 36　三本峠北窯跡灰原資料 36
図版 37　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 1
図版 38　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 2
図版 39　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 3
図版 40　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 4
図版 41　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 5
図版 42　三本峠北窯跡 3 Tr 出土資料
図版 43　三本峠南窯跡出土・分布調査資料
図版 44　大武窯跡分布調査資料
図版 45　丹波篠山市分布調査資料 1
図版 46　丹波篠山市分布調査資料 2
図版 47　丹波篠山市分布調査資料 3
図版 48　丹波篠山市分布調査資料 4
図版 49　丹波篠山市分布調査資料 5
図版 50　丹波篠山市分布調査資料 6

写真図版目次

巻頭写真図版 1　三本峠北窯跡灰原出土刻画文陶器 1・2
巻頭写真図版 2　三本峠北窯跡灰原出土刻画文陶器 3・4
巻頭写真図版 3　三本峠北窯跡灰原出土資料　窯体内出土資料
巻頭写真図版 4　三本峠北窯跡灰原出土甕・焼台
写真図版 1　現地立会写真
写真図版 2　調査区遠景
写真図版 3　調査区全景
写真図版 4　調査区断面・調査区全景
写真図版 5　調査区南北断面
写真図版 6　調査区全景・東西断面
写真図版 7　東西断面
写真図版 8　調査区全景
写真図版 9　調査区伐採
写真図版 10　掘削作業
写真図版 11　掘削作業・平板測量作業
写真図版 12　磁気探査・整理作業
写真図版 13　三本峠北窯跡灰原出土資料 1
写真図版 14　三本峠北窯跡灰原出土資料 2
写真図版 15　三本峠北窯跡灰原出土資料 3
写真図版 16　三本峠北窯跡灰原出土資料 4
写真図版 17　三本峠北窯跡灰原出土資料 5
写真図版 18　三本峠北窯跡灰原出土資料 6
写真図版 19　三本峠北窯跡灰原出土資料 7
写真図版 20　三本峠北窯跡灰原出土資料 8
写真図版 21　三本峠北窯跡灰原出土資料 9
写真図版 22　三本峠北窯跡灰原出土資料 10
写真図版 23　三本峠北窯跡灰原出土資料 11
写真図版 24　三本峠北窯跡灰原出土資料 12
写真図版 25　三本峠北窯跡灰原出土資料 13
写真図版 26　三本峠北窯跡灰原出土資料 14
写真図版 27　三本峠北窯跡灰原出土資料 15
写真図版 28　三本峠北窯跡灰原出土資料 16
写真図版 29　三本峠北窯跡灰原出土資料 17
写真図版 30　三本峠北窯跡灰原出土資料 18
写真図版 31　三本峠北窯跡灰原出土資料 19
写真図版 32　三本峠北窯跡灰原出土資料 20
写真図版 33　三本峠北窯跡灰原出土資料 21
写真図版 34　三本峠北窯跡灰原出土資料 22
写真図版 35　三本峠北窯跡灰原出土資料 23
写真図版 36　三本峠北窯跡灰原出土資料 24
写真図版 37　三本峠北窯跡灰原出土資料 25
写真図版 38　三本峠北窯跡灰原出土資料 26
写真図版 39　三本峠北窯跡灰原出土資料 27
写真図版 40　三本峠北窯跡灰原出土資料 28
写真図版 41　三本峠北窯跡灰原出土資料 29
写真図版 42　三本峠北窯跡灰原出土資料 30
写真図版 43　三本峠北窯跡灰原出土資料 31

写真図版 44　三本峠北窯跡灰原出土資料 32
写真図版 45　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 1
写真図版 46　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 2
写真図版 47　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 3
写真図版 48　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 4
写真図版 49　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 5
写真図版 50　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 6
写真図版 51　三本峠北窯跡 1 Tr 出土資料 7
写真図版 52　三本峠北窯跡 3 Tr 出土資料
写真図版 53　三本峠南窯跡出土資料・分布調査資料　大武窯跡分布調査資料
写真図版 54　三本峠南窯跡　源兵衛山窯跡分布調査資料
写真図版 55　武士ケタ窯跡　太郎三郎窯跡分布調査資料
写真図版 56　床谷窯跡　稲荷山窯跡　分布調査資料

挿図目次

第 1 図　三本峠北窯跡灰原資料調査風景
第 2 図　三本峠北窯跡分布調査風景
第 3 図　丹波篠山市歴史美術館調査風景
第 4 図　研究会開催
第 5 図　出土資料実測風景
第 6 図　丹波焼関連の遺跡（1 /25000）
第 7 図　三本峠南窯跡の現状写真
第 8 図　調査区位置図（1 /1250）
第 9 図　灰原遺構平面図（1 /200）
第 10 図　土層断面図（1 /80）
第 11 図　グリッド・トレンチ位置図（1 /200）
第 12 図　三本峠北窯跡現状写真
第 13 図　中世丹波焼甕分類図（1 /8）
第 14 図　中世丹波焼甕変遷一覧（1）（1 /15）
第 15 図　中世丹波焼甕変遷一覧（2）（1 /15）
第 16 図　丹波焼　瓜蝶鳥文壺　神戸市立博物館
第 17 図　丹波焼　菊花文三耳壺　個人蔵
第 18 図　甜瓜双鳥鏡　東京国立博物館
第 19 図　瓜蝶雀鏡　神戸市立博物館
第 20 図　菊花蝶鳥鏡　京都国立博物館
第 21 図　群蝶双鳥鏡　京都国立博物館
第 22 図　菊花双鳥鏡　京都国立博物館
第 23 図　菊花蝶鳥鏡　京都国立博物館
第 24 図　洲浜萩薄双鳥鏡　京都国立博物館
第 25 図　草葉双鳥鏡　京都国立博物館
第 26 図　桐松双鳥鏡　京都国立博物館
第 27 図　蓬莱鏡　京都国立博物館
第 28 図　三柏散松喰鶴鏡　京都国立博物館
第 29 図　菊七宝丸文散蝶鳥鏡　京都国立博物館
第 30 図　蛇龍片輪車秋草双鳥鏡　京都国立博物館
第 31 図　碗の切り離し
第 32 図　常滑窯の焼台

表目次

第 1 表　丹波焼関連遺跡一覧

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯

昭和 50 年（1975）５月 25 日、多紀郡今田町教育委員会（当時）は、兵庫県教育委員会に対し、従来知られていた丹波焼の古窯跡である三本峠穴窯（南窯）とは別に、多紀郡今田町下立杭字武士ケタの道路工事の範囲内において陶器片が大量に出土していることを報告した。そのため、兵庫県教育委員会文化財課堀洋、大村敬通の二名が今田町教育委員会の案内によって、昭和 50 年（1975）５月 27 日に多紀郡今田町下立杭三本峠の工事範囲内の現地立会を実施した（写真図版１）。その結果、県道今田～柏原線の道路改良工事によって削平された工事範囲内の山の斜面で鎌倉時代にあたる陶器片（丹波焼）が多量に散乱していることを確認した。

そのため、今田町教育委員会は兵庫県三田土木事務所に対し、今田町下立杭三本峠付近の道路改良工事内において、今までに知られていなかった埋蔵文化財の包蔵地（丹波焼の古窯跡）が新たに発見されたことを連絡した。兵庫県三田土木事務所は、今田町教育委員会の連絡を受けて、県教育委員会文化財課、今田町教育委員会の三者の現地立ち合いを実施した。現地立会い及び関係者との協議の結果、道路改良工事を実施する前に文化財の包蔵地（丹波焼の古窯跡）の発掘調査を実施して記録保存をすることが決定し、兵庫県教育委員会が三田土木事務所の委託を受け実施した。調査は昭和 52 年（1977）９月 17 日から 10 月 24 日までの間で、県社会教育文化財課　波毛康弘、大村敬通（当時）がこれにあたった。なお発掘調査を実施するにあたり、名古屋大学教授楢崎彰一氏（当時）から現地において助言をうけた上、調査を開始した。

それまで丹波焼についての発掘調査は全く実施されておらず、この調査が初めての発掘調査となった。丹波焼の発生についての研究を発展させる上で、この発掘調査は非常に重要な意義があるため、発掘調査には、地元の丹波陶磁器協同組合、丹波陶友会、及び丹波古陶館学芸員大槻伸氏（当時）などに参加と協力をいただいた。

昭和 52 年（1977）に三本峠北窯跡灰原の発掘調査が行われたのち、昭和 55 年（1980）に『三本峠北窯調査報告書（遺物写真編）』が刊行された。その後、本文編を刊行予定であったが刊行されず、出土資料の一部は兵庫県教育委員会から丹波篠山市今田町立杭にある丹波伝統工芸公園陶の郷内の丹波立杭焼伝統産業会館に長期貸与され、展示された。平成 19 年（2007）の兵庫県立考古博物館の開館を契機に、出土資料は全て当館に返却され、平成 29 年度（2017）から、当館の調査研究事業の一環として、三本峠北窯跡の灰原資料の整理作業を行うこととなった。その成果として本報告書を刊行するものである。

第２節　調査研究事業と整理作業

平成 19 年 10 月に開館した兵庫県立考古博物館では、その事業計画の１つの柱として、調査研究を通じて「地域文化の成り立ちを解明し、新たな地域像を創りだすため、総合的・学際的な体制による調査研究を推進し、その成果を発信・活用する」ことを掲げている。

兵庫県は古代から現在まで窯業生産の盛んな地域として知られている。古代には播磨が須恵器の貢納国として『延喜式』に記載され、中世には西日本を中心に全国的に受容された東播系須恵器や、六古窯の一つとして知られる丹波焼などが操業していた。さらに近世に入ると、江戸を中心に全国的に普及する明石産擂鉢、中国製青磁を模倣した三田青磁など県内で陶磁器生産が行われた。

当館では、こうした各時代の兵庫県の窯業生産の実態を明らかにするため、平成 29 年度から「兵庫県内における窯業遺跡の調査研究」として、総合的な調査研究事業を行うこととなった。当事業では生産、流通、消費の視点から窯跡の考古学的調査（分布、発掘調査、出土遺物の実測、写真撮影等）、文献調査、古陶磁学的検討などを通じて総合的な調査を行う予定である。

その第１期として取り上げたのが、丹波焼の古窯跡である三本峠北窯の発掘調査資料である。丹波焼は、平安時代末～鎌倉時代初期に操業を開始し、現在まで生産を続けている日本六古窯のひとつである。中でも、昭和 52 年度に灰原の一部が発掘調査された三本峠北窯跡は丹波焼の窯跡でも最も古い時期の窯とされ、その出土資料は、丹波焼生産のはじまりを知る上では、欠かすことのできない資料である。発掘時から特に注目されてきたのは、様々な文様が刻まれた刻画文陶器である。しかし、正式な報告書は刊行されておらず、実態解明は進んでいない。

そこで今回の調査研究事業では、平成 29 年度～令和３年度の５年間、昭和 52 年度の発掘調査資料を中心に、既往の調査についてその成果を再整理し、丹波焼成立に関して丹波三本峠北窯の果たした役割を明らかにし、成果を調査報告書としてまとめることとなった。

（１）平成 29 年度の調査

担　当　者　学芸課　池田征弘　岡田章一
八木和子

内　　容　三本峠北窯跡灰原資料の実測を開始し、実測した資料の写真撮影を行った。

第１図　三本峠北窯跡灰原資料調査風景

（２）平成 30 年度の調査

担　当　者　学芸課　池田征弘　松岡千寿
岡田章一（以上研究員）　中村　睦　河合たみ　坂東知奈

共同研究員　大槻　伸（元丹波古陶館）梶山博史（中之島香雪美術館）河野克人（篠山市教育委員会）
長谷川眞（兵庫陶芸美術館）山崎敏昭（三田市地域創生部）（敬称略・五十音順）

内　　容　　昨年度から引き続き、資料の実測や写真撮影を実施した。さらに今年度からは、研究員として当館学芸員をはじめ、丹波焼研究者を共同研究員として委嘱し、事業のメンバーに加えた。平成31年２月22日（金）には第１回研究会を実施した。三本峠北窯跡の発掘調査の経緯やこれまでの丹波焼の調査と現状についての報告行った。当館所蔵の三本峠北窯跡資料の実見と検討を行った。

（３）令和元年度の調査

担　当　者　学芸課　池田征弘　松岡千寿
岡田章一（以上研究員）
中村　睦　和氣坂綾子
坂東知奈

共同研究員　大槻伸（元丹波古陶館）
梶山博史（中之島香雪美術館）
河野克人（丹波篠山市教育委員会）
長谷川眞（兵庫陶芸美術館）
山崎敏昭（三田市地域創生部）
（敬称略・五十音順）

第２図　三本峠北窯跡分布調査風景

内　　容　　昨年度から引き続き、資料の実測や写真撮影を実施した。さらに愛知県陶磁美術館に貸し出し中の資料も実測と写真撮影を行い、当館の三本峠北窯跡の資料の実測と写真撮影については概ね完了した。次に、丹波篠山市教育委員会所蔵の三本峠北窯跡の窯体内確認調査資料を借用し、実測や写真撮影を実施した。さらに丹波篠山市の三本峠北窯跡とその周辺の窯跡の分布調査を行った。

３月４日（水）に資料の検討を行う研究会を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染防止対策のため中止となった。

第３図　丹波篠山市立歴史美術館調査風景

（４）令和２年度の調査

担　当　者　学芸課　池田征弘　松岡千寿
岡田章一（以上研究員）
和氣坂綾子　坂東知奈

共同研究員　大槻伸（元丹波古陶館）
梶山博史（中之島香雪美術館）
河野克人（丹波篠山市教育委員会）
長谷川眞（兵庫陶芸美術館）
山崎敏昭（三田市地域創生部）
（敬称略・五十音順）

第４図　研究会開催

内　　容　昨年度から引き続き、丹波篠山市から借用した資料の実測や写真撮影を実施した。11月26日（木）に研究会を実施し、昭和52年度の発掘調査の写真をスライド上映し、その写真から調査状況を検証し、調査結果について検討した。さらに三本峠北窯跡の資料の可能性のある三田市の消費地から出土した丹波焼について、三本峠北窯跡の生産品の可能性を検討した。令和３年度作成予定の報告書についても、内容の検討を行った。

（５）令和３年度の調査

担　当　者　学芸課　池田征弘　松岡千寿
岡田章一（以上研究員）
柏原美音　和氣坂綾子
坂東知奈

共同研究員　大槻伸（元丹波古陶館）
梶山博史（中之島香雪美術館）
河野克人（元丹波篠山市教育委員会）
長谷川眞（兵庫陶芸美術館）山崎敏昭（三田市地域創生部）（敬称略・五十音順）

第５図　出土資料実測風景

内　　容　昨年度から引き続き、資料の実測や写真撮影を実施した。11月13日（木）に研究会を実施し、報告書に掲載予定の図面を見ながら、三本峠北窯跡の刻画文陶器について検討を行った。当年度作成予定の報告書の執筆担当や内容についても検討を行った。事業最終年度に当報告書「兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ－三本峠北窯跡の調査－」を刊行した。

第２章　周辺の丹波焼関連遺跡

第１節　丹波篠山市域の遺跡とこれまでの調査

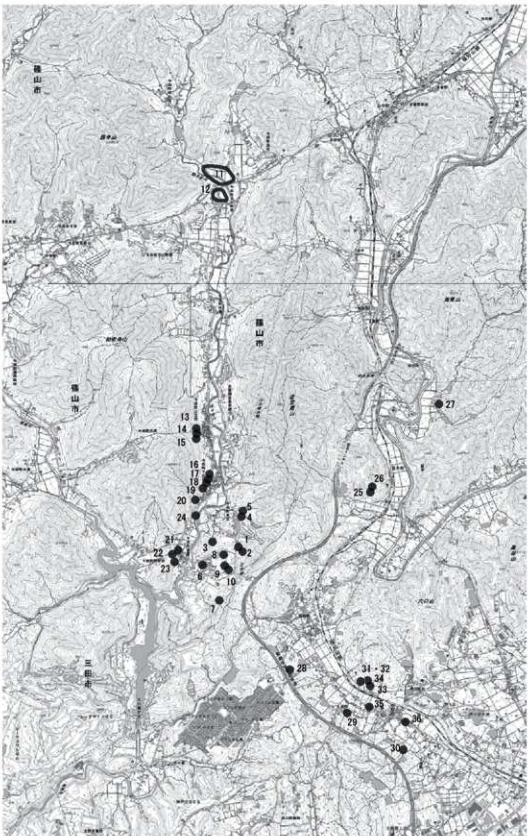
丹波焼は兵庫県の南東部、丹波篠山市の西南端の今田町上立杭、今田町下立杭、今田町東庄、今田町釜屋を中心とした地域に所在する。旧国名では丹波国の西南端にあたり、南は摂津国（現三田市）、西は播磨国（現加東市）との国境を接する場所である。日本の陶磁史研究で著名な小山富士夫氏が提唱した、所謂「中世六古窯」のひとつとして、丹波は、常滑・瀬戸・越前・信楽・備前とともに全国的に周知の窯業地である。

隣接する三田市域は、原材料となる陶土に恵まれて古くから窯業生産が盛んであり、須恵器の一大生産地であった。武庫川左岸の支流である青野川流域の末古窯跡群では５世紀末葉からの生産が確認されている。また、奈良時代から平安時代にかけて、木器窯跡群とともに最盛期を迎える。10 世紀には一旦生産が途絶えるが、その後 12 世紀末葉から 13 世紀初頭にかけて、井ノ方窯跡では見比窯跡群と同様に中世須恵器が生産される。末古窯跡群の生産が衰えを見せると、武庫川右岸の支流の相野川流域で相野古窯跡群の須恵器生産が９世紀末葉から開始されるが、11 世紀初頭には衰退する。その後、近世には丹波焼擂鉢の大量生産地となるなど、相野地域は陶土の含有量が豊富で、現在も立杭の窯元に陶土を供給している。そのような周辺環境の中、国境を越えた丹波の地において丹波焼は窯業生産を開始することになり、中世から現在に至るまで連綿と焼き継がれていくのである。

中世丹波焼の窯跡は、加古川の支流である四斗谷川下流域の右岸丘陵の下立杭周辺を中心に点在しており、これまでの研究から、国境である三本峠周辺が丹波焼発祥の地と考えられている。当時、小野原荘であるこの地を御神山として領知していたのは、摂津国一宮の住吉大社であった。今田町上小野原には荘園鎮守神として勧請された小野原住吉神社が鎮座しており、現在も５か村による御当の神事が営まれている。小野原荘は旧今田町全域をさしているといい、おそらく丹波焼の成立過程において荘園領主である住吉神社が密接に関わっていたものと推測する。上小野原地区団体営圃場整備に伴う発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代の中心集落である有安遺跡（12）および井根口遺跡（11）が確認され、初期丹波焼の碗・鍋・羽釜・鉢・小壺などが出土している。

中世丹波焼の窯跡には、灰原や遺物散布地を含めて、三本峠支群（北窯・南窯）（１・２）・武士ケタ支群（８～10）・源兵衛山支群（３）・太郎三郎支群（６）・床谷支群（４・５）・稲荷山支群（７）がある。これらの窯跡は丹波焼の研究家であった杉本捷雄氏などが昭和 12 年および昭和 13 年に行った踏査で確認された。近年、三田市側では相野窯跡群内に三本峠支群と同時期の大武支群（28）が確認されている。これまでの調査から、中世丹波焼の窯構造は焚口部に分炎柱を設けた穴窯であると推測される。また、四斗谷川の下流域右岸の今田町釜屋では最近、壁面に露出した灰原の下層より 16 世紀前半の遺物と考えられる捏鉢片および擂鉢片が見つかっていて、釜屋支群で少なくとも室町時代後期には既に操業していたことが判ってきた。

三本峠北窯は今田町下立杭字武士ケタの山麓部に所在する。昭和 50 年の県道下立杭柏原線改良工事の計画路線内で中世陶器片が多量に出土したため、昭和 52 年に兵庫県教育委員会の発掘調査によって東西９ｍ、南北 12 ｍの範囲で灰原が確認された。また熱残留磁気探査測定の結果、調査範囲外に窯跡



第６図　丹波焼関連の遺跡（1/25000）

報告書地図番号	遺跡名	時代	備考	遺跡地図番号
1	三本峠北窯跡	中世	昭和 52 年度調査	870001
2	三本峠南窯跡（古窯跡）	中世	天井部残存	870002
3	源兵衛山古窯跡	中世	昭和 46 年県指定文化財磁気探査で１基確認	870003
4	床谷古窯跡１号	中世	埋没	870004
5	床谷古窯跡２号	中世	灰原のみ確認	870005
6	太郎三郎古窯跡	中世	窯跡残存状況不明	870006
7	稲荷山古窯跡	中世	窯の正確な位置未確認	870007
8	武士ケタ灰層	中世		870008
9	武士ケタ４号	中世	窯跡消滅	870009
10	武士ケタ５号	中世	幅約 20 mの灰原	870010
11	井根口遺跡	平安～中世	集落遺跡	870035
12	有安遺跡	平安～中世	集落遺跡	870034
13	上立杭北窯跡	近世～近代	登窯	870011
14	上立杭中窯跡（本窯跡）	近世～近代	登窯	870012
15	上立杭南窯跡	近世～近代	登窯	870013
16	下立杭北窯跡	近世～近代	登窯	870014
17	下立杭中窯跡	近世～近代	登窯	870015
18	下立杭新窯跡	近世～近代	登窯	870016
19	下立杭古窯跡	近世～近代	登窯	870017
20	下立杭南窯跡	近世～近代	登窯	870018
21	釜屋古窯址群北窯	近世～近代	登窯	870019
22	釜屋古窯址群中窯	中世～近世	登窯	870020
23	釜屋古窯址群南窯	近世～近代	登窯	870021
24	立杭座方御役所跡	近世		870022
25	薬師谷窯跡群第１号窯跡	近世	長さ 38 m、幅４m前後の窯跡	200938
26	薬師谷窯跡群第２号窯跡	近世		200939
27	東山古窯跡	近世	窯体の一部と灰原確認	200940
28	大武古窯跡	中世	灰原	200948
29	上相野・釜屋窯跡	近世	長さ 46 m、幅 3.2 mの窯跡	200996
30	下相野窯	近世	長さ 50 m、幅２mの窯跡、昭和 60 年灰原一部調査	200669
31	鳶が尾西１号窯	近世	長さ 38 m、幅１m前後の窯跡	200689
32	鳶が尾西２号窯	近世		200690
33	上相野窯	近世		200693
34	鳶が尾東窯	近世		200694
35	上相野石代遺跡	近世		200483
36	下相野上沢明田遺跡	近世	粘土採掘坑群	201001

第１表　丹波焼関連遺跡一覧

の位置が判明した。遺物は、甕・壺・鉢・碗・瓶・鍋などの器種のほか刻画文陶器がある。甕は口縁部の形状が常滑焼に、刻画文は渥美焼に類似しており、東海系諸窯の直接的な影響がみられた。平成９年度に今田町教育委員会が再度の磁気探査により明確な位置確認を行い、その成果のもと、平成11年度には篠山市教育委員会が遺跡保存のため窯体の範囲確認調査を実施した。調査の結果、全長約14ｍ、幅約1.3～2.2ｍ、高さ推定約0.9～1.4ｍの窯体を確認した。ただ、範囲を限定したトレンチ調査のため、分炎柱の確認には至っていない。遺物は、窯体内の下層と床面から、甕を主体として、壺・碗・鉢・擂鉢などを検出しているが、昭和52年の灰原調査で出土した刻画文陶器や鍋などは見つかっていない。

三本峠南窯は今田町下立杭字武士ケタの山麓部に所在する。周囲は山林となっている。過去に三本峠古窯跡としていたが、北窯の確認を機に現在は三本峠南窯と呼称している。窯体は比較的よく残っており、陥没しているが天井の一部が見える。昭和の頃までは天井部が完全に残っていたようである。平成９年度の遺跡探査では、これより南側の地盤が盛り上がった箇所で磁気異常があり窯跡の存在が想定された。このため平成11年度に反応個所を中心に確認調査を行い、窯跡は見つからなかったが東西約23ｍ、南北約14ｍ、厚さ２ｍ以上堆積している南窯の灰原であることが確認された。遺物には甕・壺・鉢などがある。

武士ケタ支群は今田町字武士ケタに所在する。昭和53年度の分布調査では、三本峠の三差路の地点（武士ケタ４号）で灰原と遺物が見つかっている。平成８年度に実施した遺跡探査において、窯跡の痕跡は認められなかったが、少ないながらも遺物包含層が残存しており、陶片や窯壁の破片が周囲に散乱していることなどから、窯跡は農地開墾時に破壊されたものと考えられる。遺物には甕・壺・鉢・碗などがある。国松池周辺の地点（武士ケタ５号）では、昭和53年度の分布調査で幅約20メートルの灰原が確認され、甕などの遺物が見つかっている。両地点で採集した甕の破片は口縁端部が垂直に立ち上がり明確な縁帯を成す形状で、三本峠北窯と同様に古い様相を示している。

源兵衛山窯跡は今田町下立杭字武士ケタの山麓部に所在する。窯体は天井部が崩壊している。焚口部に一部窯壁がみえ、比較的に残存状況は良い。灰原は下方の溜め池に向かって広がる。昭和46年には兵庫県指定文化財史跡に指定されている。平成９年度の遺跡探査では、これより北西の地点で磁気異常を確認しているが、窯跡かどうかは不明である。遺物には甕・壺・鉢・擂鉢・碗・卸皿などがある。

太郎三郎窯跡は今田町釜屋字的場山に所在する。周辺は宅地造成のため、地形的に若干変化しているが、窯跡のあった場所は擁壁の間に残されている。昭和32年に杉本氏が穴窯の探寸を行っているが、現在の窯跡の残存状況は不明である。遺物には甕・壺・擂鉢などがある。

床谷支群は今田町東庄字松ケ下に所在する。昭和53年度分布調査では、四斗谷川の支流の笛地川左岸に窯体や灰原が確認されていたが、砂防工事および林道工事により埋没した。笛地川右岸の山林では灰原のみ見つかっていて、窯体は未確認である。遺物には甕・壺・鉢・擂鉢・碗・小壺があり、「大」などの篦記号（手印）を持つ破片も採集している。

稲荷山支群は今田町釜屋字大タワに所在する。谷側に灰原が舌状に広がっている。灰原はかなり荒らされている状態にある。周辺では広範囲に陶片の散布は認められるが、窯体などは判然としない。平成９年度の遺跡探査では、灰原付近で窯跡らしい痕跡を２箇所で確認している。遺物には甕・壺・鉢・擂鉢・鍋などがある。

稲荷山支群に次いで、窯業は四斗谷川右岸の釜屋窯跡群を経て、室町時代末期以降に下立杭窯跡群および上立杭窯跡群へと拡散していく。

釜屋窯跡群は今田町釜屋字中筋山に所在する。昭和 53 年度の分布調査では北窯支群、中窯支群、南窯支群が報告されている。先述の 16 世紀前半と考えられる破片は、北窯支群よりさらに北側で見つかったが、窯体は未確認である。周辺には稲荷神社や耕作地跡があり、削平されたと思われる。中窯支群では窯跡は不明だが広範囲に灰原が広がる。遺物には甕・壺・大平鉢・擂鉢・片口鉢などがあり、16 世紀末葉から 17 世紀初頭のものである。丹波焼の擂鉢は中世より一貫してヘラによる一本引き擂目だが、釜屋中窯以降、櫛目の擂鉢が生産されるようになる。北窯支群および南窯支群は近世以降の窯跡である。

慶長年間（1596 ～ 1615）頃に窯の構造が穴窯から登り窯へ転換したといわれている。昭和 53 年度の分布調査では下立杭において最初期の登り窯である下立杭古窯跡が見つかっている。平成 15 年度には篠山市教育委員会が遺跡保存のため窯体の範囲確認調査を実施した。調査の結果、窯体の一部と灰原を確認した。現存長 52 m、焼成室の幅は 1.6 m、推定天井高約 1 m、床面の傾斜は 25 度から 35 度を測る。遺物には甕・大甕・壺・茶壺・小壺・大平鉢・擂鉢・徳利ほか多岐にわたる。陶工「久左衛門」の銘を刻んだ破片が出土している。窯の時期は 16 世紀後半から 17 世紀前半と考えられる。昭和 53 年度の分布調査ではこのほか、下立杭窯跡群で北窯、中窯、新窯、南窯を確認している。いずれも江戸時代以降の登り窯である。

上立杭窯跡群は昭和 53 年度の分布調査で北窯、中窯（本窯）、南窯を確認している。いずれも窯体上部は崩壊しているが、100 m を超える細長い登り窯の遺構が残っている。遺物には、擂鉢・甕・徳利・植木鉢・甕などがある。

近世初頭には丹波焼の技術を継承する窯業が各地に広がり、三田市域以外では、西脇市の鹿野窯、丹波市の村森窯、大路窯などがある。

江戸時代には産方による経営が行われ、大庄屋の園田家が経営した頃の資料である『園田家文書』のうち、嘉永 5（1852）年の『多紀郡明細帳』（関西大学蔵）に、上立杭村に 3 基、下立杭村に 4 基、釜屋村に 3 基あったことが記されている。また、明治 6（1873）年の『上立杭村見取図』、『下立杭村見取図』、『立杭村之内釜屋分』（丹波篠山市立歴史美術館蔵）には地図上にそれぞれの窯の位置が記されており、先の明細帳の記述と合致している。これらの窯はその後も使われていたことから、窯は江戸時代後期には現在と同じ形状をしていたと考えられる。共同経営の窯から個人経営の窯となった今でも、窯の基本的な構造は変わらない。伝統的な作窯技術が頑なに受け継がれているのである。丹波窯は蛇窯ともよばれ、他の産地にはない独特の形状をしており、昭和 32 年にその作窯技法が国の記録作成等の処置を講ずべき文化財に選択された無形文化財になっている。

明治、大正、昭和と受け継がれた丹波焼は、民芸運動を提唱した思想家の柳宗悦にその価値を認められ、全国的に高い評価を受けるようになる。また、昭和53(1978）年に「丹波立杭焼」の名称で経済産業省の伝統的工芸品の指定を受けている。

【参考文献】

杉本捷雄　1969『改訂丹波の古窯』　兵庫県陶芸館
大村敬通　1980『三本峠北窯調査報告書（遺物写真編）』　兵庫県教育委員会
久下隆史　1989『村落祭祀と芸能』　御影史学研究会
大平　茂　1992『三田市下相野窯址』　兵庫県教育委員会
大村敬通　1992　「三本峠北窯跡」『兵庫県史』兵庫県

河野克人　1994『今田町団体営圃場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 今田町教育委員会
河野克人　1999『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』 今田町教育委員会
松岡千寿　2008「丹波焼窯跡資料について－当館所蔵の杉本捷雄氏採集資料から－」『兵庫陶芸美術館紀要』第４号　兵庫陶芸美術館

第２節　三田市域の遺跡とこれまでの調査

三田市域では５世紀半ばから近世・近代に至る、連綿とした窯業生産の伝統が認められる。市域の丹波焼関連遺跡は、分布調査で窯体の遺構が確認された遺跡や、遺物が採集され遺跡の存在が予想される場所６支群10遺跡に加え、発掘調査や確認調査によって粘土採坑跡や窯道具等の遺物の出土により、窯業生産に関連した遺跡の存在が明らかとなった場所を加えると14遺跡を数える。

中世段階の窯業遺跡としては、市境に近い上相野集落北部の丘陵に営まれた大武支群（28 大武古窯跡）がある。同支群は上相野字大武に所在し、近年の分布調査で明らかになった。窯体は明確でないが、焼成不良品や灰を投棄した物原が確認された。採集された遺物は、甕・壺・鉢である。今田町城の三本峠支群で採集された甕口縁の断面形態に共通点が見られ、鎌倉時代後半の年代が考えられる。丹波焼中心地の南部に位置する三田市域へも同時期の生産遺跡が展開していていたことを示す遺跡である。

近世の窯業遺跡についても、市境に接する藍本や周辺の上相野、下相野集落で確認されている。東山支群（27 東山古窯跡）、薬師谷支群（25 薬師谷１号窯跡、26 薬師谷２号窯跡）、上相野釜屋支群（29 上相野釜屋窯跡）、鹿ヵ尾支群（31 鹿ヵ尾西１号窯跡、32 鹿ヵ尾西２号窯跡、34 鹿ヵ尾東窯、33 上相野窯跡）、下相野釜屋支群（30 下相野窯跡）である。

東山支群は藍本字東山の山麓部に所在する。日出坂大谷口窯跡として古くから存在が知られていた。分布調査では窯体の一部及び物原が確認された。遺物には壺・瓶・蓋・擂鉢などがある。擂鉢には備前焼の特徴をもつ外形に櫛描の擂目を施すものと、一本引き擂目の２者が認められる。遺物の特徴から16 世紀末から 17 世紀初頭、あるいは 17 世紀前半の年代が考えられる。

薬師谷支群は藍本字薬師谷の虚空蔵山の東山麓部に所在する。藍本奥の坊窯跡として古くから存在が知られていた。分布調査では２基の窯体及び物原が確認された。遺構が明確な１号窯跡は、長さ 38 m、幅４m前後の窯跡及び北側に並行する階段状の平坦部が確認された。遺物には壺・瓶・擂鉢・盤・把手付鉢・窯道具（焼台）などがある。壺には四耳壺のほか、山椒壺と同形の肩衝壺の破片も認められる。擂鉢の擂目は櫛描によるが、間隔の広いものと密に櫛目が施される２者が認められる。遺物の特徴から17 世紀前半から 18 世紀中頃の年代が考えられる。

上相野釜屋支群は、上相野字釜屋の丘陵北麓に所在する。分布調査では長さ 46 m、幅 3.2 mの窯跡及び並行する階段状の平坦部と物原が確認された。遺物は擂鉢と窯道具（焼台）である。擂鉢の擂目は櫛描とし陶片を重ね焼に使用する。遺物の特徴から 17 世紀前半から 18 世紀前半の年代が考えられる。

鹿ヵ尾支群は、上相野字鹿ヵ尾から字蛯峨の火燈山南麓に所在する。鹿ヵ尾西１号・同２号窯跡のうち、遺構が明確な１号窯跡は、長さ 38 m、幅１m前後の規模が確認された。釉を施した瓶・甕、無釉の擂鉢・盤・窯道具（焼台）などがある。鹿ヵ尾東窯跡は窯体の残りは悪く明確でないが、遺物には甕・植木鉢・擂鉢などがある。上相野窯跡も窯体は確認されていないが、擂鉢・窯道具（焼台）が採集されている。遺物の特徴から鹿ヵ尾西１号・２号窯跡は、17 世紀前半から中頃、18 世紀前半、東窯跡では 16 世紀末から 17 世紀初頭、17 世紀後半から 18 世紀前半、19 世紀前半と、複数の年代が考えられる。

下相野釜屋支群は、下相野字釜屋の丘陵北麓に所在する。分布調査では、長さ 50 m、幅２mの窯跡及び並行する階段状の平坦部と物原が確認された。物原の一部は昭和 60 年に発掘調査が実施され、壺・甕・擂鉢と窯道具（焼台）などが出土した。遺物は擂鉢が主体であり、他の器種は少数である。擂鉢の擂目は櫛描とし、陶片を重ね焼に使用する。遺物の特徴から 17 世紀前半から 18 世紀中頃の年代が考え

られる。

以上の窯跡に加え、周辺地域で窯道具や焼成不良品が数多く出土し、窯業生産に関連すると考えられる遺跡に、上相野・石代遺跡（35）、上相野・山ノ口遺跡（484）、西安・中筋遺跡（906）、等がある。

また、東本庄地区から上相野・下相野・西相野集落にかけて広がる四ツ辻段丘面は、良質の粘土が得られる神戸層群で構成されており、集落境界の芝地、原野、耕地の基盤は、古くから丹波焼の土取り場として利用されていた(註１)。こうした記録が残るのは近世以降であるが(註２)、ＪＲ相野駅周辺で実施された、ほ場整備事業に伴う下相野・上沢明田遺跡（36）の発掘調査では、耕作土直下で直径１ｍ前後の不整円形の粘土採掘坑が密集して確認された。採掘坑からは下相野釜屋支群の製品と考えられる擂鉢が出土しており、検出された遺構は同支群の時期のものであると考えられる。令和２年度の調査では、近代の製瓦用の連房窯跡２基が確認されたが、立杭から移転して来た職人が操業していたと伝わる。

（註１）　田中眞吾 2011.03「２三田盆地の窯業遺跡と地形」、「第１部第１章　歴史の舞台としての市域の成り立ち、第４節人々の生活と地形」『三田市史』第１巻　pp39 ～ 49

（註２）　中山　清 2011.03「４土取りと立杭焼」、「第３部第４章　幕末維新期の政治と社会、第４節諸産業の展開」『三田市史』第１巻　pp852 ～ 860

【参考文献】

岡田章一ほか 1992『三田市下相野窯址―近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ―近世丹波焼の調査―』兵庫県文化財調査報告第 107 冊　兵庫県教育委員会

長谷川眞 2007「丹波焼における中核窯と周辺窯」『兵庫陶芸美術館紀要』第１号　兵庫陶芸美術館

印藤昭一 2009「文献資料からみた三田市域の近世丹波焼諸窯の展開」『市史研究さんだ』第 12 号　三田市

村上泰樹 2009「三田市域の中・近世の丹波焼について」『市史研究さんだ』第 12 号　三田市

三田市 2010『三田市史』第８巻　考古編

相野駅周辺土地改良区・三田市 2017『上相野・石代遺跡、下相野・上沢明田遺跡発掘調査報告書』

第３章　調査の成果

第１節　三本峠北窯跡の発掘調査

１．三本峠北窯跡発掘調査以前の窯跡の調査研究（昭和 12・13 年）

今回報告する昭和 52 年の三本峠北窯跡の灰原の発掘調査は、丹波焼では初めての考古学の発掘調査であり、この調査で中世の丹波焼生産状況の一端が知られるようになった。では、それ以前は丹波焼の生産及び窯跡について、どのような認識だったのだろうか。ここでは、三本峠北窯跡の発掘調査以前の丹波焼研究、特に窯跡の発見の様子について触れておくこととする。

丹波焼が文献にはじめて登場するのは、江戸時代前期（17 世紀）の茶会記である。茶会記では、「茶入　丹波焼　肩つき」など、茶器の生産地として丹波焼が登場する。「丹波のやきもの」という意味であろうが、その丹波がどの場所なのかについての言及はない。江戸時代の丹波焼の生産は、現在生産が行われている四斗谷川の細長い谷の右岸である釜屋地区、下立杭地区、上立杭地区で行われたため、昔から今の場所で生産されたと考えられていたのだろう。

丹波焼の中世の古窯の発見についての中心人物となるのが、丹波焼の研究家であった杉本捷雄氏である。杉本氏の著書『改訂丹波の古窯』[註１]によると、旧多紀郡内の古窯について、『観古図説』などをはじめとする陶磁器関係の文献や、郷土史関係資料で確認できるのは「立杭（上立杭、下立杭）」と「小野原」の二つの名だとされる。明治 10 年（1877）刊行の蟠川式胤著『観古図説』では、小野原焼として、幕末の色絵徳利が描かれている。これらの記載から、ある時期まで丹波の古い窯跡については、今田町の北側の小野原地区に存在すると考えられていたようである。そのため、杉本氏をはじめ様々な人が小野原地区において、古窯調査を行っていたようだが、丹波焼の古窯跡はみつからなかった。しかし、杉本氏らは、小野原の地名ではない他の場所で、丹波焼の古窯跡や灰原を発見する。昭和 12 年７月 18 日、井上吉次郎氏、田辺加多丸氏、荒川豊蔵氏と杉本氏ら古窯跡探査の一行は、今田村当局の協力を得て、まず三本峠と称される場所を筆頭に、源兵衛山と称される所、太郎三郎と呼ばれる所の三カ所に窯跡や物原（灰原）を発見する。さらに昭和 13 年３月には床谷、稲荷山の二つの窯跡がみつかった。「古窯に結び付けられている従来の小野原に古窯址も物原もまだ見つからない。古窯址と言われたことのある場所を実見しても、それは古窯址と認め難い。しかしそれを調査追及する間にも、全然今まで文献に現れていないほかの場所で、しかしそれは小野原荘内に属するところで、ありありと移窯説年代をはるかにさかのぼる二個所の穴窯時代の古窯址と一個所の物原が現れてきた。」とし、窯跡が発見された感激を未だ忘れない、と記している[註１]。そして小野原焼の由来が地名ではなく、備前焼などの例をひき、荘園名であることに気付くのである。この杉本氏らの窯跡発見によって、その後、丹波焼が世に知られるようになり、杉本氏の丹波焼研究も本格化する。以下、昭和 12・13 年の踏査時の様子を窯跡別に紹介する。

（１）三本峠窯跡

杉本氏が見つけた三本峠穴窯は、現在の三本峠南窯跡のことである。昭和 52 年度に行われた兵庫県教育委員会の調査により、従来知られていたこの三本峠穴窯の北側に灰原がみつかり、新たな窯跡と区別するためにそれ以降、三本峠南窯跡と呼称されるようになった。杉本氏がはじめて訪れた昭和 12 年

当時は、焚口を含めた窯本体が天井も含めて残っており、20年後に窯を訪れた時は、環境の変化が激しく、窯も相当荒れたとしている[註2]。杉本氏の採集陶片（兵庫陶芸美術館蔵）には、「三本口峠　街道バタ」と墨書がしてあり、峠道の裾で見つかったものであることがわかる。ここが物原の跡らしいと杉本氏が記載されているとおり[註3]、これらはのちに県道の拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、今回報告をする三本峠北窯の物原（灰原）の資料と推定できる。

第７図　三本峠南窯跡の現状写真

（２）床谷窯跡

床谷は別名金兵衛山とも呼ばれ、杉本氏の踏査したころから、すでに窯屑（窯壁の事か？）と僅かな陶片のみが残り、もっともわかりにくい窯址であるとの記載がある[註4]。

（３）源兵衛山窯跡

当時からすでに窯の崩壊がひどく、焚口の左壁面がわずかに残っているのみであるとされる[註2]。

（４）太郎三郎窯跡

杉本氏は、昭和12年に物原を発見し、昭和32年の調査で窯跡を確認している。この時には、天井は陥没していたが、穴窯の探寸を行なっており、より古い窯である三本峠窯跡より、長さや幅が長くなっていると報告している[註2]。

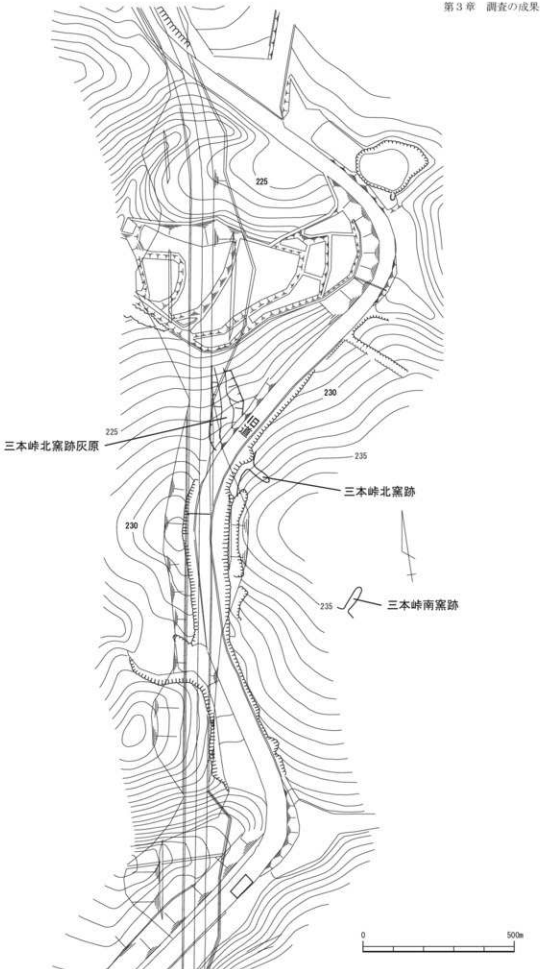
（５）稲荷山窯跡

陶片については、太郎三郎窯にとともに最も多いと記載がある[註4]。そして杉本氏によって中世の窯跡の変遷については三本峠、床谷、源兵衛山、太郎三郎、稲荷山の順が示された。さらに常滑焼との製品の類似性が指摘されており、常滑焼にみられるスタンプ文がないものだと、丹波焼と全く区別がつかない、と記している。

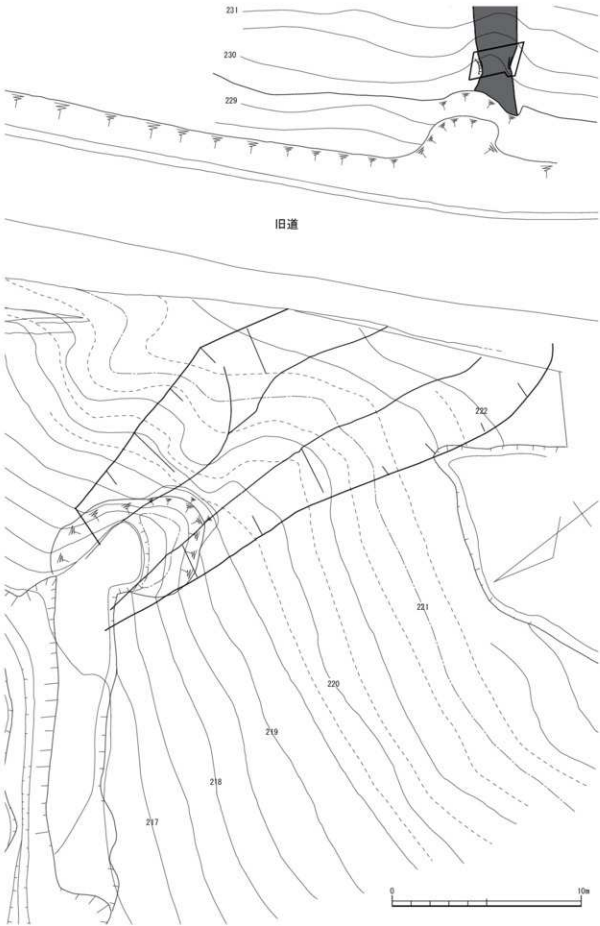
２．兵庫県教育委員会による三本峠北窯の灰原調査（昭和52年）

篠山市今田町下立杭字武士ケタの山麓部に所在する丹波焼の窯跡である三本峠北窯跡は、丹波国の最西端で、摂津国に接する、四斗谷の東、虚空蔵山の南部にある三本峠の北に位置する。昭和50年に県道今田一柏原線の改良工事に先立ち、計画路線内で中世陶器（丹波焼）が発見されたため、昭和52年に発掘調査を実施した（第８図）[註5・6]。その結果、三本峠穴窯として知られていた位置からすぐ西に、窯跡の存在が推定され、発見された陶器はその灰原のものであることが判明した。今回資料を報告することとなった調査である。

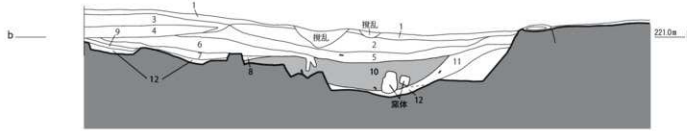
灰原の灰層を掘削し、灰原でみつかった資料を取り上げる調査を行った結果、この灰原の範囲は、東西９ｍ、南北12ｍにおよび、灰原は谷部の傾斜地に広がっていたことが判明した。東から西に傾斜する山裾が広がり、窯跡推定値の方向とは異なり交差している小さな谷筋に沿って炭層が堆積している。灰層の下には岩盤があり、岩盤までの堆積は、約1.5ｍあり、そのうち灰層の堆積は1.0ｍである（第10図）。



第８図　調査区位置図（1/1250）

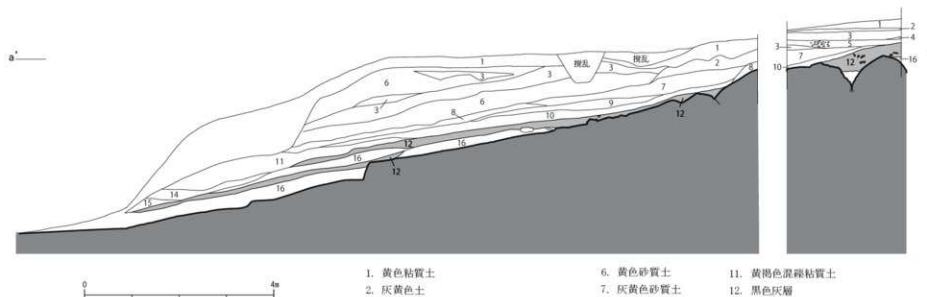


第９図　灰原遺構平面図（1/200）



1. 灰黄色粘質土
2. 黄色粘質土
3. 黄色砂質土(旧道の盛土)
4. 砂利層(旧道)
5. 灰黄色砂質土
6. 灰白色粘質土
7. 暗灰黄色砂質土
8. 灰黄色砂質土
9. 灰色粘質土
10. 灰層(黒色混濁体)
11. 灰黄色混礫粘質土
12. 灰色混礫粘質土

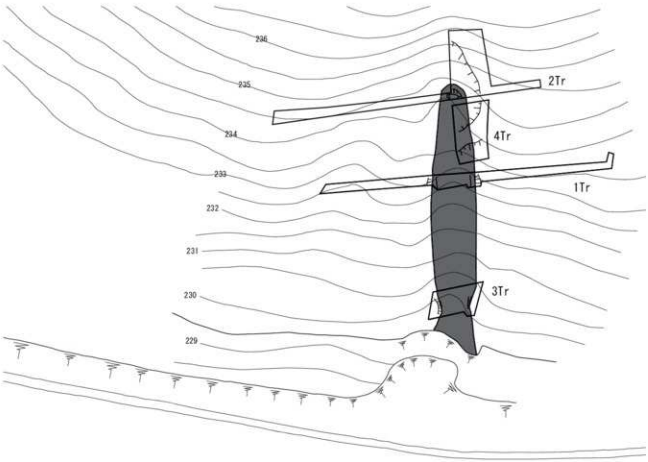
東西土層断面図

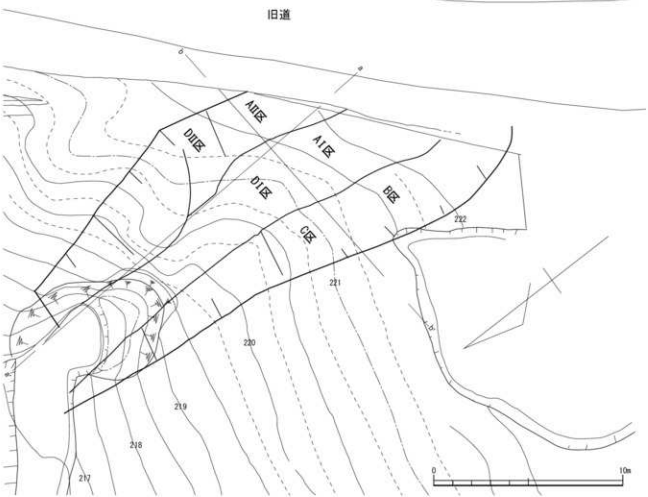


1. 黄色粘質土
2. 灰黄色土
3. 黄色粗砂層(いくつもの砂、粘土の層をなす)
4. 灰層(旧道の土面に流れこむ)
5. 砂礫層(旧道路敷)
6. 黄色砂質土
7. 灰黄色砂質土
8. 灰白色粘質土
9. 暗灰黄色砂質土
10. 暗灰色砂質土
11. 黄褐色混礫粘質土
12. 黒色灰層
13. 茶褐色混礫粘質土(スミを含む)
14. 暗褐色混礫砂質土
15. 灰褐色砂礫層

南北土層断面図

第10図　土層断面図(1/80)





第 11 図　グリッド・トレンチ位置図（1/200）

調査グリッドは、第11図のように設置し、資料の取り上げを行った。最も多く土器が出土しているのはB区で、その次はC区である。谷筋に溜まるように資料が堆積し、調査区西側で多く資料が見つかっている。この調査のすぐ後に、奈良国立文化財研究所に依頼して三本峠北窯跡の磁気探査を行ったところ、窯の全長８m最大幅２mの穴窯であることが推定された。

３．丹波篠山市教育委員会による三本峠北窯跡窯体確認調査（平成11年）

兵庫県教育委員会の灰原の発掘調査以降、長らく発掘調査は行われていなかったが、平成11年に丹波篠山市によって三本峠北窯跡の窯体内の確認調査が行われた。JR福知山線の複線化に伴い、丹波焼を焼いた窯跡の周辺で山林開発が予想されるため、遺跡の詳細な調査が必要となったためである。当報告では、この確認調査の出土資料の報告も行っているため、調査の詳細について、概要報告書[注８]を引用し、以下に記載する。

第12図　三本峠北窯跡現状写真

兵庫県教育委員会の調査は灰原部分のみで、三本峠北窯跡の窯体部分は未調査であったため、窯体の正確な位置、規模等は不明であった。そのため、今田町教育委員会では平成９年度に、窯体があると推定される箇所周辺の磁気探査、電気探査を行い窯跡、灰原の範囲確認調査を実施した。調査の結果、現状の地形でくぼんでいる箇所に反応があり、この部分に窯体がある可能性が高まった[注７]。この結果をもとに、平成11年度は探査で反応を示した箇所に試掘抗を設定し、より明確な範囲確認が行われた。この結果は、将来の丹波焼窯跡の整備にむけた基礎資料とするためである。丹波焼の窯跡ではこれまで窯体部分の発掘調査は行われていなかったが、この調査では、探査の反応箇所を中心に試掘抗を設定し、窯体のより正確な範囲確認を行った。

調査区域内に３箇所の試掘抗を設定した。調査区域の中心に設定した試掘抗を１Tr、１Tr東側の試掘抗を２Tr、焚口と想定される箇所に設定した試掘抗を３Tr、１Trと２Trの間に設定した試掘抗を４Trと呼ぶ。調査面積は31㎡である（第11図）。

（１）１Tr

磁気探査、電気探査で反応を示し、現状の地形でくぼんでいる箇所で、地山である白色砂岩を掘りこんだ遺構が確認された。地山を掘りこんだ箇所を掘り下げていくと、埋土中から丹波焼の陶片、焼土、窯壁片が出土し、この遺構が窯跡の一部であることがわかった。さらに掘り下げていくと地表下約170cmで大量の遺物が出土し、その遺物の下に青灰色の焼けた床面が確認された。遺物の出土状況は床面上に碗を４～８枚重ねて据えた状態のものが５セット試掘抗内で確認され、甕も底部が床面上に据えられた状態で確認された。窯の側壁の南側は岩盤に貼り付けた粘土が青灰色および黒色を呈し、焼けた状態で確認された。北側は南側より残りが悪く、粘土の大部分が剝がされて岩盤が焼けた状態で、一部岩盤に貼り付いた粘土が赤く焼けた状態で確認された。現状地盤から床面まで185cm、窯体の幅は、窯底で223cmである。出土した遺物は、甕、碗、鉢でコンテナ13箱分出土した。

床面に遺物が掘えられていた状況から、１Tr 部分が窯体の焼成部にあたり、焼成中に窯に何らかのアクシデントが起こり、天井が崩れたと考えられる。遺物の焼成状態はやや焼が甘い程度であるので、焼成最終段階に窯が崩壊したと考えられる。

（２）２Tr

電気探査で反応を示し、現況地形でくぼんでいる箇所で、地山である白色砂岩を掘りこんだ遺構が確認された。地山を掘りこんだ箇所を掘り下げていくと、埋土中に焼土を確認でき、地山および貼り付けた粘土が赤く焼けていた。この掘りこみの底は直径約 70cm の円形を呈し赤く焼けていた。この遺構の焼けている状態、形状、窯体における位置関係から、２Tr 部分が煙道部にあたると考えられる。この箇所から遺物は出土しなかった。

（３）３Tr

昭和 52 年の調査時に焚口部分と報告された箇所付近に試掘抗を設定したところ、地山である白色砂岩を掘りこんだ遺構が確認された。地山を掘りこんだ箇所を掘り下げていくと、埋土中から丹波焼の陶片、窯壁片、焼土が出土し、窯体の一部であることが確認された。さらに掘り下げていくと地表下 100cm で灰と炭が互層をなす堆積層が現れ、その下層から厚さ８cm の炭層があらわれた。その灰層の下には赤く焼けた床面が検出された。床面上に炭が堆積し、さらにその上に炭と灰が厚く堆積していることから３Tr が燃焼部であると考えられる。このトレンチ内からは分煙柱などの施設は確認されなかった。現況地盤から床面まで 132cm で、窯体幅は 135cm である。窯の側壁には岩盤には岩盤に貼り付けた赤く焼けた粘土が確認できた。この箇所の遺構の平面は、焚口にむかってすぼまる形状をしている。遺物はいずれも炭層より上層から出土しており、甕、壺など、コンテナ２箱分出土した。

（４）４Tr

１Tr と２Tr の間の窯体の状態を確認するため、掘り広げた４Tr では、地山である白色砂岩が天井として残っている箇所が検出された。天井残存部の内部には窯壁片が散乱していた。天井残存長は約 150cm である、この箇所からは遺物はでなかった。

（５）三本峠北窯跡窯体確認調査まとめ

丹波焼窯跡群の範囲確認のため、三本峠北窯跡の確認調査を実施した結果、これまで窯体部分が未調査のため不明であった窯の位置、規模、構造、状態等を確認することができた。窯の位置については、平成９年度に実施した磁気、電気探査で反応を示した箇所とほぼ合致する箇所で窯体を確認できた。窯体の全長は、旧道をつける時に焚口付近が壊されている可能性があるが、現在崖になっているところを焚口と考えるならば、全長約 14 m、幅約 1.3 m～2.2 m、高さが現在残っている部分から推測して約 0.9 m～1.4 m あったと考えられる。床面の比高差は、３Tr から１Tr 間で 190cm、３Tr から２Tr 間で 466cm である。窯の構造としては、地山である白色砂岩を掘りこみ、粘土を張り付けた地下式の窯である。平面の形状は、燃焼部より焼成部が広がった状態の平面系を呈している。窯の残存状況は、側壁が剥がれ落ちていることを除けば、かなり良いことがわかった。盗掘された痕跡もなく、焼成部には何らかのアクシデントによって焼成途中の遺物が床面上に多数残されていることと、天井部も一部残っていることが確認された。

（６）三本峠南窯跡

北窯のすぐ南側に所在する三本峠南窯跡は、天井の一部をはじめ、窯体はよく残っている。平成９年度に今田町教育委員会が実施した磁気探査では、これより南側の現状地盤が盛り上がった箇所で反応が

あり、窯跡の存在が想定された。今回の調査では、反応箇所を中心に試掘抗を設定し、窯跡の有無について確認を行うことにした。磁気探査で反応のあった箇所でを中心に試掘抗を設定し、人力による掘削を行い遺構の検出に努めた。調査面積は 39 ㎡である。

反応箇所を中心に試掘抗を設定し、調査を実施した結果、灰や焼土、焼けた粘土、石、炭、陶器片を含む層が何層にもわたって分厚く堆積していることがわかり、窯となりそうな遺構は確認されなかった。これにより今回の調査を実施した箇所は、周知の三本峠南窯跡の灰原であることが確認された。灰原の範囲は東西 23 m、南北約 14 mにわたって広がっていると考えられ、最も厚い灰原部は２m以上堆積している。また窯跡の南側には作業場となりそうな黄褐色土の地盤が広がっていることが確認された。確認された灰原は広範囲で、また分厚く堆積していることから、南窯はかなり長時間にわたって利用され、また堆積中に焼土や焼けた粘土が多く含まれている事から、窯の大規模な改修を数回にわたって行っていたと考えられる。

【参考・引用文献】

（註１）杉本捷雄　1969『改訂　丹波の古窯』財団法人　兵庫県陶芸館
（註２）杉本捷雄　1958「丹波新稿－続々丹波の古窯に就て－」『陶説』62 号　日本陶磁協会
（註３）杉本捷雄　1957『丹波の古窯』神戸新聞社
（註４）杉本捷雄　1938「続　丹波の古窯に就て－新発見の丹波古窯と朝倉山椒関係の古文書など」『茶わん』第八巻　第九号　寶雲舎
（註５）大村敬通　1980『三本峠北窯調査報告書（遺物写真編）』兵庫県教育委員会
（註６）大村敬通　1992「三本峠北窯跡」『兵庫県史』兵庫県
（註７）河野克人　1999『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財報告書』今田町教育委員会
（註８）成田雅俊　2000『三本峠北・南窯跡－丹波焼窯跡範囲確認調査概要報告書－』篠山市教育委員会

第２節　出土遺物について

１．三本峠北窯跡灰原出土資料（１～145）

灰原からは、TS28 コンテナ約 100 箱が出土した。器種は甕、壺、こね鉢、碗、皿、陶塔等である。出土品の９割は甕片であり、その多くは、強くゆがんでいる状態で、極端な資料では当初の形が想像もできない状況である。図化にあたっては、当初の形が想定できるものは、できるだけ当初の形に復元しながら図化を試みた。さらに復元ができないモノについてはそのままの形で図化を行った。そのため、写真と実測図が一致しないものがあることを断っておく。

（１）甕（１～34）

灰原出土資料で最も出土した器種が甕である。全体の形態は、胴部中位よりやや上に最大径があるソロバン形で口縁部に縁帯をもつ。甕は口縁部の形態によって分類が可能である。口縁端部をつまみ上げＬ字状に立ち上がるもの（１～22）（Ⅰ類）とＬ字状に立ち上がらないもの（23～34）（Ⅱ類）の大きく２つに分類できる。さらにⅡ類では、上下に拡張せず、断面が三角形状のもの（23～28）（Ⅱ－１類）と下方に拡張するもの（29～33）（Ⅱ－２類）に細分できる。Ⅰ類には、口縁部 30 ㎝～ 40 ㎝の大きい甕以外に　20 ㎝前後の小さい甕が一定量ある（18～22）。灰原資料で最もよく出土しているのがⅠ類の甕である。口縁端部がシャープなものから、すこし丸みをもつものまで様々ある。

甕は、粘土紐を巻き上げたのち、外面はナデ、もしくはハケ状工具で調整を行っている。外面に須恵器のようなタタキはほぼ認められない。内面は接合時のままで、接合部分とそれをナデた指の圧痕が顕著である。多くの甕の外面には自然釉がかかっており、丹波らしい茶褐色の肌に緑色の自然釉が映える。しかし、灰原で出土したほぼ全ての甕が、破裂や変形した状態で見つかっている。割れた断面に自然釉が流れている甕の破片も多いことから、焼成時の早い段階で破損したと考えられる。破損の原因としては、焼成時の温度調整の失敗が考えられ、高い焼成温度に土が耐えきれず、変形や破裂してしまった可能性が高い。

（２）壺（35～99）

壺は高さ 40 ㎝ほどの大壺と、20～30 ㎝の壺がある。壺の多くは、頸部から胴部にかけて絵が刻まれているいわゆる「刻画文陶器」である。

甕と同様な大きさの大壺（35～37）（Ⅰ類）は、胴部中位よりやや上が最大径になるふくらみをもち、頸部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部は外に折り曲げて、丸く玉縁状に仕上げている。大きくゆがんだ資料が多いため、完全な形の復元は困難である。37 は、胴部に箍を模したような沈線が２段あり、さらに縦耳を持つ四耳壺である。この縦耳は、３本の粘土紐を集めて１つの耳を形作るもので、中世の丹波焼の特徴の一つであり、いくつか伝世品にも見られる。灰原では図化できないくらい変形した 37 と同様の四耳壺がもう１点見つかっている。この大壺以外にも、胴部に沈線があり縦耳をもつ中型の壺が存在する（81）。

中型の壺（38～87）（Ⅱ類）は、刻画文が施されているものが多く、細片まで実測を試みた。実際の出土量は少ない。口縁部の形態から頸部をもつもの（38～46）（Ⅱ－１類）と頸部をもたない無頸壺があり（48～51）（Ⅱ－２類）、さらに頸部をもつものでも、口縁端部の形態で、外反、もしくは外に折り返すもの（38～40・46）（Ⅱ－１－ａ類）と外に面をもつもの（41・43）（Ⅱ－１－ｂ類）、さらに口

縁部の破片では、端部をつまみあげるもの（44・45）（Ⅱ－1－c類）などがある。

壺には刻画文を施しているものが多くあり、発掘調査当時から、これらの刻画文陶器に注目が集まっていた。刻画文の詳細は、後掲の梶山氏論文に譲るとして、ここでは形態や技法について触れておきたい。38は頸部を持つ壺で、かろうじて口縁部から底部まで残っている数少ない資料である。しかし、上部が大きくゆがんでいるため、焼成時に破裂を起こした可能性が高い。内面は調整を行っており、工具の痕跡が確認できる。山形の文様の下部には2条の沈線がまわり、全体にしっかりと緑色釉がかかる。同文様の破片も見つかっている（61）。39は、草文を肩部にいっぱいに巡らせている壺である。口縁端部は外側に折り込んで丸く仕上げている。40は、肩部にデザイン化された菊花文が施された壺である。この壺が三本峠北窯跡から出土したことによって、重要文化財指定の菊花文三耳壺（個人蔵・第17図）が丹波焼であることが証明された。まず、頸部付け根に縦方向の短い沈線が回り、その下には重なった菊花文が描かれている。しかし伝世品の菊花文壺にあるような横耳はない。41は、蓮弁文壺である。口縁部から底部まで残存しているが、焼成時に胴部の一部が大きくゆがみ、お辞儀をしたような形となっている。しっかりとした頸部で、口縁端部は面をもつ仕上がりとなっている。菊花文と同様に頸部の付け根に間隔をあけて横線文を2段入れ、その横線文の間に縦線が入った文様帯が廻る。さらにすぐその下にも横線文が3段入り、上2つの横線文の間に蓮弁文が廻っている。蓮弁文では、渥美焼の蓮弁文壺がよく知られている。しかし、同じ蓮弁文でも丹波の蓮弁文壺は、蓮弁文帯の中の大きな蓮弁文の間に逆さの小さな蓮弁文が入る構成である。一方、渥美焼の蓮弁文は2段に文様を施している点が異なっている。蓮弁文壺については、破片も出土している（42・43）。同じ個体かどうか不明であるため、別々に図化した。それ以外にも口縁部の破片（44～46）や頸部の付け根の沈線をもつ破片（47）がある。

頸部をもたない無頸壺は、3点確認できた（48～51）。いずれも刻画文が施されている。48は、胴部上半に最大径をもつ壺で、口縁端部は、ヘラできれいに調整が行われている。肩部には、三柏文が施され、胴部には七宝繋文がそれぞれ不規則にちりばめられている。いずれも円形の中に文様が描かれているもので、円形の中央には、コンパス状の工具を刺した痕跡が確認できる。49は、七宝繋文の破片である。50は、口縁部下から菊の花と葉を描いた破片である。口縁端部はヘラ削りできれいに面取り調整を行っている。51は菊花文の破片である。口縁端部は、ヘラ調整で仕上げられている。口縁部直下にある沈線文様帯は、40の菊花文と比べるとさらに退化している。沈線文様帯の下には葉と複数の菊花が重なるように描かれ、その下にはさらに葉が描かれている。その下には空間を開けて蝶の触角らしきものが描かれている。40の菊花文とは異なる文様であるが、残存していれば、より豪華な刻画文であっただろう。

壺の肩部に描かれた刻画文の破片については、細片であってもきるだけ図化を行った。52～55は壺の肩部で、萩、薄、桐などの草花文が描かれている。54・55は、茎の部分の点描が共通しているので同一個体の可能性もある。

56～59は、菊花文の破片である。いずれも壺の肩部の破片である。三本峠北窯跡の文様では菊花文が最も多い。56・57は、頸の付け根部分の陶片で、菊花文の半分が描かれている。59は、菊花文の花弁の一部と蝶の羽・触角が描かれている。

60・61は、38と同様に2重の沈線の上に山形の文様が描かれている。62は瓜が描かれた壺胴部の破片である。丹波焼の瓜の刻画文でよく知られているのは、神戸市石峯寺出土の瓜蝶鳥文壺（第16図）である。63も瓜の文様。63・64は、陶片から肩部より下の部分の可能性がある。65は、ちょうど肩部

の破片で、葉と蝶が描かれている。66は、カーブのない直線的な胴部の破片と考えられる。

67～70は、いずれも細片であるが、肩部周辺である可能性が高い、67は蝶が描かれている。71は、壺の肩部であるが、胴部上半に２つの印花文を施している。三本峠北窯跡では今のところ、これ以外に印花の例はない。この当時、印花の技術は、瀬戸窯で施釉陶器の施文として知られており、瀬戸窯との関係性を想起させる破片である。

72～75は、胴部に沈線がまわる破片である。いずれも大型であり、大型壺の破片の可能性がある。72は、胴部に３条の沈線が廻り、肩部には、窯印状のマークが施されている。73は胴部上位に２条の沈線が廻り、その下部に２つの窯印状のマークが施されている。74・75は、沈線をもつ胴部の破片である。いずれも３条の沈線をもつ。76･77は､胴部に「大」字を刻む破片である。76は､甕の胴部に「大」字を３つ刻んでいる。77は、大の字と他に図を描いている破片である。中世の丹波焼では、「大」字が刻まれている甕や壺の伝世品が知られている。78～80は、刻画文が刻まれているが、何を描いたのか不明な文様である。

81・82は、四耳壺の破片である。81は、丸味をもつ胴部に縦耳が付く。耳の形態は、３つの粘土紐を組み合わせ１つの耳とし、胴部との接合部分には、別の粘土を上から付けて押さえる手法で、これも丹波焼に特徴的な耳の接合方法である。頸部の付け根に３条の沈線、胴部に３条の沈線をもつ。さらに窯印のような刻文を施す。82は、横耳をもつ四耳壺の肩部破片である。横耳も三本の粘土紐を組み合わせているのは縦耳と共通している。しかし、接合部分にさらに上から粘土をつけることはなく、形態的には、中国製の白磁四耳壺、もしくはそれを写した瀬戸焼四耳壺を意識した仕上がりになっている。頸部下には沈線が施されている。83～87は壺の胴部である。胴部の形も細身の壺（83・85・86）と、丸みをもつ壺（87）がある。83は胴部に蓬莱山の刻画文を施している。

小壺（88～99）は､頸部をもち胴部に沈線を施すもの（88～93)､口が広く､短い頸部が付くもの（96～99）の大きく２種類に分類できる。後者は、いずれも胴部に刻画文が施されている。89は、口縁部に片口が付き、胴部にはヘラで窯印状のマークを刻む。96は線刻で四つ足の動物を描いている。背中の縦の沈線がたてがみを表現していると推測され、馬を描いていると考えられる。97は、54・55と草の表現が類似している。薄であろうか。98は口縁端部の破片、99は胴部に瓜が描かれている。

（３）鉢（100～111）

いずれもおろし目のないこね鉢である。底部平底で胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は方形に面をもつもの（100～103）（Ⅰ類)､口縁端部を外につまみ出すもの（104～108）（Ⅱ類）に分類できる。特に、後者の形が初期の丹波焼におけるすり鉢の特徴的な形といえる。それ以外には、口縁端部に段差をもつもの（109)、口縁端部は丸みをもつもの（110)、厚みがあるもの（111）がある。

（４）盤（112～114）

３点出土した。大きいもの(112･113)とやや小さいもの(114)がある。胴部に３条の沈線が２段に巡り、外面下部はヘラケズリを行っている。

（５）高台付鉢（115・116）

大鉢や皿などの大型品に低い丸高台が付くもので、底部が２点出土している。

（６）碗（117 ～ 124）

大きさは、口径 13 ～ 14cm、高さ 4.5 ～ 5 cm。平底から直線的に立ち上がり口縁端部は丸く納める。底部の切り離しは、静止糸切キリ、もしくはそののち調整を行っている。東播系須恵器のような回転糸キリのものとは異なる。いずれも赤褐色に仕上がっている。

（７）皿（125 ～ 128）

皿（125）と小皿（126 ～ 128）が見つかっている。皿はやや丸みを持った形態、小皿は平底から端部をそのままつまみあげて製作している。切り離しは 126・127 は静止糸キリ、125・128 切り離し後ナデ調整で、回転糸キリのものはない。

（８）土鍋（129 ～ 131）

もともと土師器で作られていた土鍋や羽釜も見つかっている。くの字状の形態をもつもので、端部は外につまみ出す。胴部外面にはタタキを施す。硬く焼きしめられ、赤褐色に仕上がる。

（９）羽釜（132 ～ 134）

３点を図化できた。ほぼ直線的に立ち上がり、胴部上位でつばをもつ形態である。132 は胴部外面にタタキを持つタイプである。133 はつばのすぐ上、口縁部の下に穴をあけている。口縁端部はいずれもそのまま面をもつ形態である。

（10）陶塔など（135 ～ 141）

陶製の宝塔形の蓋状の破片が見つかっている。135 は宝塔の屋根のように四隅が上がっている。表面には刻画文が施されているが、何かはわからない。裏を見ると、丸い焼成の痕跡がある。経筒の外容器のような丸い筒状のものの上で焼成された可能性もある。136 ～ 140 はいずれも宝塔形の四隅の破片である。141 は平板形で、表面に刻画文がある。

（11）焼台（142 ～ 145）

粘土を丸めた形の焼台が数多く出土している。そのうち４点を図化した。いずれも径 15cm ほどで、球体をつぶした形をしている。145 は甕と思われる底部がそのまま焼台にくっついた状態である。145 のように、傾斜している窯の床面に大型品である甕などの底部を押しつけ、製品を固定したと考えられる。このような焼台は、この地域の須恵器生産ではみかけないため、三本峠北窯跡の生産技術を考える上で重要な資料である。

２．三本峠北窯跡窯体内資料（301 ～ 353）

丹波篠山市が確認調査を実施した三本峠北窯跡の窯体内で出土した資料である。北窯跡のトレンチが４カ所あり、図化できる資料は１Tr と３Tr から出土している。

（１）１Tr 出土資料（301 ～ 344）

出土した遺物は、甕、碗、鉢である。トレンチの最下層の床面上には、４～８枚重ねた碗が５セット確認され、甕も底部が床面上に据えられた状態で出土した。床面に遺物が残された状況から、１Tr が

窯体の焼成部にあたり、結果、天井が崩れ製品が残されたと考えられる。この資料は三本峠北窯跡の最終段階の資料である。

甕（301 ～ 306・309）

大型の甕（301 ～ 303）と中型のほぼ完形の甕（309）が見つかっている。甕の口縁部形態を見るといずれも口縁端部が下に拡張するⅡ類の甕である。灰原で出土したⅠ類のＬ字状の甕は出土していない。灰原出土資料とは異なり、成形も粗くなく、焼成時の歪みもない。茶褐色の胎土で、安定して焼成されたように見える。

鉢（307・308・310 ～ 312）

おろし目のあるもの（307・308・310）と、ないもの（311・312）がある。おろし目のある鉢が窯体内から出土したことは注目できる。おろし目はまだ密ではない。灰原の資料のような口縁端部の外側へのつまみ出しは、少なくなる。

碗（313 ～ 344）

最下層の床面で５～９枚が重なった状態で５セットみつかった 30 点を図化した。口径約 14㎝器高約５㎝の碗である。平底で切り離しは、静止糸キリもしくは、ナデ消している。須恵器のような回転糸キリの痕跡はない。いずれも赤褐色でよく焼成されている。

（２）３Tr 出土資料（345 ～ 353）

焚口部分のトレンチである。甕（345 ～ 352）と壺の底部（353）が出土した。甕の中では、口縁部の形態によって上下に拡張しているもの（345 ～ 349）、下のみ拡張するもの（350 ～ 352）に分類できる。形態変化からすると上下の拡張→下への拡張と外傾していくという変化であると考えられる。353 は、底部である。

３．三本峠南窯跡トレンチ・分布調査資料

（１）三本峠南窯跡トレンチ出土（354・355）

甕（354）と刻画文の破片（355）を図化した。甕の口縁端部は上下には拡張しないものである。胴部のはりが強い。刻画文の破片は、花文を簡略化したような図である。

（２）三本峠南窯跡採集資料（356 ～ 358）

南窯周辺で採集した資料である。いずれも甕である。甕の口径が小型化している。口縁端部は拡張しないもの（356）、下に拡張しているもの、さらに外傾するもの（357・358）がある。

４．三田市大武古窯跡分布調査資料（359 ～ 361）

三田市側で見つかっている中世丹波焼窯跡の分布調査資料である。甕の破片３点を図化した。口縁端部はいずれもＬ字状でⅠ類に分類できる。

５．丹波篠山市分布調査資料（501 ～ 559）

今田町教育委員会 1999『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』の再掲載である。

第4章　まとめ

第1節　中世丹波焼窯の変遷

1．生産地における編年

中世丹波焼において、これまで編年研究は行われていたが窯跡の変遷についての詳細な研究は行われていなかった[註1]。ここでは現在把握している各窯跡の分布調査および発掘調査で見つかった遺物[註2]のうち出土例の多い甕の口縁部を形態別に分類して、近年の消費地の出土資料などを参考に窯跡ごとの編年をおこない、中世丹波焼窯の窯業生産の変遷と位置づけを試みることにする。

まず甕口縁部を形態ごとに時系列に分類すると、口縁部がL字状に垂直に立ち上がり明確な縁帯を形成する（Ⅰ類）、口縁部の縁帯が上下に拡張する（Ⅱ類）、口縁部の縁帯上端が外反する（Ⅲ類）、口縁下部と頸部の境が曖昧になり口縁部内面の立ち上がり部分が凹線化する（Ⅳ類）、口縁部が横に広がり口縁部内面の凹線が沈線化する（Ⅴ類）に細分化することができる。（第13図　中世丹波焼甕分類図参照）次に各類型の変遷について窯跡ごとに詳細をみていきたい。（第14･15図　中世丹波焼甕変遷一覧参照）

三本峠北窯

Ⅰ類とⅡ類の甕口縁部がある。Ⅰ類の口縁部で、（5）は灰原から出土した、三本峠北窯では初期の段階のものである。縁帯部の傾斜角はほぼ垂直である。Ⅱ類の口縁部では（346・348・347）がある。縁帯部の傾斜角は約10度である。いずれも窯体内の下層から出土した遺物であり、三本峠北窯の最終段階のものである。

武士ケタ支群

Ⅰ類の甕口縁部がある。（515）は武士ケタ4号地点、（511）は武士ケタ5号地点で採集した遺物である。いずれも三本峠北窯（5）と同様に初期段階のものである。いずれも縁帯部の傾斜角はほぼ垂直である。現段階において、武士ケタ支群ではⅠ類に続く遺物は採集していない。

三本峠南窯

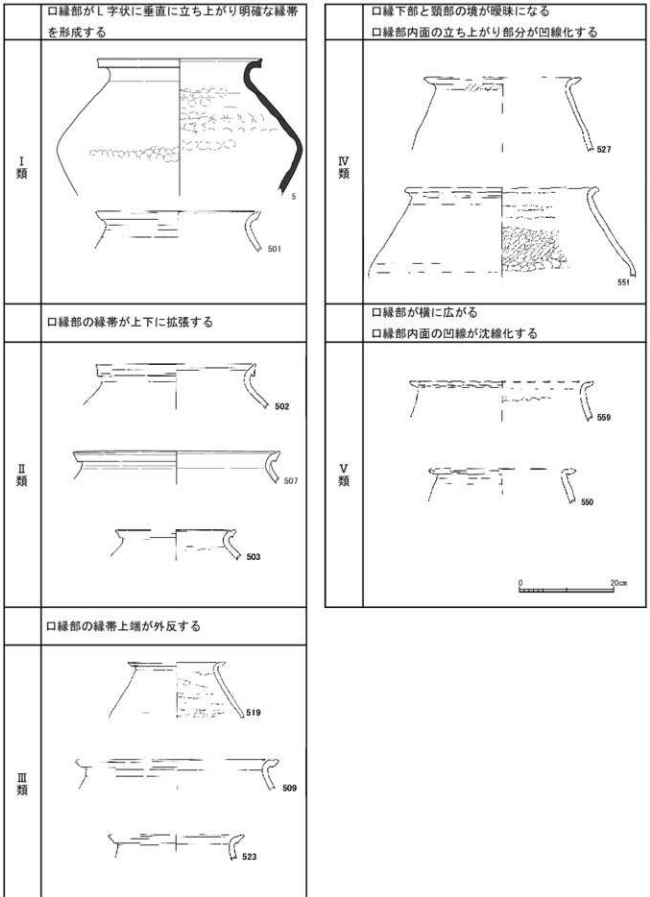
Ⅰ類とⅡ類の甕口縁部がある。Ⅰ類の口縁部で、（501）は内側の立ち上がりの屈曲部が曖昧になる段階のもので、三本峠北窯（5）よりやや後出するタイプである。縁帯部の傾斜角は約10度である。Ⅱ類の口縁部では（502・503）がある。（502）は口縁部の縁帯が上下に拡張する形態だが、（503）は口縁部の縁帯下部の拡張が短くなり上端部が若干開き気味で、（502）より後出するタイプである。（502）の縁帯部の傾斜角は約10度、（503）は約20度である。

源兵衛山支群

Ⅱ類とⅢ類の甕口縁部がある。Ⅱ類の口縁部では、（507）は口縁部の縁帯が上下に拡張するタイプである。縁帯部の傾斜角は約20度である。Ⅲ類の口縁部では（508・509）がある。口縁部の縁帯上端が外反するタイプで、縁帯部の傾斜角はともに約50度である。

太郎三郎支群

Ⅰ類からⅣ類の甕口縁部がある。Ⅰ類の口縁部で、（516）は内側の立ち上がりの屈曲部が曖昧になる段階のものである。縁帯部の傾斜角は約10度である。Ⅱ類の口縁部では、（517・518）がある。（517）は口縁部の縁帯が上下に拡張するが、（518）は（517）より後出するタイプである。（517）の縁帯部の



第 13 図　中世丹波焼甕分類図（1/8）

傾斜角は約20度、(518) は約30度である。Ⅲ類の口縁部で、(519) は源兵衛山支群 (508) と同様のタイプで、縁帯部の傾斜角は約40度である。Ⅳ類の口縁部で、(a) は杉本コレクション (041) の甕で[註3]、口縁下部と頸部の境が曖昧になり口縁部内面の立ち上がり部分が凹線化する形態である。縁帯部の傾斜角は約50度である。

床谷支群

Ⅱ類からⅣ類の甕口縁部がある。Ⅱ類の口縁部で、(522) はロ縁部の縁帯が上下に拡張する形態より後出するタイプである。縁帯部の傾斜角は約20度である。Ⅲ類の口縁部では(523～525)がある。(523・524) の縁帯部の傾斜角は約40度で (525) は約50度である。Ⅳ類の甕口縁部では (526～528) がある。(526・527) では縁帯下部の角が曖昧になっている。縁帯部の傾斜角は約50度である。(528) はさらに口縁下部と頸部の境がなくなり、縁帯部の傾斜角は約60度になる。

稲荷山支群

Ⅲ類からⅤ類の甕口縁部がある。Ⅲ類では (544・552・547・546) がある。(544) は他のⅢ類の縁帯部が約40度から50度の傾斜角であるのに対して約30度であることから、Ⅱ類の口縁部の縁帯下部の拡張がなくなる段階の、Ⅲ類の初現的なものと考えることができる。ほかの縁帯部の傾斜角は、(552・546) が約50度、(547) が約40度である。Ⅳ類では (553・554・555・551) がある。各々の縁帯部の傾斜角は、(553) が約70度、(554) が約60度、(555・551) が約50度である。Ⅴ類では (550・559) がある。口縁部が横に広がり口縁部内面の凹線が沈線化するタイプである。縁帯部の傾斜角は (550) が約80度、(559) が約70度である。

大武支群

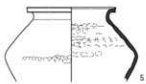
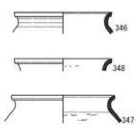
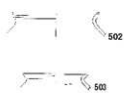
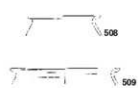
三田市上相野字大武に所在する。Ⅰ類からⅡ類の甕口縁部がある。(360) はⅠ類の後出するタイプである。(359) はⅡ類の口縁部の縁帯が上下に拡張する形態である。縁帯部の傾斜角は約20度になる。

2．各期の年代観

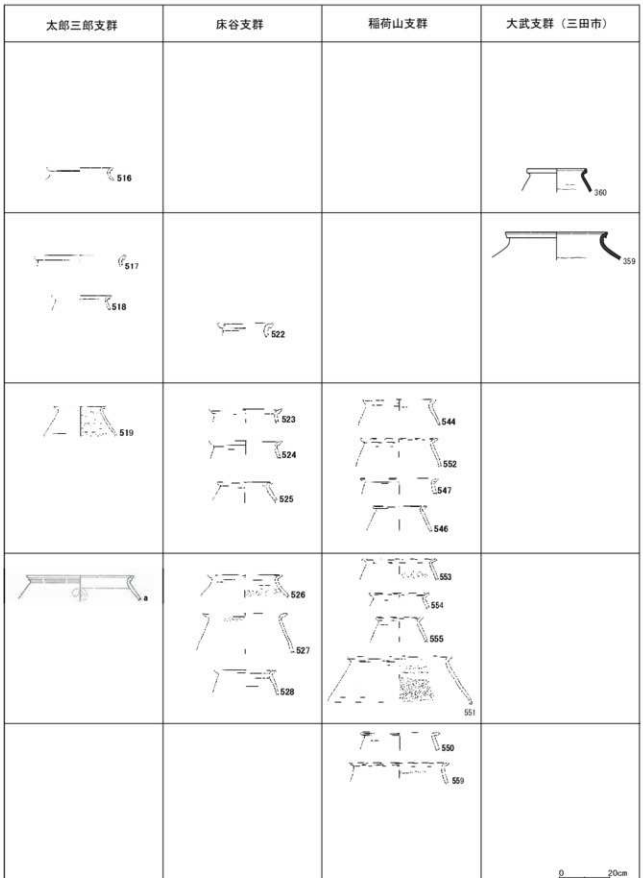
次に、各期の年代観について詳細を述べたい。(第14・15図　中世丹波焼甕変遷一覧参照)

1期

甕の口縁部がL字状に垂直に立ち上がり明確な縁帯を形成する形態は、中世丹波焼が成立した時期であり三本峠北窯 (5) が初期の段階である。当初の形態は同時期の常滑焼甕の口縁と類似しており、直接的な技術の伝播が考えられる。『愛知県史　別編　窯業3』[註4]の編年を参考にすると、1期は常滑焼甕の第2段階の5形式期に相当し、13世紀第2四半期の年代にあたる。三本峠北窯の初期段階と類似する甕口縁部片を武士ケタ4号地点 (515)・武士ケタ5号地点 (511) でも調査で採集していて、三本峠北窯周辺に同時期の窯が複数存在していたことが想定される。1期の甕口縁部は当初シャープなつくりであったが、三本峠南窯 (501) のように次第に内側の立ち上がりの屈曲部が曖昧になってくる。これにより、1期の前段階を1－a期、次の段階を1－b期とする。1－b期と同様の形態が太郎三郎支群 (516)、三田市の大武支群 (360) でみられるようになる。消費地の資料では、丹波篠山市の東古佐遺跡[註5]のSE17で出土した甕 (148) がこの時期にあたる。SE17の廃棄時の埋土から出土した瓦器碗が13世紀後半から14世紀前半頃 (伊野編年Ⅶ期)[註6]ではあるが、この甕はもともと井戸側として利用された甕を転用し破砕して井戸底に敷き詰めて井戸の水溜としたことが推測されていることから、当然、瓦器碗の時期より先行する甕と捉えることができる。また柱穴から出土した遺物に13世紀前半

		三本岬北	武士ケタ支群	三本岬南	源兵衛山支群
１期	１３世紀中頃前半				
２期	１３世紀中頃後半～１３世紀末期				
３期	１４世紀前半				
４期	１４世紀後半				
５期	１５世紀前半				

第 14 図　中世丹波焼甕変遷一覧（1）（1/15）



第15図　中世丹波焼甕変遷一覧（2）（1/15）

～中頃までのものが多いことなどから推測して、建物は13世紀中頃を画期として現集落の方に大半が移動したと考えられている。したがって、SE17出土の甕（148）は、１期が13世紀第２四半期の年代であることを裏付けるものである。また東古佐遺跡のSE５から出土した甕（150）は三本峠南窯（501）と同形であり、先述のとおりこの遺跡の性格上１期の資料といえる。以上のことから１期の年代は13世紀中頃前半と考えられる。

２期

甕の口縁部の縁帯が上下に拡張する形態は、三本峠北窯（346～348）および三本峠南窯（502）、源兵衛山支群（507）、太郎三郎支群（517）、大武支群（359）でみられる。２期は常滑焼甕の第２段階の６ａ形式期に当てはまり、13世紀第３四半期の年代が想定される。続く常滑焼甕の第２段階の６ｂ形式期では、口縁の縁帯部が上下に一層拡張され幅広くなるタイプと口縁部の縁帯が広がらずに縁帯下部が頸部に接合するものが出現する。中野晴久氏によると、年代は13世紀の終末という程度の認識で、それ以上の限定を加える根拠がないのが現状としている。丹波焼甕では独自の変化が現れ、三本峠南窯（503）、太郎三郎支群（518）、床谷支群（522）のように口縁部の縁帯下部の拡張が短くなり上端部が若干開き気味になる。２期の前段階を２－ａ期、次の段階を２－ｂ期とする。２期は消費地において時期設定の参考となる出土遺物があまりないため、常滑焼甕の年代を参考に13世紀中頃後半から末期の時期と考えたい。

３期

口縁部の縁帯上端が外反する形態は、源兵衛山支群（508・509）、太郎三郎支群（519）、床谷支群（523～525）、稲荷山支群（544・552・547・546）でみられる。消費地では、大阪府豊能郡能勢町の吉野遺跡で出土した銭甕が太郎三郎支群（519）と同形である[註7]。検出した備蓄銭のうち最も新しい銭貨が13世紀後半に初鋳された『咸淳元宝』（1265）であることから、本資料が埋納された時期は14世紀代と想定されており、『咸淳元宝』が輸入され流通する時間差と２期の年代観を考慮すれば、甕は14世紀前半のものといえる。よって３期の年代は凡そ14世紀前半と考えることができる。

４期

口縁の縁帯下部と頸部の境が曖昧になり口縁部内面の立ち上がり部分が回線化する形態は、太郎三郎支群（a）床谷支群（526～528）、稲荷山支群（553・554・555・551）でみられる。先述の東古佐遺跡のSE１から稲荷山支群（553）に類似する甕口縁部片（107）が出土しており、SE１は共伴する須恵器鉢や土師器鍋などの年代により14世紀中頃から後半の時期が想定されている。したがって４期の年代をおおよそ14世紀後半の時期と考えたい。

５期

口縁部の縁帯が横に広がり口縁部内面の回線が沈線化する形態は、稲荷山支群（550・559）でみられるが他の丹波焼窯跡では確認していない。また、消費地において５期の甕と類似する出土遺物はあっても年代を確定する資料に乏しいのが現状である。このため４期の年代観を考慮して、５期を凡そ15世紀前半の時期と捉えたい。

また、中世丹波焼甕口縁部の特徴として縁帯部の傾斜角が、１期では１－ａ期がほぼ垂直で１－ｂ期が約10度、２期では２－ａ期が約10度から約20度で２－ｂ期が約30度、３期では約30度から約50度、４期では約50度から約70度、５期では約70度から約80度で、時期を追うごとに広がっていく傾向にある。

窯跡ごとに時系列に整理すると、三本峠北窯は1期の初期段階から始まり2期まで継続するので、13世紀中頃前半から13世紀末期までの窯業期間となる。武士ケタ支群においても1期の同時期に開始するが、採集資料が少ないため窯業期間について13世紀中頃以降の時期は明らかではなく今後の検討課題である。三本峠南窯および大武支群は1期から北窯よりやや遅れて始まり2期まで継続する。期間は13世紀中頃前半から13世紀末期までである。太郎三郎支群もやや遅れるが1期から窯業を開始して4期まで継続する。時期は13世紀中頃前半から14世紀後半である。源兵衛山支群では2期から3期の窯業期間であり、13世紀中頃後半から14世紀前半の時期となる。床谷支群は2期に始まり4期まで継続する。期間は13世紀中頃後半から14世紀後半である。稲荷山支群は3期から開始して5期まで継続する。14世紀前半から15世紀前半の窯業期間である。

3．丹波焼窯の変遷

初期丹波焼は三本峠支群や武士ケタ支群周辺を中心として窯業生産が始まった。そのなかで三本峠北窯は渥美焼系の刻画文陶器が多量に出土する点において特異な窯跡といえる。一時的な刻画文陶器の需要の高騰によるものなのか、その後の窯跡ではほとんど見られず、甕・壺・鉢などが生産器種の主力となる。続いて生産は太郎三郎支群、源兵衛山支群、床谷支群、稲荷山支群へと拡散していく。

以上、中世丹波焼窯の変遷についてみてきた。5期以降の窯跡は続く16世紀前半の釜屋窯跡群まで見つかっていない。つまり生産地において15世紀後半の窯跡および遺物が確認されていないのが現状である。これについて釜屋窯跡群では近世以降の北窯支群・中窯支群・南窯支群の窯業や耕作地の開墾などにより土地の著しい改変を受けていて、それ以前の状況が確認できない状態にあるので、今後の調査によっては15世紀後半の窯跡が確認される可能性もある。中世丹波焼窯は16世紀後半に釜屋から立杭へと拡散し、慶長年間には窯構造が穴窯から登り窯へと進化していく。そして近世初頭には、三田市の薬師谷支群、西脇市の鹿野窯、丹波市の村森窯・大路焼窯など、丹波焼の新たな窯業技術を継承する生産地が藩を越えて各地に広がっていくのである。

【参考文献】

（註1）大槻　伸　1978「丹波」『世界陶磁全集』第3巻　日本中世　小学館
長谷川眞　2005「丹波」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
（註2）河野克人　1999『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』　今田町教育委員会
（註3）松岡千寿　2008「丹波焼窯跡資料について－当館所蔵の杉本捷雄氏採集資料から－」『兵庫陶芸美術館紀要』第4号　兵庫陶芸美術館
（註4）中野晴久　2012「第3節　常滑系」『愛知県史　別編　中世・近世　常滑系　窯業3』　愛知県
（註5）兵庫県教育委員会　2012『東古佐遺跡発掘調査報告書』
（註6）伊野近富　1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報第57号』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
（註7）鵜柄敏夫　1995「容器からみた蓄銭埋納－土器・陶器を中心に－」『摂河泉文化資料』第44号

第２節　三本峠北窯跡出土陶片に彫られた文様
－和鏡との比較から－

１．はじめに

平安時代末期から鎌倉時代前半（12～13世紀）にかけて、焼成効率を高める分煙柱を設けた窯構造が特徴である東海地方の窯業技術が各地へ広がった[註1]。それとともに、渥美窯や珠洲窯などで、樹木や草花に鳥や蝶などが添う、絵画的な文様が彫られた壺などが作られた。このような、粘土がまだ柔らかいうちに先端の尖った工具で彫り（一部スタンプなどを併用）、器面を窪ませて文様が表された陶器は、研究者間で「刻画文陶器」と呼ばれている。刻画文陶器は、紙絹に筆で文様を描く場合に比べ、表現の自由度が低いにもかかわらず、その線描は意外にも流麗かつ雄渾であり、絵画や漆器など、筆で文様が描かれた他の美術工芸品とは違った魅力を放っている。

本書で報告される三本峠北窯跡出土陶片に含まれる、様々な種類の刻画文陶片は、その多様さにおいて、刻画文陶器の優品を制作した渥美窯や珠洲窯にも引けをとらず、日本陶磁における文様表現の歴史を辿るうえでも、見逃すことのできない重要な資料群なのである。

２．刻画文陶器の研究史

戦後の古窯ブームや、高度経済成長期の開発に伴う窯跡の発掘調査の進展、1970年代に相次いだ陶磁全集の刊行[註2]などによって、各地で刻画文陶器の伝世品や出土品が確認された。それらが一堂に展示された「特別展日本陶磁絵巻－やきものに刻まれた絵画」[註3]は、開催された1988年時点での集大成であり、30余年を経た現在でも、その意義は失われていない。

この展覧会前に、荒川正明氏は、中世の諸窯で作られた刻画文陶器の変遷を示し、各窯の特徴や文様の意味などについて詳細な考察を行っている[註4]。後に同氏は、日本陶磁に表された吉祥文様を古代からたどり、花鳥文が描かれた刻画文陶器に焦点を当て、文様の解読を試みている[註5]。楢崎彰一氏は、刻画文陶器に表された四季花鳥図の解釈と成立背景を考察し、やまと絵の四方四季絵との関係性を論じている[註6]。近年では、荒川氏が中世諸窯の壺について、仏教における「宝瓶」信仰の視点から考察している[註7]。吉岡康暢氏は、珠洲焼の刻画文陶器について、朝鮮半島で高麗時代に作られた象嵌青磁浄瓶などの美術工芸品からの影響を指摘している[註8]。

中世の刻画文陶器は、その特殊性ゆえ生産量は極めて少なかったことが推測され、新発見の伝世品や出土品はそうそう見込めるはずもなく、ほぼ出揃った感がある。そのためか、近年の刻画文陶器に関する研究は、渥美焼の「秋草文広口壺」（慶應義塾）や「華鷲文三耳壺」（愛知県陶磁美術館）、珠洲焼の「草花樹木文壺」（石川県立歴史博物館）など、胴部の広い面積に絵画的な文様が巡る代表作を採りあげ、文様の意味や制作背景についての考察が繰り返されているに止まる。

本稿では、三本峠北窯跡出土資料の再整理とその報告にあたり、最良の基準資料である窯跡から出土した丹波焼の刻画文陶片に立ち返り、その文様の源流と刻画文の意味について再考を試み、刻画文を伴うやきものが作られた目的について考察を進める。

３．三本峠北窯跡出土の丹波焼刻画文陶器片

三本峠北窯跡出土の刻画文陶片には、実に様々な種類の文様が描かれているが、細片が多いため、文

様の全体像が掴みにくい。従って、刻画文を伴う完形に近い消費地遺跡出土品が、文様の全体像を把握するうえで参考になる。

石峯寺（神戸市北区淡河）境内から出土した丹波焼の「瓜蝶鳥文壺」（神戸市立博物館・第16図、以下本稿では《壺A》と略す）は、【62・63・99】（以下【　】内の数字は本書の報告番号）に類似した瓜の実が彫られている。頸部（現在は欠失）を中心に瓜と鳥を巡らせ、その外側に蝶を彫り表した文様構成は、荒川正明氏が指摘するように、日本製の鏡である「和鏡」の鏡背に見られる、鈕座・内区・外区という同心円状の構成を踏襲しており、《壺A》の刻画文が和鏡から強い影響を受けていることは明らかである[註9]。菊花文が表された【40・51】や、丹波焼の「菊花文三耳壺」（個人蔵・第17図、以下本稿では《壺B》と略す）も、同様に和鏡の文様構成を模倣し、鈕座に表された花弁形や菊花形の意匠を、頸の付け根に線刻で表した可能性が高い。いずれも和鏡を壺の上から被せたように、文様が彫られているのである。

そこで、三本峠北窯出土陶片に表された刻画文について、文様が近似する消費地遺跡出土の《壺A》と《壺B》も併せ、平安時代末期から鎌倉時代（12～14世紀）にかけて作られた和鏡の、鏡背に表された文様と比較することで、画題の特定を試みる。

（1）瓜【62・63・99】

【62】は、自然釉が融着した「窯傷（かまきず）」に覆われているが、房状の枠線内に細かい点が彫られた南瓜のような実の表現が、《壺A》に彫り表された瓜の実と共通することから、瓜であることが判明する。瓜の実に続いて、波形の枠線内に葉脈が彫られた葉と、それに続く細長い房の先に三枚の花弁を付けた花が彫られている。【63】にも、花を付けた房が表されている。これらの刻画文に描かれた瓜は、縦方向に筋が入る房状の形と点状の模様により、中世以前から日本で生育していたマクワウリ（真桑瓜・甜瓜）と推測される。蔓に実が連なる瓜は、中国でも子孫繁栄を象徴する文様として用いられた。

「甜瓜双鳥鏡」（東京国立博物館・第18図）は、京都伏見稲荷大社背後の稲荷山経塚から出土したもので[註10]、花の蕊を表したような花葯座鈕は、捩花状となっている[註11]。制作年代は、12世紀第4四半期から13世紀初頭と推測されている[註12]。洲浜から生えた瓜が、鈕を囲むようにして内区から界圏を越えて外区まで伸び、つがいの鳥が舞う。楕円形の房に模様を点描した実や、波形の輪郭線内に脈を連ねて表した葉、細長い房の先に三枚の花弁を付けた花の表現は、【62・63・99】に類似する。【99】の左半分に彫られた帯状の文様は、和鏡にも表される鳥の羽の一部である可能性が浮上する。

瓜を中心に鳥と蝶が表された《壺A》（第16図）は、12世紀後半から13世紀の「瓜蝶雀鏡」（神戸市立博物館・第19図）や、永久5年（1115）の奥書がある「朱書法華経」の残欠と一括になっている[註13]。荒川氏が指摘した《壺A》と和鏡の文様構成における近似性は、この鏡との比較による[註14]。ただし、森田稔氏の綿密な検証により、瓜蝶雀鏡は出土地不明、朱書法華経は福岡県の経塚出土であり、戦前から戦後のある時に一括となったことと、《壺A》が石峯寺本堂西側小山の中世墓から出土した蔵骨器であったことが明らかにされている[註15]。首が打ち欠かれていることも、蔵骨器としての使用を裏付ける[註16]。

《壺A》の瓜文は、実に五つの房が続き、中央の房の先に短い線が彫られている。この中央の房が花を表し、それ以外の四つの房は、葉を表しているように見える。もしくは、この部分全体が、瓜の実に付く枯れた花房を表しているのかも知れない。いずれにせよ、《壺A》の文様は描写が簡略化されており、制作年代が下ることを示唆する。

（2）菊と蝶【40・50・51・56・57・58・59・65・66・67】

【40・51】には、蕊を表す小さな円から、細長く先端が丸い花弁が放射状に巡る菊花と、波状の輪郭線内に短い線を連ねて脈を表した葉が彫られている。また、頸の付け根に沿って彫られた短い細線は、和鏡の鈕座の意匠を引用した可能性が極めて高く、和鏡の文様を壺の上から被せたような意匠である。【50】は、壺の頸部付け根から肩部にかけての陶片で、菊花の花と葉が彫られているが、鈕座を模した刻線はない。【56・57・58】は、菊花の花弁の一部である。菊は、葉に降りた露を飲んで不老不死になったという菊慈童の伝説など、不老不死や長寿を象徴する文様である。

菊花の先端部分と蝶の触角・羽が彫られた【59】の存在から、菊花に誘われた蝶の姿が添えられていた「菊花蝶文壺」も作られたことがわかる。すると、【51】の下端にわずかに残る曲線も、蝶の触角と羽の上端と推測される。

13世紀の「菊花蝶鳥鏡」（京都国立博物館、以下所蔵を明記しないものは同館蔵・第20図）[32 17]は、蕊を表す円の周囲に細長い花弁が放射状に巡る菊花の表現と葉の形状が、【40・51】に近い。つがいの鳥の下に配された蝶という画題も共通するが、この鏡では横から見た姿を捉えている。【59・65・67】において、蝶は上から見た姿が表されており、羽を左右に大きく広げ、長い触角をもつ。13世紀の「群蝶双鳥鏡」（第21図）には、この描写に近い蝶が、鈕を中心に向かい合わせで巡るように表されている。

【40・51】の頸部周囲には、放射状に線が彫られている。このうち線が長い【40】は、《壺B》に見られる菊花文の丸い先端部が省略されたように見えるが、12世紀末から13世紀前半の「菊花双鳥鏡」（第22図）に見られる、短い線が放射状に鈕を巡る花形座鈕に近い。一方【51】は、線が短く点描のようであり、12世紀中頃から14世紀にかけて作られた和鏡（例：第21図）の花蕊形鈕に表された、蕊の茎か連珠形の先端を模倣したように見える。従って【40・51】に見られる菊花文や蝶の表現、頸部付け根の刻文は、12世紀末から13世紀に作られた和鏡の意匠が直接的に反映されている。

《壺B》（第17図）は、菊花の表現が【40・51】と近似するものの、頸の周囲に彫られた先端が丸く細長い花弁状の文様と、葉と葉の間から二股に分かれて垂れ下がる茎の先に付く蕾が表される点が異なる。山形県の羽黒山御手洗池から引き揚げられた、12世紀前半から中葉の「菊花蝶鳥鏡」（第23図）[32 18]は、菊花と葉の表現が《壺B》とは異なるものの、葉と葉の間から垂れ下がる茎の先に付く蕾が、比較的大きく、多数表されている。さらに、《壺B》の頸部の付け根に彫られた、先端が丸く細長い花弁状の文様は、この鏡に見られるような菊花形鈕の意匠を模倣したものだろう。

【65・66】に彫られた幅の狭い葉は、【51】の幅の広い葉と印象が異なるものの、《壺B》に近いため、これらも同じく菊の葉である可能性が高い。

一方で【51】は、葉と葉の間から垂れ下がる茎と蕾が表されていない点で、「菊花蝶鳥鏡」（第23図）より制作年代がやや下る、「菊花蝶鳥鏡」（第20図）や「菊花双鳥鏡」（第22図）と共通する。

以上のような菊花文壺の特徴をまとめると、《壺B》は、基本的な文様構成と、鈕座の意匠を引用した頸部付け根の花弁形の意匠が、12世紀の和鏡に近く、三本峠北窯跡出土の【40・51】よりも先行する要素が多い。以前から指摘されているが、菊花文の表現は【40・51】より《壺B》の方が洗練されていることから、《壺B》の方が古く、12世紀後半まで制作年代が上がる可能性が高い[32 19]。少量の陶片資料と消費地遺跡出土品により、前後関係を推測するのは早計かも知れないが、《壺B》は、三本峠北窯の初期に制作されたか、あるいは三本峠北窯に先行する窯で制作されたことが想定できるのである。

（3）萩と薄【52・54・55】

【52・54・55】には、縦方向の長い線の両側に、斜め上に伸びる短い線が上下に連なって彫られており、杉などの針葉樹の葉に見える。【52】の右半分には、四枚の葉の交点から伸びた曲線の下側に、短い線を連ねた植物が表されている。13 世紀の「洲浜萩薄双鳥鏡」（第 24 図）と比較すると、前者は萩の花房で、後者は薄の葉と穂である可能性が高い。【54・55】に見られる花房の根元や、枝分かれする茎の接合部分に、2、3 の点描が刻まれている。これは、鏡に表された萩の花房の根元に表された 3 枚の葉が簡略化したものだろう。【52】の薄の葉は、鏡に描写されているように、本来は弧を描いた細長い葉が上へと重なる姿で表されるが、写し崩れたのか、根元から四方に伸びたように描かれている。一方で、葉の根元から伸びる曲線の下側に短線を連ねた描写は、首を垂れた穂を表現したものだろう。

（4）草【39・69】

【39】には、壺の頸部の付け根から胴部へと伸びる曲線の両側に、斜線が上下に連ねて彫られている。12 世紀の「草葉双鳥鏡」（第 25 図）に表された草葉文は、【39】のように文様の中心線が明確ではないが、斜線が連なり山形を形成する表現が近い。和鏡の中でも代表的な文様の一つである松喰鶴文などに描かれる松葉にも見えるが、松葉にしては大きく、大きな葉形の文様に小さな葉形が隣接する描写は、松葉とは考えにくいため、現時点では草文と判断した。【69】も【39】と同一文様である可能性が高い。

（5）桐【53】

【53】は、十字に交わる直線のうち、上方へ伸びる一本の両側に、ほぼ同じ長さの短線が平行に連続して彫られている。それ以外の左右・下方に伸びる線の両側には、斜線が連続して彫られている。これも松葉のように見えるが、13 世紀から 14 世紀にかけての「桐松双鳥鏡」（第 26 図）の文様と比較してみると、平行な短線を伴う上方へ伸びる線は桐の花房、長い斜線を伴う左右と下方へ伸びる線は、桐の葉が簡略化された桐文に見える。葉は、隣接する松葉の表現が混ざった可能性もある。季節に関係なく常緑である松と、鳳凰の住処とされる桐は、ともに吉祥文様として用いられている。

（6）蓬莱山【64・83】

【83】には、長胴形の壺の上半に、木の幹もしくは鳥獣の長い脚のような縦線が 4 本彫られている。また、その刻線の下方に 2 本の長い横線が引かれ、その上に短い縦線が連なって彫られている。一方、4 本の縦線のうちの、右端の線の上方には、彫られた曲線の一部が残っている。長い縦線は、13 世紀から 14 世紀にかけての「蓬莱鏡」（第 27 図）に表された鶴の脚にも見えるが、むしろ、海中に屹立する蓬莱山を表現した可能性が高い。下方の短線は打ち寄せる波、右上の弧線は峰にかかる雲を描写したものだろう。すると【64】も、蓬莱山の稜線から生える松を表したものと推測できるのである。松の幹から生える松葉にも見えるが、松葉が生える斜めに渡る線と平行する、幹を表現するもう 1 本の線が彫られておらず、松樹とは見なし得ない。蓬莱山も、中国で仙人が住み不老不死の神薬があると信じられた想像上の神山である。

（7）三柏文・七宝繋文【48・49】

小壺である【48】の肩には、コンパスを用いた正円形の内側に、三方に広がる柏の葉を表した「三柏（みつがしわ）文」

が彫られている。胴の上半には、同様にコンパスを用いた正円形の内側に、約４分の１の長さの円弧を逆向きに組み合わせて楕円形のようにした「七宝」を、円環状に４つ繋いだ「七宝繋文」が彫られている。【49】は七宝繋文の一部である。13 世紀から 14 世紀にかけての「三柏散松喰鶴鏡」（第 28 図）には、枠なしの三柏文、13 世紀の「菊七宝丸文散蝶鳥鏡」（第 29 図）には、中央に菊花文を加えた七宝繋文が、それぞれに表されており、文様の親近性は一目瞭然であろう。ただし、和鏡では文様が規則的に配列されているが、陶片では規則性なく散らされている。柏は日本で神が宿る縁起木とされており、七宝文は宝物を象徴する文様である。

（８）蛇籠と草【38・60・61】

壺の肩から上の陶片である【38・60・61】には、肩に二重圏線が彫られており、その曲線に沿って山形の文様が彫られている。山形の枠線の内側には、小さな山形を積み重ねて彫り、山形の頂点には、短い曲線を左右に５本積み重ねた、草のような文様が彫られている。そして、山形と山形との間には、太く大振りな筆致による草文が、二重圏線から生えたように彫られている。

この独特な山形の文様について、荒川氏は特定がやや難しいとしながらも、大嘗会に際して国司が立つべき場所を示した飾り物である「標（ひょう・しるし）の山」のようなものを表す吉祥文と推定している[22:20]。標の山の機能が神の依り代であるという通説に対して、東野治之氏は大嘗会において祭場の外に置かれていることなどから、神の依り代ではなく、むしろ祭儀の場に置かれる標識の特殊な形と解釈するべきであると提言している[22:21]。従って、当時の人々が標の山に対して吉祥性を感じ、工芸品の文様として採用したかどうかについては、慎重な検討が必要になるだろう。

そこで、和鏡の中で類似する文様を探してみると、やや時代が下る 14 世紀の「蛇籠片輪車秋草双鳥鏡」（第 30 図）に表された、中に石を入れ川の水流を調節する蛇籠と、背景の草が重なった文様が挙げられる。蛇籠の右隣には、蛇籠の下方から姿を表した草が伸びており、草の間隔が陶片とは異なるものの、モチーフの配置は類似する。ただし、蛇籠や草は和鏡の界圏に沿って配置されてはおらず、また松や鳥、片輪車などのモチーフが【38・60・61】には表されていないため、和鏡からの影響については、現段階では他の陶片ほど積極的に評価できない。和鏡に止まらない、様々な美術工芸品との比較検討による考証が必要である。

４．おわりに

中世古窯の刻画文陶器について、文様の画題・描写・構成が、同時代および前後する時代に作られた、絵巻物や和歌巻の料紙装飾、漆工品である蒔絵の箱などと共通していることは、度々指摘されてきた[22:22]。従って、三本峠北窯跡から出土した刻画文陶器の文様についても、和鏡以外の美術工芸品からの引用や影響を、念頭に置く必要はあるだろう。

しかし、本稿において刻画文陶片の画題を特定するべく、和鏡に表された文様との比較検討を行った結果、そのほとんどを和鏡に近似する文様を求めることができ、構成も和鏡から引用している可能性が高いことから、和鏡からの影響を最も強く受けていることは揺るがないだろう。対象となる和鏡の制作年代も、概ね 13 世紀を中心としており、三本峠北窯跡出土の甕の形状から推定される操業期間と矛盾しない。特に、菊花文壺における文様表現と和鏡の制作年代との密接な連動は、おそらく京都の工房で作られた和鏡の文様が、リアルタイムで陶器の刻画文に引用された証左となる。

では、どのような目的・用途でこれらの刻画文陶器は作られたのだろうか。消費地遺跡から出土した2例の丹波焼刻画文壺は、他の中世古窯と同様に蔵骨器として使用されたものである。荒川氏は、奥州平泉の柳之御所における出土状況から、渥美焼の刻画文壺や常滑焼の三筋壺が酒器として機能していた可能性を踏まえ、丹波焼の刻画文陶器も、まずは酒瓶として製作されたと推定している[註33]。しかし、生産窯を中心とする狭い範囲を流通圏とした丹波焼が、奥州平泉での渥美焼・常滑焼と同様に機能したかどうかは、畿内における酒瓶としての発掘事例が確認できないため、現時点では積極的に肯定することはできない。

三本峠北窯跡出土の刻画文陶器に表された文様は、子孫繁栄、不老不死や神仙などに関連する吉祥文がほとんどであり、またその陶片自体も、小型の壺が大半を占める。従って、三本峠北窯で作られた刻画文壺は、和鏡を用いた貴族階級が、死後の世界でも生き続けられるよう願いを込め、火葬した骨を埋納する蔵骨器として当初から作られた可能性が高いのではないだろうか。本稿における文様の再検討が、今後の中世古窯研究進展の一助になれば幸いである。

（註1）　信楽焼・越前焼・丹波焼など。丹波焼の窯跡が散在する兵庫県丹波篠山市今田町周辺から、加古川を隔てた西に所在する緑風台窯跡（兵庫県西脇市）でも、東海地方から窯業技術が導入された証となる分煙柱を有する穴窯二基が発掘されている（『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会、1983年）。

（註2）　『陶器講座』全13巻（雄山閣、1971～1982年）『日本の陶磁』古代中世篇全6巻（中央公論社、1974～1976年）、『世界陶磁全集』全23巻（小学館、1975～1987年）、『陶磁大系』全48巻（平凡社、1972～1978年）『日本陶磁全集』全30巻（中央公論社、1975～1986年）。

（註3）　『特別展日本陶磁絵巻－やきものに刻まれた絵画』（愛知県陶磁資料館・五島美術館、1988年）。

（註4）　荒川正明「中世陶器における刻画文の系譜とその特質」（『美術史』123、1988年）。

（註5）　荒川正明「日本陶磁に描かれた花鳥文様－中世刻画文陶器を中心として－」（『東洋陶磁』29、2000年）39～64頁。

（註6）　楢崎彰一「中世陶器にみる刻画文の系譜－とくに四季花鳥図について－」（『名古屋大学文学部最終講義録』、1989年）。

（註7）　荒川正明「渥美窯　秋草文壺の表象世界－「宝瓶」信仰の視点から再考する－」（『渥美窯　国宝を生んだその美と技』田原市博物館、2013年）121～126頁、同氏「中世における壺・瓶の表象世界－いわゆる「宝瓶」信仰の視点から－」（長岡龍作編『仏教美術論集』5・機能論－つくる・つかう・つたえる、竹林舎、2014年）255～271頁、同氏「珠洲焼と六古窯」（『珠洲焼資料館収蔵品図録　珠洲焼－中世・日本海に華ひらいたやきものの美』、珠洲市立珠洲焼資料館、2019年）109～114頁。

（註8）　吉岡康暢「珠洲古陶の美学」（前掲註7『珠洲焼資料館収蔵品図録　珠洲焼－中世・日本海に華ひらいたやきものの美』）94頁。ただし荒川氏が前掲註4、42～43頁で既に指摘している。

（註9）　前掲4註、38～39頁。

（註10）　奈良国立博物館編『経塚遺宝』（東京美術、1976年）309～311頁、No.8解説。安藤信策「稲荷山経塚覚え書」（『京都府埋蔵文化財論集』第6集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、2010年）。

（註11）　和鏡の縁の厚さや鈕座の呼称・分類については、久保智康『日本の美術』394　中世・近世の鏡（至文堂、1999 年）28 ～ 37 頁を参考とした。

（註12）『古鏡の美～出土鏡を中心に～』（福井県立博物館、1986 年）39 頁、No. 39 の久保智康氏作品解説。三宅敏之氏は、「稲荷山の経塚」（『朱』第 10 号、伏見稲荷大社社務所、1966 年）において、稲荷山経塚の造営者を、摂政・関白を務めた九条兼実（1149 ～ 1207）を有力な候補としている。造営者の推測については、筆者の及ぶところではないが、「甜瓜双鳥鏡」の制作年代とは矛盾しない。

（註13）　景山春樹「播磨石峯寺経塚遺宝について」（『大和文化研究』第２巻第６号、大和文化研究会、1954 年。難波田徹「瓜に蝶鳥刻文壺」（『学叢』１、京都国立博物館、1979 年）

（註14）　前掲註４、38 ～ 39 頁。

（註15）　森田稔「「石峯寺経塚」遺物の再検討」（『神戸市立博物館研究紀要』８、神戸市立博物館、1991 年）

（註16）『やきもののふるさと　丹波』（兵庫陶芸美術館、2005 年）150 頁、No. 4 の松岡千寿氏作品解説。

（註17）　本稿でとりあげた京都国立博物館所蔵の和鏡の制作年代については、京都国立博物館編『京都国立博物館蔵　和鏡』（京都国立博物館、1997 年）に依拠した。

（註18）　久保智康氏は、外区註１に表された蝶のように見える昆虫を蜜蜂としている。前掲註16、82 頁、No. 31 作品解説。

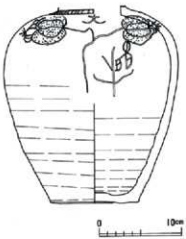
（註19）　前掲註15、17 頁および 21 頁。

（註20）　前掲註５、51 ～ 52 頁。

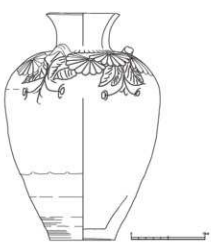
（註21）　東野治之「大嘗会の作り物－標の山の起源と性格－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』114、国立歴史民俗博物館、2004 年）

（註22）　前掲註４、40 ～ 41 頁および前掲註11。

（註23）　前掲註５、49 ～ 53 頁。



第16図　丹波焼　瓜蝶鳥文壺　13世紀　神戸市立博物館



第17図　丹波焼　菊花文三耳壺　12世紀後半
個人蔵

第18図　甜瓜双鳥鏡　12世紀末～13世紀初頭
東京国立博物館（E-14625）

第19図　瓜蝶雀鏡　12世紀後半～13世紀
神戸市立博物館

第20図　菊花蝶鳥鏡　13世紀
京都国立博物館（E甲17-58）

第21図　群蝶双鳥鏡　12世紀末～13世紀前半
京都国立博物館　(E甲17-64)

第22図　菊花双鳥鏡　13世紀
京都国立博物館　(E甲17-12)

第23図　菊花蝶鳥鏡　12世紀前半～中葉
京都国立博物館　(E甲17-13)

第24図　洲浜萩薄双鳥鏡　13世紀
京都国立博物館　(E甲17-50)

第25図　草葉双鳥鏡　12世紀
京都国立博物館　(E甲17-21)

第26図　桐松双鳥鏡　13～14世紀
京都国立博物館　(E甲17-40)

第27図　蓬莱鏡　13～14世紀
京都国立博物館　(E甲17-65)

第28図　三柏散松喰鏡　13～14世紀
京都国立博物館　(E甲17-86)

第29図　菊七宝丸文散蝶鳥鏡　13世紀
京都国立博物館　(E甲17-27)

第30図　蛇籠片輪車秋草双鳥鏡　14世紀
京都国立博物館　(E甲17-72)

【実測図・拓影・画像出典】

第16図実測図：森田稔「「石峯寺経塚」遺物の再検討」(『神戸市立博物館研究紀要』8、神戸市立博物館、1991年)

第16図・拓影：吉岡康庸「珠洲系陶器の刻画文について」(『考古学雑誌』67巻第2号、1981年)

第17図実測図：赤羽一郎氏から実測図を提供いただいた。記して感謝申し上げます。

第18図・第20図～第30図：東京国立博物館および京都国立博物館所蔵品の画像
：ColBase (https://colbase.nich.go.jp/)
各画像には所蔵館における管理番号を(　)で付記した。

第19図：神戸市立博物館提供

第３節　三本峠北窯跡の評価

今回、調査研究事業で45年前の発掘調査成果を資料化し報告することができ、改めて、丹波焼のはじまりについて考える機会を得た。出土資料を整理して、わかった事、さらに今後の課題を記して報告書のまとめとしたい。

１．三本峠北窯灰原資料と窯体内との資料の比較について

確認調査の結果、北窯跡の窯体内の資料は、何らかのアクシデントにより焼成時のまま、床面に残存していることが判明した。まず、最終焼成品と灰原資料の比較を行う。

灰原から出土している甕は、L字状口縁をもつものが多く（河野論文１期）、下部に拡張した口縁端部をもつものは少ない。一方、窯体内出土の甕には、L字状口縁はなく、口縁端部が下部に拡張するものが出土している（河野論文２期）（第14･15図参照）。ここから、最終段階の窯体資料と灰原の間には、明らかな型式変化がみられる。このことは鉢にも当てはまり、灰原から出土している鉢には、おろし目はないが、窯体内から出土した鉢には、おろし目がないものとヘラで１本づつおろし目が施されたものの両方が出土している。出土資料から見て、北窯では数回の焼成が想定できる。さらに、同じ丘陵の東側にある南窯跡の資料を見てみると、やや外傾し下に拡張した口縁部の甕が出土している（河野論文２期）。南窯跡の資料は図化されたものが少ないため、詳細は不明だが、今ある資料からすると、北窯跡の最終床面の資料と、時期的に大きな隔たりはないと考えられる。南窯跡の確認調査では、厚い堆積の灰原が検出されている[注１]。南窯跡の確認調査資料については、今後調査研究を行い、より詳細な検討を行う必要がある。

河野論文によって、中世の丹波窯について、分布調査の数少ない資料から、甕の型式分類による窯跡の変遷をたどることができた。今のところ丹波焼で最も古いとされるL字状口縁の甕が、三本峠北窯跡以外に、武士ケタ支群、三田市大武窯跡からも出土し、この時期から複数の窯で操業を行っていたことが判明した。現在の立杭地区の東側にある虚空蔵山の南西の尾根筋にこれら古い窯跡が存在し、さらに三田市側に伸びる南先端部分にある大武窯跡でもこの型式の甕が見つかっていることは、丹波焼のはじまりを考える上で重要である。

刻画文陶器は、灰原では出土しているが、窯体内では確認できず、南窯では数点出土しているのみである。このことから、刻画文陶器は三本峠北窯跡の早い段階に焼成されたと考えられ、時間が過ぎるとともに、その生産は減っていったと考えられる。

２．三本峠北窯跡灰原出土の資料から見る丹波焼の系譜

三本峠北窯跡の灰原調査が行われる以前は、丹波焼の発生は備前焼などと同様に、平安時代以降の須恵器から生まれたと考察されてきた。しかし、三本峠北窯跡の発掘調査の結果、刻画文陶器や甕の形態から、丹波窯が須恵器の系譜ではなく、常滑焼、渥美焼などの技術を導入し成立した瓷器系の窯跡であることが判明した。今回、資料を整理し、改めて丹波焼の系譜について再検討を行う。

（１）甕

灰原資料で最も多く出土しているのが甕である。大型のものが多いため破損が多く、完全な形のものはほぼない。形態は胴部が張るソロバン玉形で、上部につまみあげるL字状の口縁端部をもつ。三本峠

北窯跡の甕については、発掘調査当時から常滑窯との関係性が指摘されてきた。形態からすると、前述の河野論文にも指摘があるが、常滑第２段階（５型式）、13 世紀第２四半期のものに類似する[註2]。製作技法を見てみると、粘土紐を巻き上げ指で接合を行ったのち、内面はあまり調整を行わず指圧痕が残ったまま、外面は回転ナデ調整を行っている。この時期の須恵器甕の調整で行われる外面タタキは、三本峠北窯跡の甕には数点のみでほとんど確認することができなかった。甕については、形態も調整技法も地元産須恵器の影響はあまり見られない。したがって瓷器系の産地に系譜を求めることが妥当であろう。ただし、この時期の常滑焼に甕に施される押印文は今のところ確認できない。

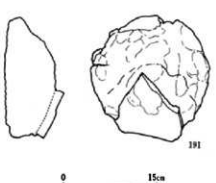
（2）壺

壺の生産量は多くなく、壺には刻画文陶器とよばれる線刻の文様が施されているものが多い。刻画文陶器は、瓷器系陶器である渥美焼などの影響が想定されていた。しかし、丹波の文様は他産地との共通性は少なく、共通する文様は渥美焼の国宝秋草文壺にみられる薄や瓜などと、蓮弁文である。ただ、その蓮弁文も文様形態は全く同じではない[註3]。丹波の刻画文は他産地と異なり、写実的ではなくデザイン化が進んでおり、梶山論文のとおり、和鏡の鈕座を模した沈線帯が、頸部の廻りに施されているものが多い。文様と関係があるかは不明だが、壺の口縁、頸部形態もばらつきがあり、他産地ではあまりみられない無頸壺がある。

第 31 図　碗の切り離し（切り離し後ヘラナデ）

（3）鉢、碗

三本峠北窯跡は播磨・摂津・丹波の国境にある。播磨では東播系須恵器、摂津三田市城でも須恵器生産が行われていたため、三本峠北窯跡の鉢、碗に関しては、当初から地元の須恵器工人の関与が想定されていた[註4]。このため、今回は、三本峠北窯跡の窯体内の資料も含めて 30 点以上の碗を検討した結果、形は、三田市城の同時期の須恵器碗[註5]に類似するが、底部切り離しの痕跡は、須恵器と同様の回転糸キリの痕跡は確認できなかった。三本峠の碗は静止糸キリか、もしくはナデ調整を行っている（第 31 図）。形は類似するが、切り離しの製作技法は全く異なっていた。



第 32 図　常滑窯の焼台（刀池古窯跡群）[註8]

（4）羽釜・鍋

数は少ないが灰原からは土師器の器種である羽釜・鍋もそれぞれ３点ほど出土しており、これらは三本峠北窯跡で製作されたと考えている。羽釜は土師質で、鍔と口縁部の間に焼成前穿孔されたものがある。一方、鍋については、硬質で外面にタタキ調整がある。この形態の鍋は、丹波や播磨での出土が知られている。鍋は煮炊きに使用されるため、本来土師器であったものが、13 世紀前後から窯で高火度焼成された硬質のものが消費地で出土する[註6]。この硬質の鍋の出現と丹波窯のはじまりの時期はおおむね重なる。この鍋の生産地は、今のところこの三本峠北窯跡以外に、数例知られている[註6]。ただし、

少数ではあるが、常滑窯でも羽釜や鍋の製作が認められるため、系譜に関しては今後検討が必要と考えている[註7]。

（5）焼台

三本峠北窯跡では、粘土の塊のような焼台が多く見つかっている。径15cmほどのもので、窯の傾斜する床面に製品を固定するために使用されていた（報告番号142～145）。このような焼台は、「馬爪」などとよばれているもので、常滑窯、渥美窯などで知られており、大型の甕になると複数使用される（第32図）[註8]。しかし播磨や摂津の須恵器窯には、この形の焼台はない。ただし、三本峠北窯跡より少し古い瓷器系の西脇市緑風台窯跡からはこの焼台が見つかっている[註9]。

以上、器種別にその系譜関係を取り上げた。ここでは、形の模倣より製作技法に注目したい。三本峠北窯跡は、須恵器生産が活発な地域に隣接しているため、当初から、須恵器工人との関係が指摘されていた。しかし実際に資料を確認すると、前述のとおり須恵器に特徴的なタタキ調整や、回転糸キリなどが三本峠北窯ではほとんど見られなかった。このことは、三本峠北窯跡の系譜を考える上で最も重要であると考えている。さらに、焼台の存在により、常滑窯や渥美窯の窯業技術を踏襲している可能性が高く、情報の伝播にとどまらない、工人の移動の可能性が高いと考えられよう。

3．丹波焼のはじまりについて

ここまで三本峠北窯跡の整理作業を行って判明したことを、最後に整理すると以下の通りとなる。

1　三本峠北窯跡は、焼台などから常滑窯や渥美窯などの生産技術が直接導入されていた可能性が高い。生産された器種についても、地元の須恵器の影響はあまり見られない。

2　甕の形状を常滑窯の編年と比較すると、開始年代は13世紀半ばごろに想定できる。

3　刻画文陶器の文様については、常滑、渥美の直接的な影響よりも、和鏡から引用した可能性が高い。

4　重要文化財の菊花文三耳壺（個人蔵）は、梶山論文にも言及されているとおり、三本峠北窯跡よりさらに古い窯が周辺にあり、そこで生産されたと想定される。

5　三本峠北窯跡よりさらに古い窯で刻画文陶器を生産していたと想定すると、丹波窯の開窯は刻画文陶器の生産が契機となった可能性が高い。

三本峠北窯跡の窯体確認調査では、現地表面から床面までが、185cmと深く、今のところ現地表面上では確認できなくても、この三本峠北窯跡の斜面周辺により古い窯が存在する可能性は否定できない。さらに想像をたくましく考えると、河野論文で示されたように、1期の窯が複数存在することは、まずどこか1ヵ所に瓷器系の技術が直接入り、そこから周辺に拡散していったと考えるほうが、より自然であろう。その瓷器系の技術で最初につくられた窯で、刻画文陶器の優品が製作されたと想定しておきたい。つまり刻画文陶器の生産が丹波焼誕生のきっかけとなった可能性が高いのである。

三本峠北窯跡の資料では、甕は常滑窯、刻画文陶器は渥美窯などの瓷器系の複数の産地の特徴が見られる。常滑窯や渥美窯などとの詳細な比較や、刻画文陶器の消費地における動向、さらに刻画文陶器の需要層の問題については、今後の課題である。今回は中世の丹波焼の資料について、丹波篠山市の協力をいただきながら、今までに見つかっている丹波焼の陶片を、できるだけ資料化した。丹波焼の歴史を解明するための次の展開としては、窯構造の把握などを目的とした学術的な発掘調査の必要性をここに記してむすびとしたい。

【参考・引用文献】

（註１）成田雅俊　2000『三本峠北・南窯跡－丹波焼窯跡範囲確認調査概要報告書－』篠山市教育委員会

（註２）中野晴久　2012「第１章　総論　第３節常滑窯」『愛知県史』別編　窯業３　中世・近世　常滑系　愛知県

（註３）安井俊則　2012「第４章　特論　第１節　押印・刻文　１　渥美窯の押印・刻文」『愛知県史』別編　窯業３　中世・近世　常滑系　愛知県

（註４）森田　稔　1991「「石峯寺経塚」遺物の再検討」（『神戸市立博物館研究紀要』８、神戸市立博物館

（註５）吉田　昇　1988「井ノ方窯跡」兵庫県文化財調査報告書 62 冊『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（２）』兵庫県教育委員会

（註６）宮原文隆　1992「中世の土師質場について」中町文化財報告２『門前・上山遺跡』兵庫県多可郡中町教育委員会

（註７）尾野善裕　1997「［４］東海・濃飛」「共同研究　中世食文化の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集

（註８）余合昭彦ほか　1995　愛知県埋蔵文化財調査報告第 64 集『刀池古窯跡群』　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

（註９）岸本一郎　1983　西脇市埋蔵文化財調査報告１『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会

遺物観察表

［　］は復元値　（　）は残存値

報告番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
1	甕	[32.26]	47.95	[15.96]	三本峠北窯跡灰原	器形は大きく焼け歪む。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は緩やかに外上方に立ち上がり体部中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は大きく外方に開き、側面に端面もつ。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整の後、斜め方向の仕上げナデ調整。体部内面　指頭圧痕が全面に残る。	焼成堅緻。色調　外面　灰白色、内面　暗赤褐色に発色。甕Ⅰ類。
2	甕	[33.5]	(45.1)		三本峠北窯跡灰原	焼成に失敗して器形は大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上り、上位で大きく屈曲、撫肩を呈する。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	体部内外面　ヨコナデ調整。体部内面中位に指頭圧痕が残る。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　にぶい褐色に発色。外面　褐色に発色。内外面とも自然釉が付着する。暗灰色に発色。甕Ⅰ類。
3	甕	[30.9]	(20.5)	腹径 [45.15]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は「く」の字状に大きく屈曲。口縁部は外方に開き、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。露胎部　褐色に発色。甕Ⅰ類。
4	甕	[33.9]	(21.0)	腹径 [50.6]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾する。口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面中位に平行叩き目が残る	焼成堅緻。内外面とも褐色に発色。外面に自然釉が粒状に付着。淡暗緑灰色に発色。甕Ⅰ類。
5	甕	[34.4]	(28.5)	腹径 [52.5]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は中央で大きく「く」の字状に屈曲。口縁部は外方に開く。口縁部側面は強いヨコナデ調整により窪む。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。内外面に指頭圧痕が残る。淡暗緑色に発色。自然釉付着。内外面とも器面が爆ぜる。甕Ⅰ類。
6	甕	[31.8]	(35.1)	腹径 [40.4]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は僅かに外方に開く。口縁端部は側面に端面を持つ。口縁端部は上下につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　茶褐色に発色。外面全面に自然釉付着。暗緑色に発色。甕Ⅰ類。
7	甕	[30.0]	(32.8)	腹径 [41.0]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方に開き、側面に端面をもつ。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面の中位、刷毛目状のナデ調整。内面上位指頭圧痕が残る。	焼成　堅緻。色調　外面　にぶい赤褐色。内面　暗赤褐色に発色。胎土中に細かい砂粒を少量含む。甕Ⅰ類。
8	甕	[32.15]	(31.1)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は中位で「く」の字状に大きく屈曲。算盤玉状を呈する。口縁部は外方に開き、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部は側面に端面を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。色調　内外面ともにぶい褐色に発色。甕Ⅰ類。
9	甕	[26.6]	(19.4)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部内傾。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部は側面に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。暗黄緑色に発色。内面　にぶい褐色に発色。甕Ⅰ類。
10	甕	[29.75]	(16.7)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成は極めて堅緻。外面　部分的に自然釉付着。露胎部　暗茶褐色に発色。内面　灰被り　器面が爆ぜる。淡茶褐色に発色。甕Ⅰ類。
11	甕	[28.66]	(14.9)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成は極めて堅緻。外面　自然釉が付着。淡黄緑色に発色。口縁部内面　自然釉が付着。淡黄緑色に発色。体部内面　茶褐色に発色。甕Ⅰ類。
12	甕	[32.5]	(9.2)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部はやや内傾。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成は極めて堅緻。外面　全面に自然釉付着。淡黄緑色に発色。口縁部内面自然釉付着。甕Ⅰ類。
13	甕	[38.95]	(10.7)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部はやや内傾する。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部は強い回転ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成は堅緻。暗赤褐色に発色。外面に自然釉付着。淡暗灰色に発色。甕Ⅰ類。
14	甕	[29.85]	(13.9)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾する。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部は強い回転ナデ調整。	焼成は非常に堅緻。赤褐色に発色。内外面とも自然釉付着。淡暗緑灰色に発色。甕Ⅰ類。
15	甕	[31.8]	(11.3)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成は極めて堅緻。外面　自然釉が全面に付着。淡暗緑色に発色。内面　口縁部下に自然釉付着。露胎部　茶褐色に発色。甕Ⅰ類。
16	甕	[40.3]	(11.0)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成は極めて堅緻。外面　自然釉が全面に付着。淡暗緑色に発色。内面　口縁部下に自然釉付着。露胎部　茶褐色に発色。甕Ⅰ類。
17	甕	[60.6]	(12.0)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部内面が窪む。	焼成堅緻。暗灰色に発色。甕Ⅰ類。
18	小甕	16.3	31.0	13.0	三本峠北窯跡灰原	焼成失敗品。大きく歪み、割れる。粘土紐巻き上げ成形。平底。底径は比較的小さい。体部は緩やかに外上方に立ち上り、中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方に開き、側面に端面をもつ。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　茶褐色に発色。外面全面に自然釉付着。暗緑色に発色。甕Ⅰ類。
19	小甕	[18.9]	(11.6)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。頸部は短く直立し、口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面とも回転ナデ調整。体部外面　斜め方向の板ナデ調整。体部内面　ヨコ方向のナデ調整。	焼成堅緻。灰色に発色。甕Ⅰ類。
20	小甕	22.9	(9.45)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開き、側面に端面を持つ。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成　堅緻。　にぶい赤褐色に発色。外面　自然釉付着。暗緑色に発色。甕Ⅰ類。
21	小甕	[20.7]	(9.6)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部内湾。頸部短く直立。口縁部は外面に端面を持ち、口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも灰色に発色。甕Ⅰ類。
22	小甕	[18.6]	(7.2)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。器壁は比較的厚い。体部は外反する。口縁部は外方に開く。口縁部側面は強いナデにより窪む。口縁端部は丸味をもち、上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面に平行叩き目が残る。	焼成堅緻。灰色に発色。内外面とも自然釉付着。淡暗緑灰色に発色。甕Ⅰ類。
23	甕	[25.6]	(30.4)	[14.8]	三本峠北窯跡灰原	焼成に失敗して大きく歪む。図は移動復元。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は斜め上方に立ち上り、中位で「く」の字状に大きく屈曲する。口縁部は僅かに外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。内外面ともにぶい赤褐色に発色。体部外面　自然釉付着　暗緑灰色に発色。甕Ⅱ－1類。
24	甕	[24.8]	(29.0)	腹径 [34.3]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方に開き、側面に端面をもつ。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面には指押え痕が残る。	焼成堅緻。色調　外面　にぶい赤褐色、内面　にぶい赤褐色に発色。外面の口縁部から体部上半にかけて自然釉付着。甕Ⅱ－1類。

報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
25	甕	27.5	(35.5)	15.5	三本峠北窯跡灰原	焼成に失敗して器形は大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は緩やかに斜め上方に立ち上り、中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面中位に指頭圧痕が残る。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面ともほぼ全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。甕Ⅱ－1類。
26	甕	[37.8]	(16.0)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。口縁部は外方に開く。口縁端部は外方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成堅緻。外面　灰被り。器面が爆ぜる。内面　褐色に発色。甕Ⅱ－1類。
27	甕	[32.25]	(12.0)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも灰黄色を呈する。甕Ⅱ－1類。
28	甕	[25.5]	(6.4)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成堅緻。外面　灰被りにより、器面が爆ぜる。内面　暗灰色に発色。甕Ⅱ－1類。
29	甕	[39.3]	(17.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は僅かに外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は下方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面暗茶褐色に発色。甕Ⅱ－2類。
30	甕	[29.7]	(13.6)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　灰色に発色。内面自然釉が部分的に付着。灰色に発色。甕Ⅱ－2類。
31	甕	[26.0]	(23.5)	胴径 [36.4]	三本峠北窯跡灰原	焼成に失敗して器形は大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形。体部は緩やかに斜め上方に立ち上り，中位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面中位に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。内面　にぶい褐色に発色。外面　褐色に発色。内外面とも自然釉が付着する。暗灰色に発色。甕Ⅱ－2類。
32	甕	[29.7]	(14.3)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内傾。口縁部は僅かに外方に開く。口縁部はN字状口縁が頸部に貼り付いた形で、側面に端面を持ち、端部は上下につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻　褐色に発色。外面に自然釉が厚く付着。暗緑灰色に発色。甕Ⅱ－2類。
33	甕	[49.5]	(10.7)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕。	焼成堅緻。外面　灰色に発色。内面灰色に発色。甕Ⅱ－2類。
34	甕	[28.2]	(38.0)	[13.8]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部はほぼ直線的に外上方に立ち上る。体部中位で緩い「く」の字状に屈曲する。口縁部は僅かに外方に開き。端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面中位に緩い沈線が1条巡る。沈線の直上には綾杉状の文様？が認められる。	焼成堅緻。色調　外面　暗赤褐色、内面　灰色に発色。胎土中に細かい砂粒を少量含む。
35	壺	[16.02]	41.45	13.2	三本峠北窯跡灰原	焼成に失敗して、底部は大きく焼け歪む。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は内湾気味に緩やかに外上方に立ち上り，体部上位で大きく「く」の字状に屈曲して肩部を形成する。頸部は短くやや外方に開く。口縁端部は丸味をもち、下方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面には粘土の繋ぎ目、指頭圧痕が明瞭に認められる。頸部　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　にぶい赤褐色に発色。体部外面に火膨れが見られる。外面に自然釉付着。壺Ⅰ類。
36	壺	[17.2]	(30.7)	胴径 [42.8]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部はほぼ直立。体部上位で大きく屈曲。撫肩を呈する。頸部は短く僅かに外方に開く。口縁部は丸味をもち，端部を下方に引き出す。	内外面ともヨコナデ調整。頸部から口縁部内外面　強い回転ナデ調整。肩部外面　ケズリ調整。	焼成堅緻　内面　にぶい赤褐色に発色。外面　全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。壺Ⅰ類。
37	大型四耳壺	[20.4]	48.3	15.52	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。底部が大きく歪む。平底。体部は緩やかに外上方に立ち上り，上位で大きく「く」の字状に屈曲する。頸部は短く外傾し，口縁端部は下方に引き出す。体部外面上位に4カ所縦耳を貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面下半回転ナデの後、縦方向のナデ調整。体部内面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。暗赤褐色に発色。焼成中に倒れたために，自然釉が横方向に掛かる。また，そのために，器面には砂粒や小石が付着する。壺Ⅰ類。
38	刻画文壺	[11.15]	36.7	[15.3]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。体部上位で内湾する。頸部は僅かに外方にひらく。口縁端部は小さい玉縁状を呈する。	内外面とも回転ナデ調整。体部上位にヘラ状工具で山形文と草文施文。	焼成堅緻。暗灰色に発色。部分的に自然釉が付着。淡暗緑灰色に発色。壺Ⅱ－1－a類。
39	刻画文壺	[13.2]	(8.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。頸部は直立。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面上面にヘラ状工具で草文施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面暗褐色に発色　外面　自然釉付着　暗緑灰色に発色。壺Ⅱ－1－a類。
40	刻画文壺	7.7	(9.6)		三本峠北窯跡灰原	器形は全体に大きく焼け歪む。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。頸部は短く直立する。口縁端部は水平に外方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文施文。	焼成堅緻。褐色に発色。外面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。外面の陶片付着。壺Ⅱ－1－a類。
41	刻画文壺	[14.1]	24.0	[14.0]	三本峠北窯跡灰原	焼成時にひしゃげて大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は内湾気味に外上方に立ち上る。体部上位で大きく屈曲して撫肩を呈する。頸部はやや外傾し、口縁部は外方に開く。口縁端部は外面に端面をもち、上方につまみ出す。	底部の器壁は比較的厚い。内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面は強い回転ナデ調整。外面の頸部直下に放射状文、さらに沈線で画して蓮弁文を施文する。	焼成堅緻。内外面とも器面に灰被りが見られ、器面が爆ぜる。内外面とも暗灰色に発色。壺Ⅱ－1－b類。
42	刻画文壺	横 (5.2)	縦 (3.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で蓮弁文と沈線を3条施文。	焼成やや軟質。内外面とも灰白色に発色。
43	刻画文壺	[16.8]	(8.5)		三本峠北窯跡灰原	蓮弁文壺。器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。頸部は僅かに外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち。端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面にヘラ状工具で蓮弁文を施文。	焼成堅緻。外面　自然釉が付着。器面が爆ぜる。灰色に発色。内面　自然釉が部分的に付着。暗緑灰色に発色。露胎部　暗褐色に発色。壺Ⅱ－1－b類。
44	壺	[8.65]	(3.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。頸部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方に開く。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも自然釉付着。暗緑灰色に発色。外面の露胎部　灰白色に発色。壺Ⅱ－1－c類。
45	壺	8.9	(6.45)		三本峠北窯跡灰原	口縁部のみ残存。粘土紐巻き上げ成形。頸部は短く直立。口縁部は外方に開く。	内外面とも回転ナデ調整。口縁端部は強い回転ナデ調整。端部は尖り気味。	粘土紐の繋ぎ目が明瞭に観察出来る。焼成堅緻。灰白色に発色。外面　灰被り。壺Ⅱ－1－c類。
46	壺	[7.2]	(3.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。頸部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方に開く。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面　自然釉付着。淡暗緑色に発色。壺Ⅱ－1－a類。
47	刻画文壺	横 (4.2)	縦 (3.0)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面　ヘラ状工具で施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面灰色に発色。
48	刻画文壺	6.4	25.8	[9.3]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。体部上位で大きく屈曲し、撫肩を呈する。頸部の無い無頸壺。	内外面ともヨコナデ調整。体部内面上位に指押え痕。体部外面上位にぶんまわし（コンパス）を用いて円を描き円内に三つ柏文を描く。体部外面中位に同様に円内に七宝繋文を描く。	焼成堅緻。内外面とも暗灰色に発色する。還元炎焼成。
49	刻画文壺	横 (2.6)	縦 (4.8)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で七宝繋文施文。	焼成堅緻。色調　外面　灰色。内面灰白色。

報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
50	刻画文壺	[6.45]	(3.75)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。	内面　ケズリ調整。内外面とも回転ナデ調整。外面　ヘラ状工具で菊花文施文。	外面　灰釉付着。淡黄緑色に発色。内面　にぶい赤褐色に発色。
51	刻画文壺	横(13.2)	縦(10.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面にヘラ状工具で菊花文と蝶文を施文。	焼成堅緻。外面　部分的に灰釉付着。外面　器面が爆ぜる。
52	刻画文壺		(11.35)	胴径[20.0]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。壺の体部片。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で薄文施文。	焼成堅緻。外面　部分的に灰被り。にぶい赤褐色に発色。内面　灰褐色に発色。
53	刻画文壺		(5.5)	胴径[23.0]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。壺の体部片。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で柳文施文。	焼成堅緻。内外面とも灰色に発色。外面　僅かに灰被り。
54	刻画文壺	横(10.5)	縦(8.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で萩文施文。	焼成堅緻。外面に自然釉付着。暗黄緑色に発色。露胎部　にぶい黄褐色に発色。内面　暗灰黄色に発色。
55	刻画文壺	横(11.5)	縦(8.5)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で萩文施文。	焼成堅緻。外面　自然釉全面に付着。暗緑灰色に発色。
56	刻画文壺		(4.3)	胴径[20.0]	三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面ともヨコナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文を施文。	焼成堅緻。外面　褐色に発色。内面　にぶい黄褐色に発色。
57	刻画文壺		(7.15)	胴径[20.0]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。菊花文壺の肩部片。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文施文。	焼け歪みあり。焼成堅緻。外面　部分的に自然釉付着。内面　褐色。外面　灰色に発色。
58	刻画文壺	横(5.3)	縦(6.6)		三本峠北窯跡灰原	菊花文壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文施文。外面に縦耳の剥離痕あり。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑色に発色。内面　にぶい黄褐色に発色。
59	刻画文壺		(4.9)	胴径[21.0]	三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文と蝶文を施文。	内面　暗赤褐色に発色。
60	刻画文壺	横(3.0)	縦(4.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で山形文施文。	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。暗黄緑色に発色。内面　灰白色発色。
61	刻画文壺		(5.4)	胴径[24.0]	三本峠北窯跡灰原	壺片。粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で山形文と草文施文。	焼成堅緻。外面全面に自然釉付着。暗灰緑色に発色。
62	刻画文壺		(10.2)	胴径[24.0]	三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で瓜文を施文。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑色に発色。内面　褐色に発色。
63	刻画文壺	横(8.7)	縦(11.7)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で瓜文施文。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑灰色に
64	刻画文壺	横(8.3)	縦(7.9)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で蓬莱山施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面　暗茶褐色に発色。
65	刻画文壺	横(8.0)	縦(10.5)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文施文。	焼成堅緻。外面　自然釉が全面に付着。暗緑灰色に発色。内面　鈍い赤褐色に発色。
66	刻画文壺	横(6.5)	縦(8.5)		三本峠北窯跡灰原	菊花文壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面　ヘラ状工具で菊花文施文。	外面　自然釉付着。淡暗緑色に発色。内面　黄褐色に発色。
67	刻画文壺	横(4.6)	縦(4.5)		三本峠北窯跡灰原	菊花文壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で菊花文施文。	焼成堅緻。外面　部分的に自然釉付着。露胎部　灰白色に発色。内面　褐色に発色。
68	刻画文壺	横(4.5)	縦(4.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で草花文？施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面　暗茶褐色に発色。
69	刻画文壺	横(3.5)	縦(4.0)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で草文施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面　暗茶褐色に発色。
70	刻画文壺	横(4.2)	縦(4.2)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で草花文施文。	焼成堅緻。外面　灰白色に発色。内面　褐色に発色。
71	印花文壺	頸[10.0]	(5.85)	胴径[21.6]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部はやや内湾する。	内外面とも回転ナデ調整。外面に印花で菊花文施文。	焼成堅緻。外面に自然釉が全面に付着。暗緑灰色に発色。内面　暗赤褐色に発色。
72	刻画文壺		(5.2)	胴径[39.3]	三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面にヘラ状工具で不明文施文。	焼成堅緻　にぶい黄橙色に発色。外面　自然釉付着。暗緑灰色に発色。
73	刻画文壺		(5.9)	胴径[29.4]	三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面　ヘラ状工具で沈線２条と草花文施文。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑色に発色。内面　にぶい赤褐色に発色。
74	壺	横(10.7)	縦(8.6)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面にヘラ状工具で沈線３条施文。	焼成堅緻。外面　部分的に自然釉付着。暗緑灰色に発色。露胎部　鈍い赤褐色に発色。内面　全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。
75	壺	横(7.0)	縦(4.0)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で沈線２条施文。	焼成堅緻。外面　自然釉が部分的に付着。暗緑灰に発色。露胎部　灰白色に発色。
76	刻画文甕	頸[25.6]	(17.0)		三本峠北窯跡灰原	甕の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。内面に指頭圧痕が見える。外面にヘラ状工具で「大」の字状文を施文。	焼成堅緻。にぶい赤褐色に発色。外面全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。
77	刻画文壺	横(7.7)	縦(6.0)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面指頭圧痕が残る。体部外面にヘラ状工具で「大」字状文と円弧文施文。	焼成堅緻。内外面ともにぶい灰白色に発色。体部外面　器面は爆ぜる。
78	刻画文壺	横(5.5)	縦(4.0)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。	体部外面に　ヘラ状工具で施文？	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。内面　褐色に発色。
79	刻画文壺	横(5.1)	縦(5.7)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面　陰描き文　窯印？	外面　自然釉付着。暗緑色に発色。内面　褐色に発色。焼成堅緻。
80	刻画文壺	横(8.2)	縦(11.3)		三本峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で草花文を施文。	焼成堅緻。外面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。内面　暗茶褐色に発色。
81	三耳壺？	頸[8.4]	(13.9)	胴径[21.8]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部の一部のみ残存。体部大きく内湾。	外面の口縁部直下と体部にヘラ状工具で沈線を２条施す。口縁部直下に縦耳を貼付。縦耳に縦方向に沈線２条。	焼成堅緻。口縁部直下にヘラ状工具で「田」字状に施文。外面全面に自然釉付着。淡黄緑色に発色。内面　無釉　にぶい黄褐色に発色。
82	三耳壺？	頸[9.0]	(8.45)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾して、頸部は直立する。	内外面とも回転ナデ調整。頸部直下に沈線２条施文。沈線の外側に横耳を貼り付ける。	焼成堅緻。器面は全面に自然釉が付着するが、部分的に爆ぜる。爆ぜた部分は灰色を呈する。
83	刻画文壺		(23.9)	[11.15]	三本峠北窯跡灰原	器形は大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形。底部の器壁は厚い。底部と体部の界が明瞭に観察される。体部はほぼ直線的に外上方に延び、体部上位で僅かに内湾する。	内外面とも回転ナデ調整。内面の体部上位に指頭圧痕。体部外面上位にヘラ状工具で施文。蓬莱山文。	焼成堅緻。内面　自然釉付着。露胎部　明黄褐色に発色。外面　自然釉が帯状に付着。露胎部　褐色に発色。
84	壺		(4.4)	[8.0]	三本峠北窯跡灰原	壺の底部片。粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に立ち上る。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻　暗褐色に発色。
85	壺		(23.05)	(11.4)	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は内湾してほぼ直上に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　自然釉が飴状に付着。外面の露胎部　茶褐色に発色。内面　にぶい褐色に発色。
86	甕（底部）		(16.5)	10.6	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面下位　回転ヘラケズリ。	焼成堅緻。色調　外面　暗赤褐色。内面　灰赤色に発色。

報告番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
87	壺		(24.5)	11.55	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は内湾気味に外上方に立ち上る。体部上位で大きく屈曲し、撫肩を呈する。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面下位　軽いケズリ調整。体部内面上位指頭圧痕。	焼成堅緻。外面の一部に自然釉付着淡暗緑色に発色。露胎部　灰色に発色。内面　にぶい黄橙色に発色。
88	小壺	[4.6]	9.4	[6.9]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、肩部で大きく屈曲して、撫肩を呈する。頸部は短く直立する。口縁部上面に端面を持ち、端部は水平に摘み出す。	器形に対して、器壁は非常に厚い。内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面に強い回転ナデ調整。外面の口縁部直下、肩部、体部下半にそれぞれヘラ状工具で沈線２条施文。	焼成堅緻。褐色を呈する。外面の体部上半に自然釉付着。暗緑灰色に発色。
89	小壺	[5.7]	(6.0)	胴径 [12.6]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾。体部中央で「く」の字状に屈曲。頸部は短く内傾する。口縁端部は外方につまみだす。	内外面ともケズリ調整の後、回転ナデ調整。口縁直下－体部上位にかけて沈線を４条施文。体部外面中位に「十」状文をヘラ状工具で施文。窯印か？口縁の１か所鷹口状に成形。	焼成堅緻。外面　やや還元気味で灰色に発色。内面　酸化気味で暗茶褐色に発色。
90	小壺	[3.95]	(4.85)	胴径 [11.4]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾。頸部は短く直立。口縁端部は水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で沈線３条施文。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑灰色に発色。内面　褐色に発色。
91	小壺	[6.0]	(1.6)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は僅かに外方に開く。口縁端部は斜め方向に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも自然釉付着。外面　褐色に発色。内面　淡緑灰色に発色。
92	小壺		(3.25)	胴径 [10.6]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲。頸部は直立。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で沈線３条施文。	焼成堅緻。外面に自然釉付着。淡暗緑色に発色。内面　茶褐色に発色。
93	小壺		(3.8)	胴径 [11.0]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく屈曲する。	内外面ともヨコナデ調整。外面の口縁部直下に沈線２条。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗緑灰色に発色。内面　暗灰黄色に発色。
94	小壺	[7.4]	(7.7)	胴径 [11.0]	三木峠北窯跡灰原	器壁が非常に厚い。粘土紐巻き上げ成形。体部は大きく内湾。口縁部は外方に開く。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも自然釉付着。外面の露胎部　褐色に発色。内面　淡緑灰色に発色。
95	小壺	[4.55]	(10.2)	[8.1]	三木峠北窯跡灰原	完形。粘土紐巻き上げ成形。器形は全体に歪む。平底。体部は僅かに内湾気味にほぼ直上に延びる。頸部は短く直立。端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面中央　ヘラケズリ調整。口縁部の１か所を鷹口状に成形。	外面　自然釉付着。淡黄緑色に発色。内面　無釉。灰黄褐色に発色。
96	刻画文小壺	7.3	7.5	6.1	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は内湾。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で稚拙な動物文（馬）施文。外面に２本の沈線を施文するが全周せず。	焼成は堅緻。還元気味。色調は内外面とも灰白色に発色。
97	刻画文小壺	[5.25]	7.0	5.8	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。器形に比して器壁は非常に厚い。平底。体部は大きく内湾して上方に立ち上がる。頸部は非常に短く上方につまみ上げる。	外面にヘラ状工具で草花文施文。内外面とも自然釉付着。暗黄緑色に発色。焼成堅緻。	底部に窯壁付着。
98	刻画文小壺	[5.7]	(2.0)	胴径 [9.4]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。小壺の口縁部片。短頸壺？。体部は大きく屈曲。口縁部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面強い回転ナデ。外面ヘラ状工具で施文。蓮弁文か？	焼成はやや軟質。外面　灰白色に発色。内面　褐色に発色。
99	刻画文小壺	横 (5.6)	(7.1)		三木峠北窯跡灰原	壺の体部片。粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で瓜文施文。	焼成堅緻。外面自然釉付着。暗緑色に発色。内面　にぶい赤褐色に発色。
100	鉢	[37.3]	(11.2)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る形。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰白色に発色。外面暗茶褐色に発色。
101	鉢	[30.2]	13.6	12.1	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る形。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部に１か所片口を作りだす。	焼成やや軟質。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　灰色に発色。
102	鉢	[30.8]	(12.9)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る形。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面板ナデ調整。	焼成堅緻。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　灰黄色に発色。
103	鉢	[32.0]	(8.7)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は斜め方向に切る形。口縁端部は斜め下方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　灰白色に発色。
104	鉢	[26.45]	(8.1)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る形。	内外面ともに回転ナデ調整。口縁部の１か所をひねって片口を作る。	焼成堅緻。内外面とも自然釉が付着。淡い緑灰色に発色。部分的に器面が爆ぜる。
105	鉢	[24.2]	(5.1)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は斜め方向に切る形。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻　灰色に発色。
106	鉢	[26.25]	(9.3)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は外方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　暗褐色に発色。内面灰色に発色。
107	鉢	[29.3]	(6.1)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。暗赤褐色に発色。
108	鉢		(7.75)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも灰黄褐色に発色。
109	鉢	[31.5]	(7.4)		三木峠北窯跡灰原	鉢の口縁部。粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部に沈線１条。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面強いヨコナデ。	焼成はやや軟質。灰白色に発色。還元炎焼成。
110	鉢	[33.1]	(5.8)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部外面に凹線１条。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。口縁端部　外方につまみ出す。	焼成堅緻。外面　褐色に発色。内面灰被り　黒褐色に発色。
111	鉢	[30.1]	(6.2)		三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は僅かに屈曲して外方に開く。口縁端部は斜め方向に切る形。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰白色に発色。外面暗赤褐色に発色。
112	盤	[33.15]	9.2	[23.5]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に沈線５条施文。	焼成堅緻。内面　自然釉付着。暗黄緑色に発色。外面　明赤褐色に発色。
113	盤	29.4	11.3	21.55	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。器形は大きく傾け歪む。底部に亀裂が見られる。平底。体部は僅かに内湾気味にほぼ直上に延びる口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に沈線を２条ずつ２カ所に施文する。	焼成堅緻　にぶい赤褐色に発色。内面全面に自然釉付着。淡暗緑灰色に発色。
114	盤	[20.8]	6.6	[16.2]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	外面の体部から底部　ヘラケズリ調整。内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部外面にヘラ状工具で沈線３条施文。	焼成堅緻。内面　全面に自然釉付着。淡黄緑色に発色。外面　にぶい褐色に発色。焼成時に割れた痕跡あり。器形は全体に歪む。
115	高台付鉢		(3.1)	[26.0]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。断面台形状の低い高台を貼り付ける。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。高台部は貼り付けのための強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　灰白色に発色。
116	高台付鉢		(2.8)	[25.15]	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。平底。断面台形状の低い高台を貼り付ける。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。高台部は貼り付けのための強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　灰色に発色。
117	碗	13.1	4.9	5.65	三木峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体に薄い。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　にぶい褐色に発色。外面　にぶい赤褐色に発色。

報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
118	碗	14.3	5.2	6.1	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。底部外面に静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも明赤褐色に発色。
119	碗	14.0	4.6	5.6	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。器壁は全体に薄い。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも赤褐色に発色。
120	碗	[15.6]	(4.55)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも胡麻状に灰被り。外面　暗褐色に発色。内面　にぶい赤褐色に発色。
121	碗	[14.5]	(5.15)	(6.2)	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に回転糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　自然釉がほぼ全面付着する。暗黄緑色に発色。外面　暗褐色に発色。口縁部外面に重焼痕。
122	碗（口縁）	[13.2]	(4.5)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻　暗赤褐色に発色。内面若干灰被り。
123	碗（口縁）	[13.3]	(4.75)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。にぶい褐色に発色。
124	碗（口縁）	[13.05]	(4.75)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干歪む。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻　暗褐色に発色。
125	碗	11.2	3.5	6.9	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、器形に対して器壁は比較的厚い。平底、体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁端部は丸味をもつ。底部外面　回転ヘラ切の後、ナデ調整。	焼成堅緻。内外面ともにぶい赤褐色に発色。
126	小皿	[6.7]	(1.4)	(5.5)	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は僅かに内湾気味にほぼ直上に立ち上がる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面に静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも灰褐色に発色。
127	小皿	[6.5]	(1.5)	(4.4)	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、平底、底部の器壁は厚い。体部は内湾してほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。外面　重ね焼痕が残る。褐色に発色。内面は爆ぜる。灰色に発色。
128	小皿	5.9	1.6	4.95	三本峠北窯跡灰原	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底、底部の器壁は厚い。体部は外反気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも強い回転ナデ調整。底部外面にヘラ切痕が残る。	焼成堅緻。外面　にぶい赤褐色に発色。内面　爆ぜる。灰白色に発色。
129	土鍋	[24.36]	(9.75)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は内湾。体部と口縁部の界は「く」の字状に屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　平行叩き目が残る。体部内面に叩きの当て具痕が残る。	焼成堅緻。外面　灰褐色に発色。内面明赤褐色に発色。
130	土鍋	[21.8]	(4.6)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　平行叩き目が残る。	焼成堅緻。外面　暗褐色に発色。内面灰褐色に発色。
131	土鍋	横 (5.0)	縦(5.3)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部と口縁部の界は「く」の字状に大きく屈曲。口縁部は外方に開く。口縁端部は外方に引き出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　平行叩き目が残る。	焼成堅緻。外面　暗褐色に発色。内面灰褐色に発色。
132	羽釜	[29.6]	(14.9)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部と口縁部は直立。口縁部と体部の界に断面台形状の鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部内面　ヨコ方向の板ナデ調整。体部外面に平行叩き目が残る。	焼成良好。外面　にぶい橙色、内面橙色に発色。
133	羽釜	[20.55]	(8.6)	鍔径 [25.2]	三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に直上に立ち上がる。口縁部直下に、断面長方形状の短い鍔を貼り付ける。口縁部は短く直立する。口縁端部は内側につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部に１か所焼成前穿孔あり。	焼成やや軟質。灰黄色に発色。
134	羽釜	[10.2]	(6.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に直上に立ち上がる。口縁部直下に、断面長方形状の短い鍔を貼り付ける。口縁部は短く直立する。	内外面とも回転ナデ調整。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は淡灰色を呈する。
135	陶塔	横 (14.6)	縦 (20.05)	高さ (4.8)	三本峠北窯跡灰原	型作り成形。方形に復元できる粘土板。中央部が円形に窪む。	全面にヘラケズリと板ナデ調整。	焼成堅緻。暗赤褐色に発色。部分的に灰釉付着。暗緑灰色に発色。陶塔の笠の部分か？
136	陶塔（破片）	横 (3.6)	厚さ (1.37)	縦 (8.63)	三本峠北窯跡灰原	陶塔の部分か？	器面にケズリ痕・指頭圧痕・剥離痕が認められる。	焼成堅緻。色調　にぶい褐色に発色。
137	陶塔（破片）	横 (8.3)	高さ (3.9)	縦(6.9)	三本峠北窯跡灰原	陶塔の笠の部分か？	全体にケズリ調整。	焼成堅緻。色調　暗赤褐色に発色。
138	陶塔（破片）	横 (7.4)	厚さ (1.7)	縦(9.8)	三本峠北窯跡灰原	陶塔の部分か？	器面にケズリ痕・剥離痕が認められる。	焼成堅緻。色調　暗赤褐色に発色に。
139	陶塔（破片）	横 (7.65)	高さ (2.9)	縦(5.7)	三本峠北窯跡灰原	陶塔の笠の部分か？	全体にナデ調整。	焼成堅緻。色調　灰褐色に発色。
140	陶塔（破片）	横 (3.0)	縦(5.8)		三本峠北窯跡灰原	陶塔の端部片	外面　ヨコナデ調整。	焼成堅緻。にぶい赤褐色に発色。
141	刻画文陶器	横 (8.9)	縦 (10.8)		三本峠北窯跡灰原	粘土を板状に成形、体部は直線的に直上に延びる。口縁端部は水平に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で施文。草花文か？	焼成堅緻。外面　褐色に発色。内面にぶい褐色に発色。
142	焼台	長さ 15.65	幅 16.15	高さ 10.1	三本峠北窯跡灰原	全体の形は円盤状。表面に剥離痕が多く認められる。	基本的に手で成形しているが、一部刷毛目のナデが認められる。	色調　暗赤褐色に発色。胎土に砂粒を多く含む。
143	焼台	長さ 14.55	幅 13.3	高さ 11.7	三本峠北窯跡灰原	２つの焼台が上下に積み重なって固着した形。材質は窯体の土に良く似ている。	全面に亀裂が多数入る。	色調　にぶい褐色に発色。。砂粒が多く混じり、裏面を除いて自然釉が薄く掛かる。
144	焼台	長さ 14.8	幅 15.45	高さ 6.2	三本峠北窯跡灰原	全体の形は円盤状。亀裂が認められる。	全体を指ナデ調整。指頭圧痕が部分的に認められる。	色調　にぶい赤褐色に発色。胎土に砂粒を多く含む。
145	焼台	長さ 14.5	高さ 6.9	幅 11.5	三本峠北窯跡灰原	焼台は２片に分かれる。上面に壊成いは瘤片が付着。	全体に薄く自然釉が付着しているため、調整は観察できない。	色調　灰白色から灰色に発色。
301	甕	[52.4]	(34.5)	胴径 [67.9]	三本峠北窯跡窯体内（１Tr）	粘土紐巻き上げ成形。。体部は内湾気味に斜め上方に延び、中位で「く」の字状に大きく屈曲する。口縁部は大きく外方に開き、側面に端面をもつ。口縁端部は下方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデ調整の後、斜め方向の仕上げナデ調整。	焼成堅緻。色調　内外面とも暗茶褐色に発色。Ⅱ類
302	甕	[57.0]	残高 (12.85)		三本峠北窯跡窯体内（１Tr）	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上下に引き出す。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　茶褐色に発色。外面灰白色に発色。Ⅱ類
303	甕	[62.8]	残高 (13.1)		三本峠北窯跡窯体内（１Tr）	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は下方に引き出す。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　茶褐色に発色。外面灰色に発色。Ⅱ類
304	甕		残高 (8.5)		三本峠北窯跡窯体内（１Tr）	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は下方に引き出す。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　灰色に発色。内面褐色に発色。Ⅱ類

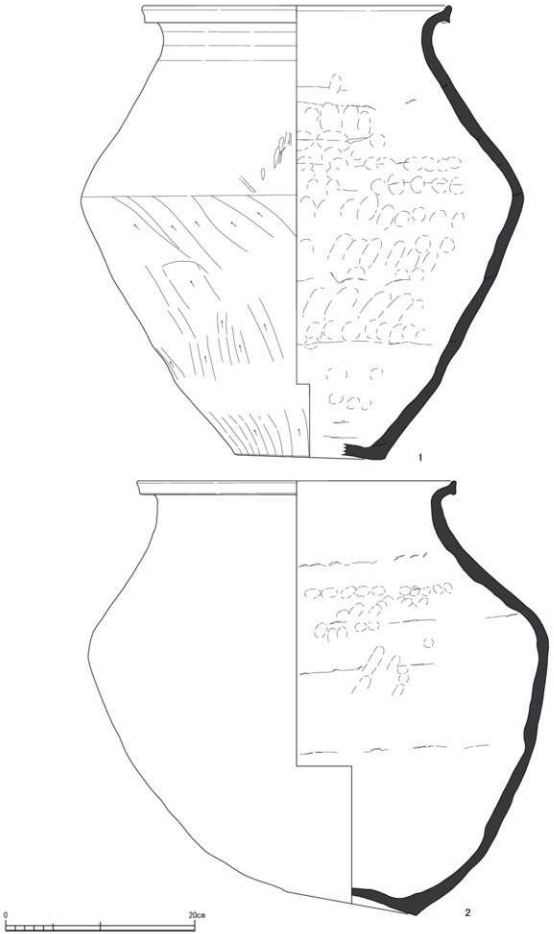
報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
305	甕		残高(22.4)	[19.7]	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰黄褐色に発色。外面　にぶい黄褐色に発色。
306	甕		残高(17.9)	[22.4]	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。底部内面ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰色に発色。外面　茶褐色に発色。
307	擂鉢	[30.8]	13.45	[11.6]	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は小さい玉縁状に肥厚、端部を下方に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部から体部内面にヘラ状工具でやや密にやや深く擂目を施文。底部外面　ヘラ切の後、板ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも暗赤褐色に発色。
308	擂鉢	[32.2]	(14.2)	[12.6]	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は小さい玉縁状に肥厚。口縁部に１か所片口を付ける。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　ヘラ切の後、ヘラで多方向のナデ調整。底部内面中央から口縁部内面にヘラ状工具で比較的疎に擂目を施文。	焼成堅緻。色調　にぶい赤褐色に発色。内外面とも部分的に灰被り。
309	甕	[25.1]	34.15	15.6	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は緩やかに外上方に立ち上り、中位で大きく「く」の字状に屈曲する。頸部は短く直立し、口縁部は側面に端面を持つ。端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも暗赤褐色に発色。
310	擂鉢	[31.6]	(9.8)		三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、体部は内湾気味に斜め上方に延びる。口縁部は小さい玉縁状を呈し、端部を下方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面疎に浅く擂目を施す。	焼成堅緻。色調　内面　灰褐色、外面暗褐色に発色。
311	捏鉢	27.2	13.0	11.25	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。	粘土紐巻き上げ成形、内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部内面　回転ナデの後、軽い仕上げナデ調整。底部外面　ヘラ切の後、軽い仕上げナデ調整。	焼成堅緻。色調　褐灰色に発色。
312	鉢	[30.8]	残高(7.1)		三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は断面三角形状を呈する。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。暗茶褐色に発色。
313	碗	13.8	5.75	5.55	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に若干歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　全面に灰被り。灰褐色に発色。外面　暗赤褐色に発色。
314	碗	14.9	5.65	4.9	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に若干歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内面　回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　若干胡麻状に灰被り。内外面とも暗赤褐色に発色。
315	碗	14.0	5.2	5.2	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は若干歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底、体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデの後、不定方向のナデ調整。体部外面　回転ナデの後、ナデ調整。底部外面、切り離しの後、ナデ調整。	焼成堅緻。内面　若干灰被り。内外面とも暗赤褐色に発色。
316	碗	13.8	5.4	4.6	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデの後、不定方向のナデ調整。体部外面　回転ナデの後、指の腹でナデ調整。底部外面　板状工具によるナデ調整。	焼成堅緻。内面　若干の灰被り。内外面とも暗赤褐色に発色。
317	碗	13.8	5.35	4.5	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に若干歪む。粘土紐巻き上げ成形、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整。底部外面　ヘラ切痕？が残る。	焼成堅緻。暗赤褐色に発色。
318	碗	14.2	5.3	4.74	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部下半から底部内面　回転ナデの後、横方向の仕上げナデ調整。底部外面　糸切の後ナデ調整。	焼成堅緻。暗赤褐色に発色。
319	碗	13.52	5.35	5.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面ともに回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内面の体部から底部　回転ナデ後、横・斜め方向の仕上げナデ。底部外面　糸切の後ナデ調整。	焼成堅緻。色調　外面　明赤褐色に発色。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。
320	碗	13.85	5.2	5.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、低い平底高台。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　全面に灰被り。灰褐色に発色。
321	碗	14.65	5.95	4.8	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、浅い平底高台。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　暗赤褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
322	碗	14.15	5.5	5.45	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底高台。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　乾燥板の痕跡が残る。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも明褐色に褐色。
323	碗	14.6	4.8	4.5	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	底部の器壁が比較的厚い。体部下半の器壁も比較的厚い。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に乾燥板の痕跡が残る。口縁部内外面に重ね焼き痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
324	碗	13.95	5.2	4.2	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　不定方向のナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
325	碗	14.5	5.4	5.15	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰被り　灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
326	碗	13.9	5.6	4.8	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内面の体部から底部　横・斜め方向の仕上げナデ調整。底部外面　糸切の後、板ナデ調整。	焼成堅緻。色調　橙色に発色。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。
327	碗	13.9	5.4	5.6	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は非常に薄い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内面の体部から底部　回転ナデ調整の後、斜め方向の仕上げナデ調整。底部外面　糸切の後、板ナデ調整。	焼成ややあまい。色調　橙色に発色。
328	碗	[14.7]	[5.45]	[5.75]	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも暗茶灰色に発色。破片全体の１／４が残存。
329	碗	14.05	5.1	5.8	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁部端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　全面に灰被り。灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
330	碗	14.3	5.6	5.35	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。

報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
331	碗	14.1	5.4	6.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底高台。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁端部は丸味を持つ。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面に重ね焼き痕が残る。内面　灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
332	碗	13.55	5.6	5.7	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底高台。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰被り。灰褐色に発色。外面　暗赤褐色に発色。
333	碗	14.5	5.4	4.8	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　不定方向の指ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも暗灰褐色に発色。
334	碗	15.2	5.5	5.05	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に大きく歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整の後、指によるナデ調整。底部外面　ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰褐色に発色。外面にぶい褐色に発色。
335	碗	14.7	5.3	6.15	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整の後、指ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも灰暗褐色に発色。
336	碗	14.3	5.25	4.7	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部はほぼ直線的に外上方に立ち上り、中位で屈曲。口縁部は僅かに外方に開く。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも灰暗褐色に発色。内面　暗灰褐色に発色。外面　一部　明赤褐色に発色。
337	碗	[14.8]	5.65	6.0	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は僅かに内湾気味に外上方に延びる。口縁部端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕と乾燥台の痕が残る。	焼成堅緻。内面　暗灰褐色に発色。外面　部分的に明赤褐色に発色。
338	碗	13.5	4.9	5.5	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整の後、指ナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　暗灰褐色に発色。外面　明赤褐色に発色。
339	碗	13.8	5.1	6.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器壁は全体に比較的薄い。粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。外面　灰褐色に発色。外面赤褐色に発色。
340	碗	14.0	5.2	5.4	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰被り。灰褐色に発色。外面　暗赤褐色に発色。
341	碗	15.1	5.45	5.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形は全体に歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面に糸切痕が残る。	焼成堅緻。口縁部外面に重ね焼き痕が残る。内面　全面に灰被り。灰褐色に発色。外面　暗褐褐色に発色。
342	碗	14.25	5.15	5.6	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。底部外面に静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内外面とも暗赤褐色に発色。
343	碗	14.2	5.05	5.1	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　静止糸切痕が残る。	焼成堅緻。内面　灰被り。暗灰褐色に発色。外面　赤褐色に発色。
344	碗	14.3	5.25	5.2	三本峠北窯跡窯体内（1Tr）	器形はやや歪む。粘土紐巻き上げ成形、平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。内面の体部から底部　仕上げナデ調整。底部外面回転糸切の後、板ナデ調整。	焼成堅緻。色調　褐灰色に発色。
345	甕	[53.3]	残高（14.6）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。頸部は短く直立する。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁端部は尖る。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも灰色に発色。外面全面に自然釉付着。淡緑灰色に発色。
346	甕	[38.2]	残高（8.3）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上下に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面全面に自然釉付着。灰色に発色。甕Ⅰ類。
347	甕	[39.8]	残高（10.9）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面全面に自然釉付着。灰色に発色。甕Ⅰ類。
348	甕	[38.0]	残高（4.8）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上下に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。灰色に発色。甕Ⅰ類。
349	甕	[33.6]	残高（4.4）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上下に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも灰茶灰色に発色。
350	甕	-	残高（6.1）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部を上方につまみ上げる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面　灰色に発色。外面全面に自然釉付着。
351	甕	-	残高（5.1）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部を上方につまみ上げる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面　灰色に発色。外面全面に自然釉付着。
352	甕	-	残高（6.8）		三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部を下方に引き出す。口縁端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。灰色に発色。
353	壺		残高（8.5）	10.2	三本峠北窯跡窯体内（3Tr）	粘土紐巻き上げ成形、平底。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面全面に自然釉付着。淡緑灰色に発色。底部外面に窯体、陶片が付着。窯道具として使用か？
354	甕	[33.2]	残高（21.3）		三本峠南窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。体部は中位で大きく「く」の字に屈曲。口縁部は大きく外方に開く。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面上位に指頭圧痕が残る。	焼成堅緻。体部外面　全面に自然釉が付着。淡緑灰色に発色。内面　茶褐色に発色。
355	刻画文壺	横（5.8）	縦（3.0）		三本峠南窯跡灰原	粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも回転ナデ調整。外面にヘラ状工具で草花文施文。	焼成堅緻。外面　全面に自然釉付着。暗緑灰色に発色。内面　にぶい褐色に発色。
356	甕	[33.0]	残高（9.0）		三本峠南窯跡分布調査灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。外面　自然釉付着。暗茶褐色に発色。内面　暗茶褐色に発色。
357	甕	[23.7]	残高（4.3）		三本峠南窯跡分布調査灰原	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内面　灰白色に発色。外面自然釉付着。暗緑灰色に発色。甕Ⅱ類。
358	甕	-	残高（3.9）		三本峠南窯跡分布調査灰原	粘土紐巻き上げ成形。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。内外面とも暗茶褐色に発色。甕Ⅰ類。

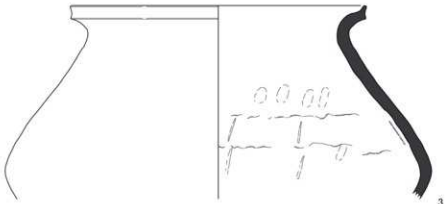
報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
359	甕	[39.5]	残高(11.0)		大武窯跡分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部は上下につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　灰褐色に発色。口縁部内面に灰被り。
360	甕	[22.8]	残高(9.2)		大武窯跡分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。口縁部は側面にやや丸味を帯びる端面を持つ。口縁端部は上方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻。色調　灰白色に発色。内外面とも自然釉付着。
361	甕	－	残高(14.4)		大武窯跡分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は大きく外方に開く。口縁部は側面に端面を持ち、端部上下に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部内外面　強い回転ナデ調整。	焼成堅緻　色調　灰色に発色。内外面に自然釉付着。
501	甕	[35.2]			三本峠南窯分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁上部が立ち上がる。	内外面ヨコナデ調整。灰付着。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は灰色（釉剥離）、内面は暗灰褐色の素地に暗灰緑色の自然釉を被る。甕Ⅰ－b類。今９
502	甕	[34.6]			三本峠南窯分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上下に拡張する。	口縁部の縁帯を上下に拡張する。口縁部に丁寧なナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は暗赤茶色でゴマ状の灰を被る。甕Ⅱ－a類。今10
503	甕	[25.0]			三本峠南窯分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上下に拡張する。	内外面ヨコナデ調整。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は灰色（釉剥離）、外面頸部及び内面下部に茶色～暗茶褐色の素地が残る。甕Ⅱ－b類。今11
504	碗底部			6.5	源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。平底。	内外面をナデ調整。底部は回転糸切。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は赤茶色。今12
505	卸皿	[17.0]			源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は淡橙色。今13
506	捏鉢	[24.0]	9.90	11.2	源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	外面は粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は暗赤茶色から暗黄褐色の灰付着、内面は黄緑色～暗緑褐色の自然釉を被る。今14
507	甕	[44.0]			源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上下に拡張する。	内外面に丁寧なナデ調整を施す。	胎土は緻密で砂粒含む。焼成は堅緻。色調は暗灰褐色。甕Ⅱ－a類。今15
508	甕	[28.8]			源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	外面体部から内面頸部までナデ調整。内面体部に粗いナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は淡黄色から暗黄褐色の灰付着、内面は黄緑色～暗緑褐色の自然釉を被る。甕Ⅲ類。今16
509	甕	[42.6]			源兵衛山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は内外面とも灰褐色（外面は釉剥離）。甕Ⅲ類。今17
510	甕	[60.0]			武士ケタ５号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上方に拡張する。	外面体部から内面頸部まで丁寧なナデ調整。外面体部にナデ調整。内面体部に粗いナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻で石英、長石粒を含む。色調は内外面とも暗茶色で外面から口縁部上面に暗黄褐色の自然釉を被る。甕Ⅰ－a類。
511	甕	[30.0]			武士ケタ４号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上方に拡張する。	内外面・口縁部に丁寧なナデ調整。体部にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻で石英、長石粒を含む。色調は外面は暗灰色（釉剥離）、内面は暗茶色で口縁部上面に暗緑色の自然釉を被る。甕Ⅰ－a類。
512	碗	[12.8]			武士ケタ５号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面にナデ調整を施す。	内外面にナデ調整を施す。胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が暗茶灰色、内面は淡灰色。今18
513	碗底部			5.0	武士ケタ６号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。平底。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が暗赤茶色、内面は淡灰色。一部に暗緑色の自然釉が残る。今19
514	鉢	[26.8]			武士ケタ７号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が赤茶色～暗赤茶色、内面は淡灰色。今20
515	甕	[27.2]			武士ケタ８号分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上方に拡張する。	内外面に丁寧なナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が赤茶色、内面に淡灰緑色の自然釉。甕Ⅰ－a類。今21
516	甕	[28.2]			太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面にナデ調整を施す。	焼成は堅緻。色調は外面が淡緑色釉（剥離）、内面は赤茶色の素地に淡緑色の自然釉。甕Ⅰ－b類。今22
517	甕	[38.8]			太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を下方に拡張する。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は暗赤茶色。甕Ⅱ－a類。今23
518	甕	[26.4]			太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上下に拡張する。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は暗緑褐色、内面は赤茶色。甕Ⅱ－b類。今24
519	甕	[23.0]			太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	外面にナデ調整、内面に粗いナデ調整、口縁部に丁寧なナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面は緑褐色の自然釉を被る。内面は赤茶色。表面に火ぶくれあり。甕Ⅲ類。今25
520	皿	[16.0]			太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が赤茶色、内面が濃緑色の自然釉を被る（口唇部の釉剥離）。今26
521	擂鉢				太郎三郎支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部を外方につまみ出す。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は赤茶色～茶色で、内面に薄く灰を被る。今27
522	甕	[20.8]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部の縁帯を上下に拡張する。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は赤茶色の素地に淡緑色の自然釉を被る。甕Ⅱ－b類。今28
523	甕	[27.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は茶褐色の素地に淡緑褐色の自然釉を被る。甕Ⅲ類。冊29
524	甕	[27.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面にナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面、内面とも灰色。表面は釉剥離。甕Ⅲ類。今30
525	甕	[20.6]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	外面から頸部にナデ調整、内面に粗いナデ調整を施す。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は赤茶色の素地に暗褐緑色の灰釉を被る。甕Ⅲ類。今31
526	甕	[28.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。内面に指頭圧痕が残る。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面に茶褐色の地に暗緑色の自然釉、内面に淡茶色の地に暗緑色～黄褐色の自然釉。甕Ⅳ類。今32
527	甕	[31.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が灰茶褐色、内面が暗灰茶褐色。甕Ⅳ類。今33
528	甕	[23.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形。口縁部は外方に７開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密。焼成は堅緻。色調は外面が暗緑褐色の自然釉、内面が茶色の素地に口縁部に暗緑褐色の自然釉。甕Ⅳ類。今34

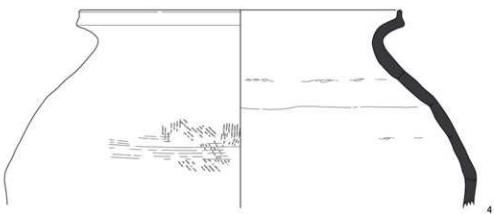
報告番号	器種	法量（cm）			出土地	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
		口径	器高	底径				
529	鉢	[31.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は淡橙赤色。内面に煤付着。今35
530	鉢	[32.25]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は淡茶赤色。内面に薄く灰を被る。今36
531	鉢	[29.0]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は内面が乳橙色、外面が橙赤色、口縁部に煤付着。今37
532	壺	[9.8]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、頸部は直立	内外面をナデ調整する。	焼成は堅緻、色調は外面は緑褐色の自然釉を被り一部剥離する。内面は赤茶色の素地に緑褐色。今38
533	碗	[12.2]			床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、体部は直線的に外上方に延びる。	内外面をナデ調整、外面下部をケズリ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は暗茶色、内面は赤茶色。今39
534	碗底部			6.0	床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、平底。	内外面をナデ調整、底部は回転糸切。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は淡橙色。今40
535	碗底部			6.0	床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、平底。	内外面をナデ調整、底部は回転糸切。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は茶色の素地に淡褐緑色の自然釉を被る。外面は黄茶褐色。今41
536	碗底部			7.4	床谷支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、平底。	内外面をナデ調整、底部は回転糸切。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は茶色の素地に淡褐緑色の自然釉を斑点状に被る。外面は茶褐色。今42
537	壺口縁	[10.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密（砂粒散見）。焼成は堅緻。色調は外面は暗灰褐色の自然釉、内面は淡茶色。今43
538	壺口縁	[14.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は緑色の自然釉、内面は暗茶褐色（頸部から口縁部にかけて釉剥離）。今44
539	壺口縁	[13.2]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は茶色の素地に淡褐色の自然釉、内面は暗褐色の自然釉。今45
540	壺口縁	[13.4]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、頸部は僅かに外傾、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は茶色の素地に暗褐緑色の自然釉。今46
541	壺口縁	[12.2]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、頸部は直立、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は茶色の素地に暗緑色の自然釉、内面は茶色の素地に口縁端部に暗緑色の自然釉を被る。今47
542	壺口縁	[11.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は灰色（釉剥離）、内面は黄茶色。今48
543	鉢	[26.4]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は僅かに外方に開く、口縁端部を水平方向につまみ出す。	内外面口縁部をナデ調整、外面体部に平行叩き目、内面体部に圧痕が残る。	胎土は緻密（石英、長石砂粒散見）。焼成は堅緻、色調は外面は茶褐色、内面は淡黄灰色。今49
544	甕	[26.4]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密（石英、長石砂粒散見）。焼成は堅緻、色調は赤茶色の素地に淡緑褐色の自然釉を被る、口縁部に暗黄色～暗褐色の灰を被る（部分的に剥離）。甕Ⅲ類。今50
545	甕	[16.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面に暗緑色自然釉（一部剥離）、内面は暗茶褐色の素地に暗緑色の自然釉。甕Ⅲ類。今51
546	甕	[18.2]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面口縁部を丁寧なナデ調整、体部にナデ調整。	胎土は緻密（石英、長石砂粒散見）。焼成は堅緻、色調は外面は暗灰色（釉剥離）、内面は暗茶褐色地に暗緑色の自然釉。甕Ⅲ類。今52
547	甕	[28.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は灰付着、内面は暗褐色の素地に灰緑色の自然釉を被る。甕Ⅲ類。今53
548	甕	[36.4]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整、口縁部内面の立上り部が凹線化する。	胎土は緻密（石英、長石砂粒散見）。焼成はやや軟質、色調は外面は赤茶色、内面は淡茶褐色。今54
549	甕	[21.0]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整、口縁部内面の立上り部が凹線化する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は黄茶色の素地に暗緑色の自然釉、内面は自然釉の剥離が目立つ。今55
550	甕	[28.0]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は濃緑色の自然釉を被る。内面は茶色の素地に暗緑色の自然釉を被る。甕Ⅴ類。今56
551	甕	[37.6]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	外面体部から内面頸部までヨコナデ調整、内面体部は指押えののち粗いナデ調整を施す。	胎土は緻密で砂粒が多い、焼成は堅緻、色調は外面は茶色の素地に肩部に斑点状の淡緑色の自然釉を被る。甕Ⅳ類。今57
552	甕	[27.0]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密で石英と長石の砂粒散見する。焼成は堅緻、色調は外面は淡灰緑色の自然釉（砂粒多量に付着）、内面は赤茶色。甕Ⅲ類。今58
553	甕	[25.8]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。内面体部に圧痕が残る。	胎土は緻密（石英、長石砂粒散見）。焼成は堅緻、色調は外面に灰色（釉剥離）、内面は淡赤茶色。甕Ⅳ類。今59
554	甕	[21.2]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は灰色（釉剥離）、内面は暗茶褐色の素地に暗灰緑色の自然釉を被る。甕Ⅳ類。今60
555	小甕	[17.8]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密で石英と長石散見する。焼成は堅緻、色調は内面は暗茶褐色、外面は釉剥離。甕Ⅳ類。今61
556	甕	[13.4]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面口縁部を丁寧なナデ調整、体部にナデ調整。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は暗緑色（灰を被る）、内面は暗灰褐色。甕Ⅳ類。今62
557	甕	[25.8]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は暗緑色の自然釉を被る。内面は灰付着。甕Ⅳ類。今63
558	甕	[24.0]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整、口縁部内面の立上り部が凹線化する。	胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は外面は茶褐色の素地に淡緑色の自然釉を被る。内面は淡黄色～暗黄褐色の灰が付着。甕Ⅳ類。今64
559	甕	[36.0]			稲荷山支群分布調査	粘土紐巻き上げ成形、口縁部は外方に開く。	内外面をナデ調整。	焼成は堅緻、色調は外面は淡灰緑色の自然釉を被る。内面は淡茶灰色。甕Ⅴ類。今65

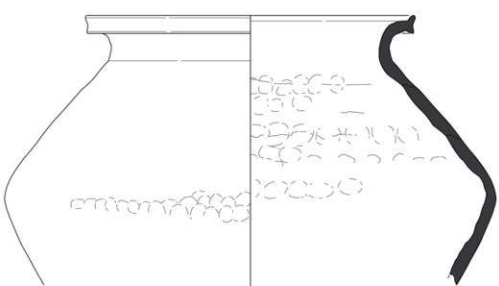
※今(番号）は今田町教育委員会1999『丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』の報告番号



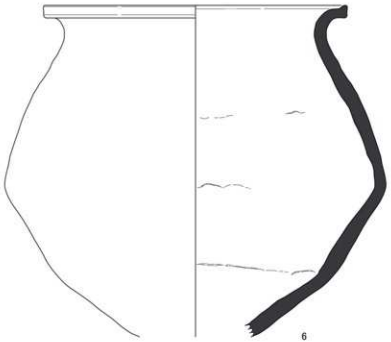
三本峠北窯跡　灰原出土資料 1

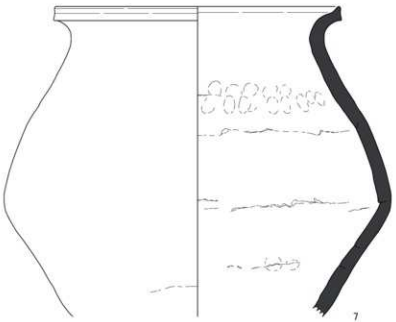




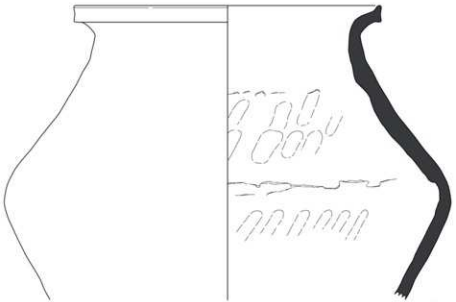


三本峠北窯跡　灰原出土資料 2


6


7

0
20cm

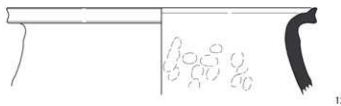

8

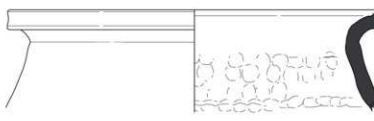
9

0
20cm

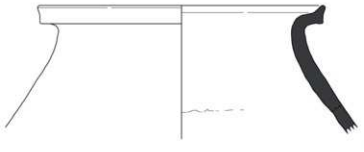
10

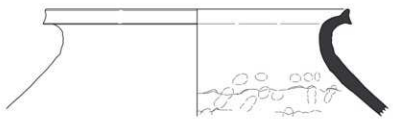
11

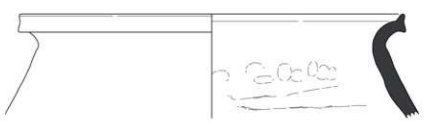

12

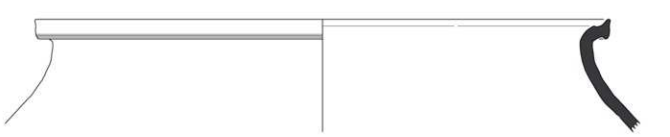

13

0
20cm

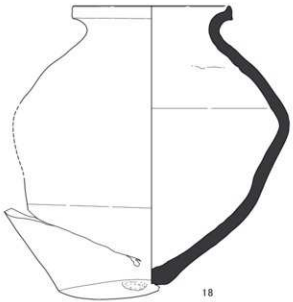

14

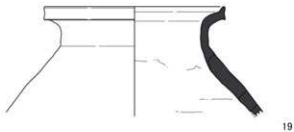

15

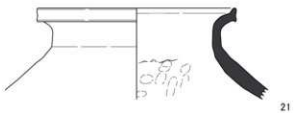

16


17

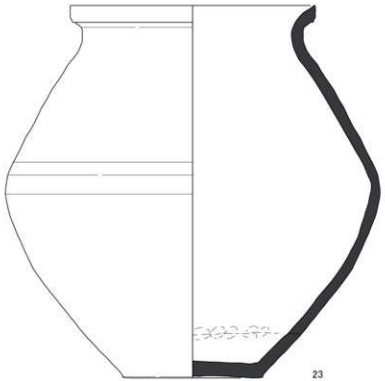
0
20cm

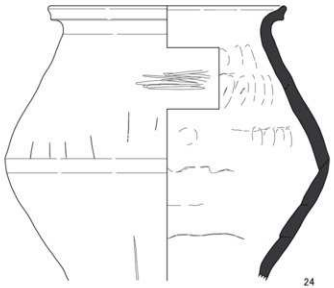




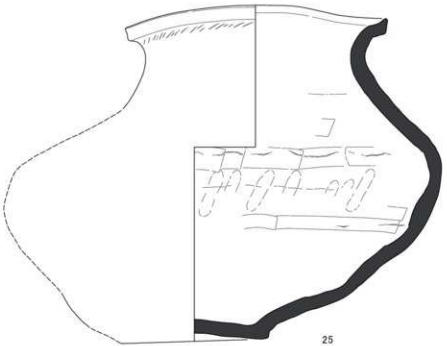


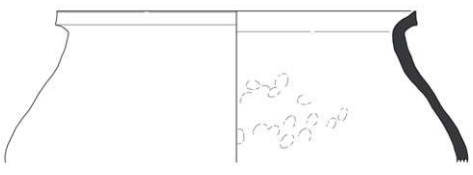
三本峠北窯跡　灰原出土資料 7

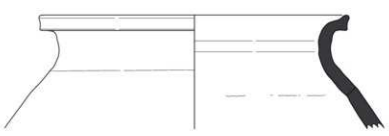

23

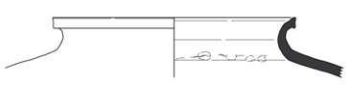

24

0
20cm

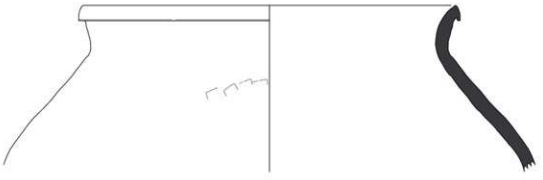

25


26

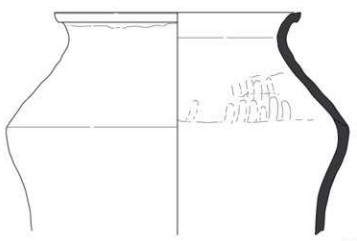

27

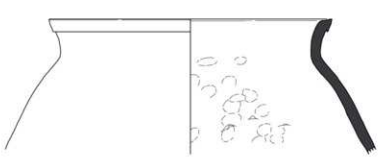

28

0
20cm


29

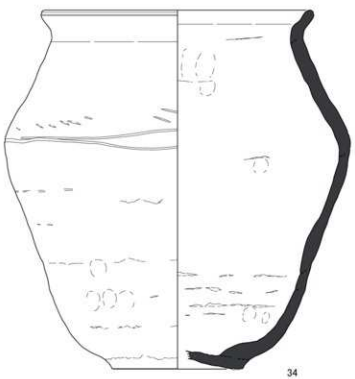
30


31

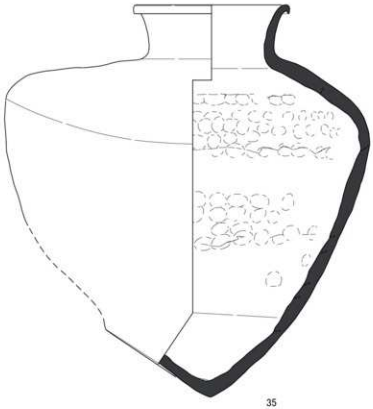

32

0
20cm

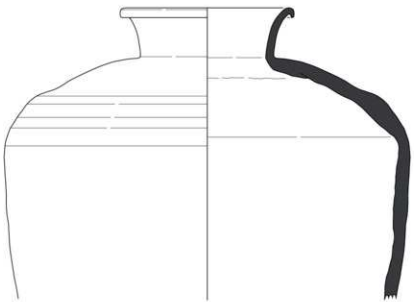
33



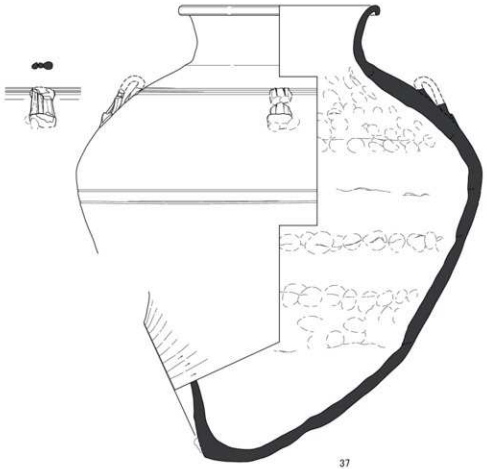
34



35

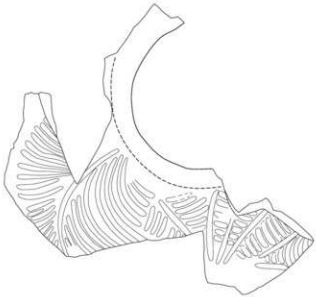


36

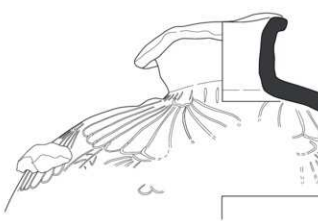


37

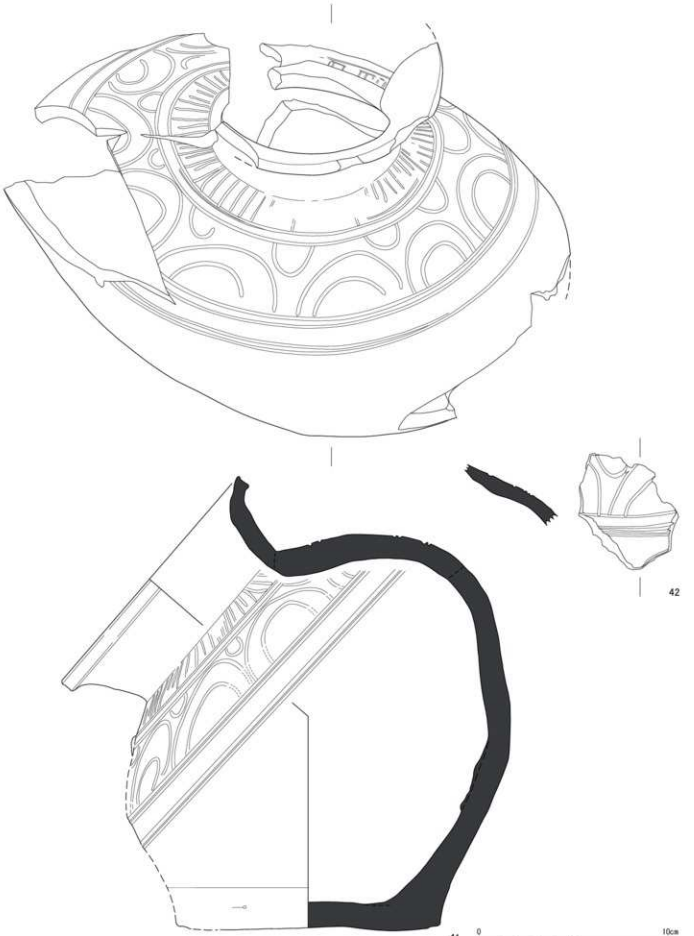
三本峠北窯跡　灰原出土資料 14



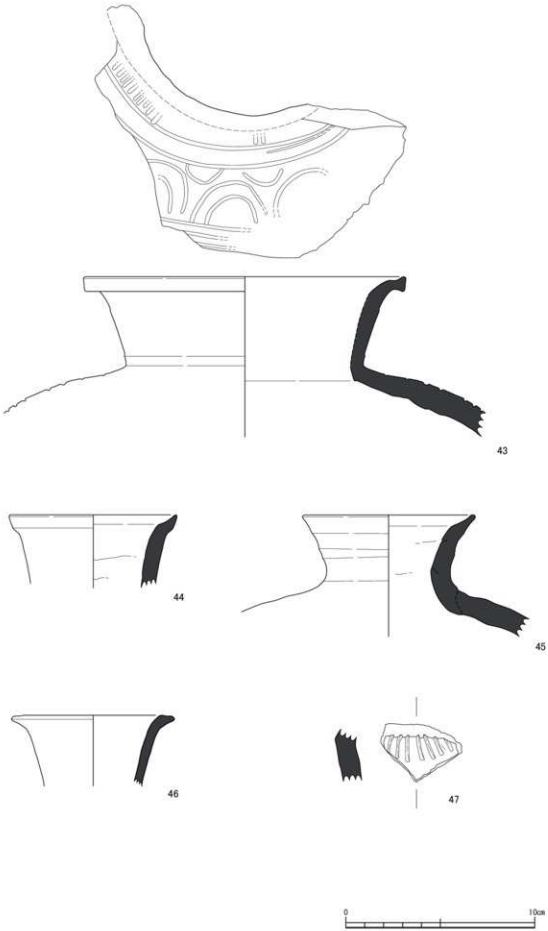
39

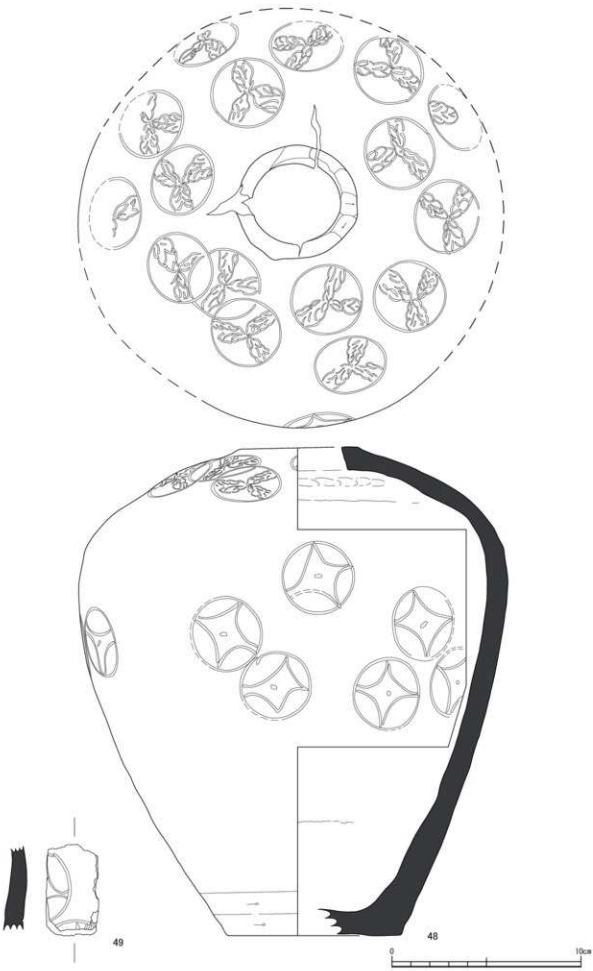


40

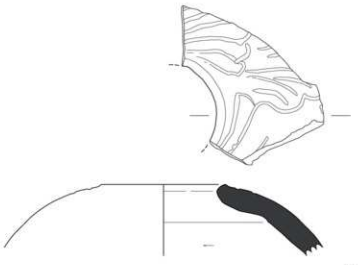


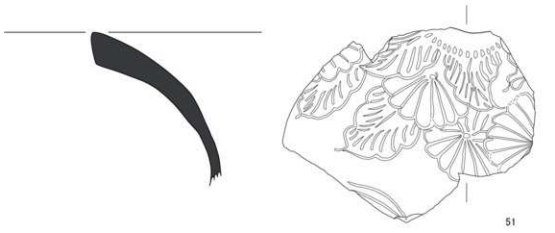
三本峠北窯跡　灰原出土資料 16

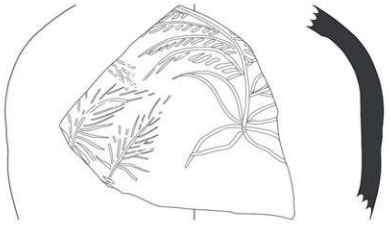

43
44
45
46
47
0
10cm

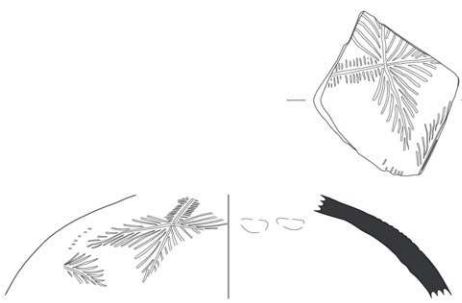


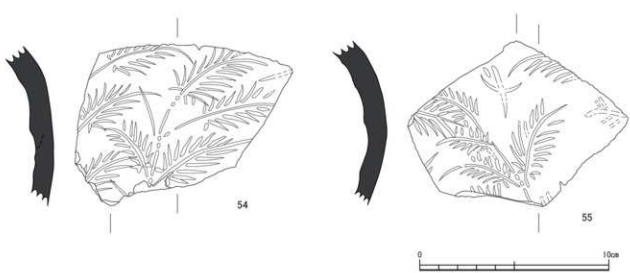
三本峠北窯跡　灰原出土資料 18


50

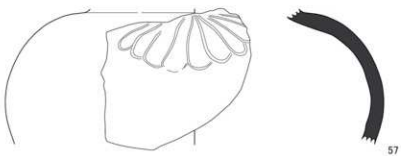

51
0
10cm

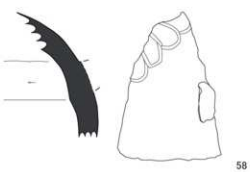

52

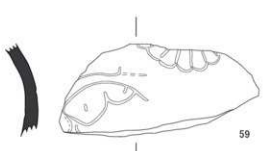

53


54
55
0
10cm

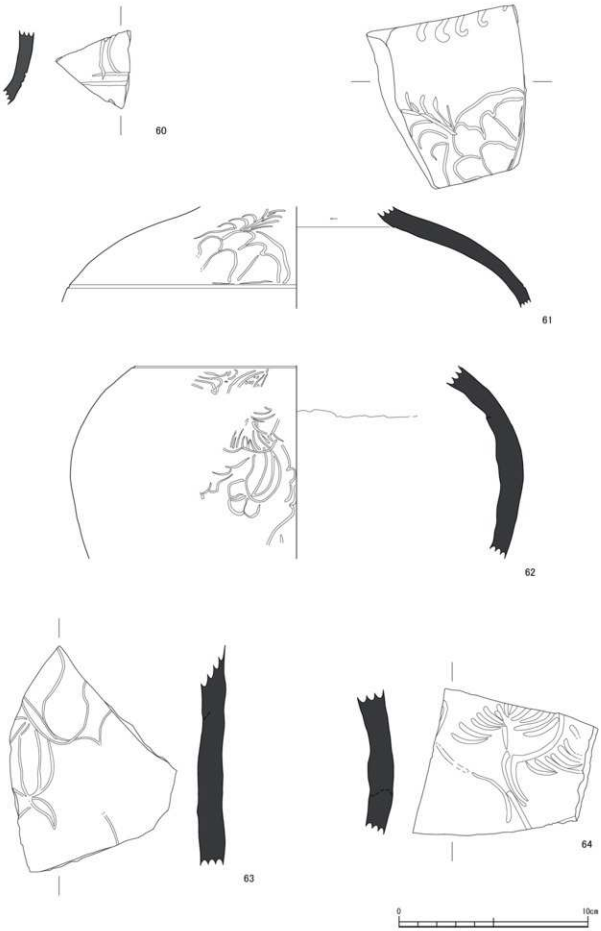
56


57

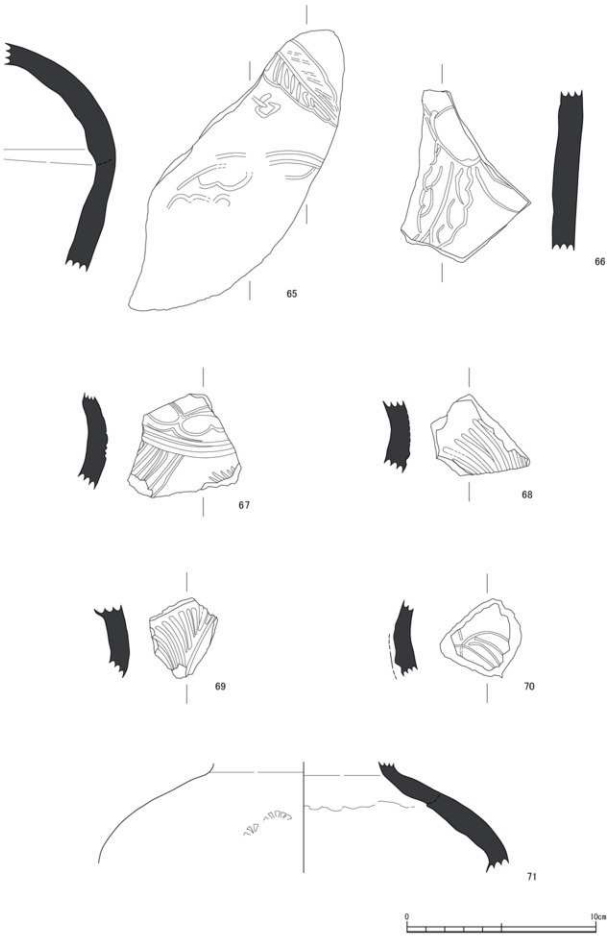

58


59

0
10cm

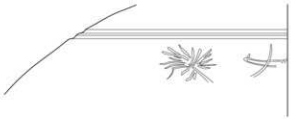


三本峠北窯跡　灰原出土資料 22

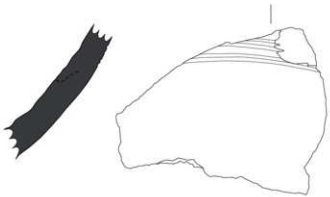


三本峠北窯跡　灰原出土資料 23

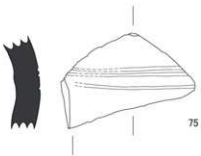
72



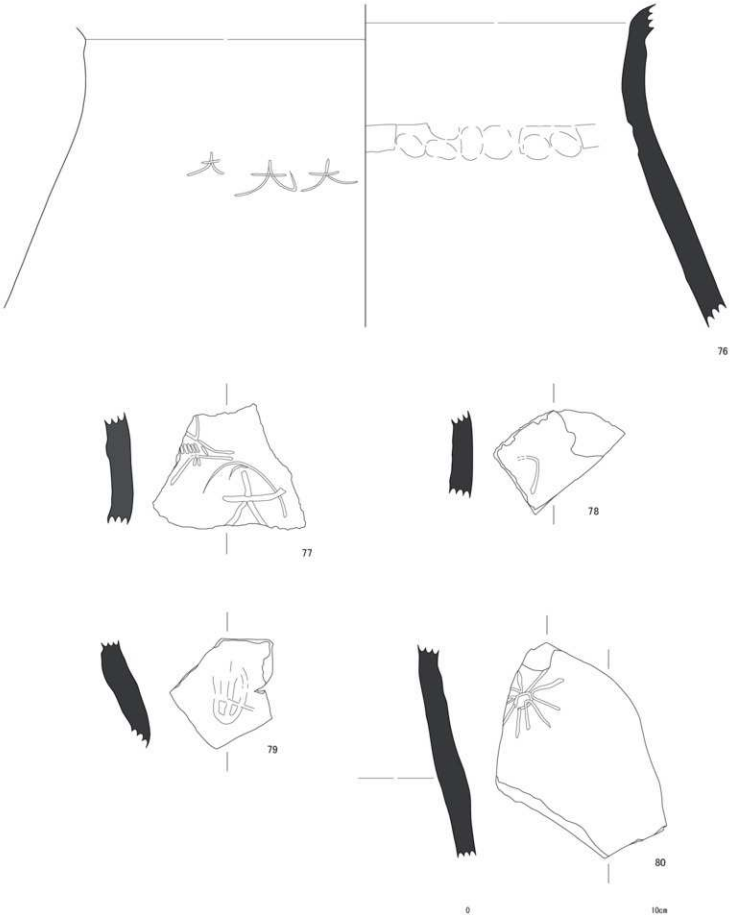
73

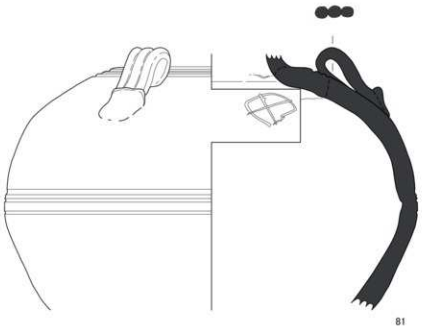


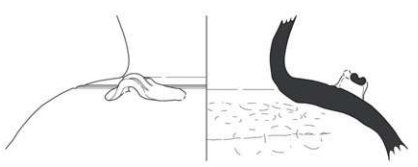
74



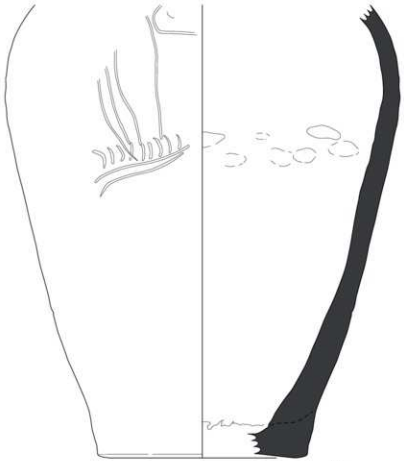
75


76
77
78
79
80
0
10cm

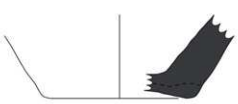

81


82

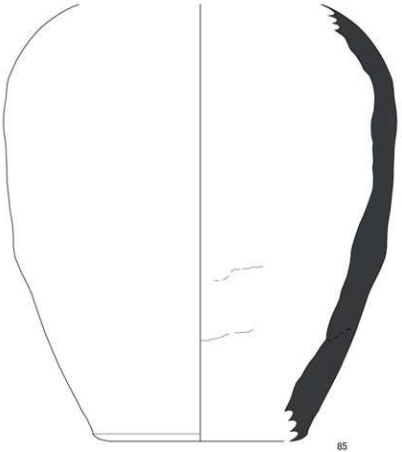
0
10cm

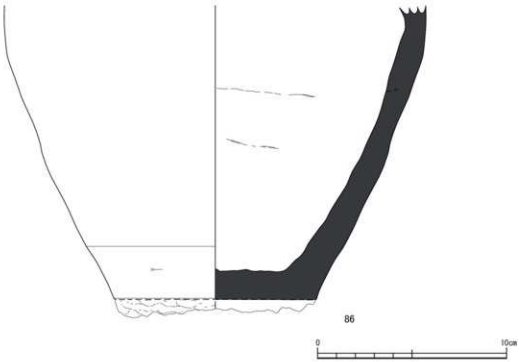


83

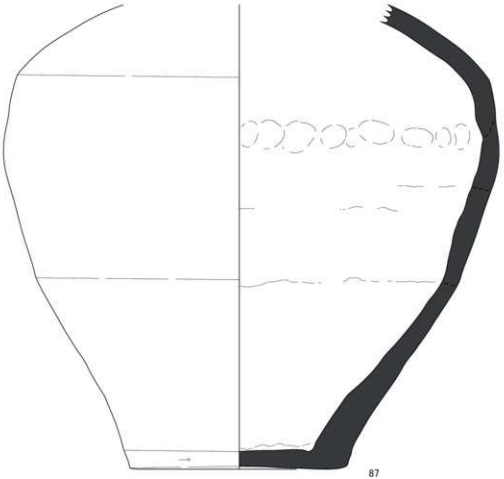


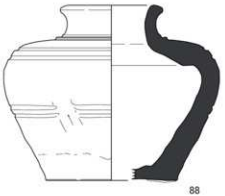
84





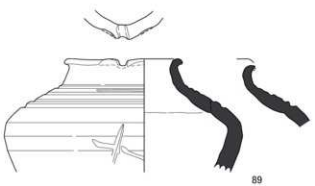
三本峠北窯跡　灰原出土資料 28

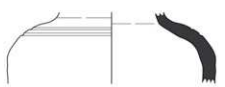

87
0
10cm

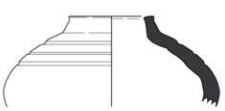

88

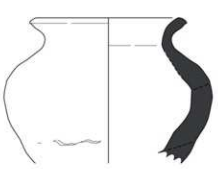
91

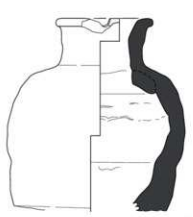
92

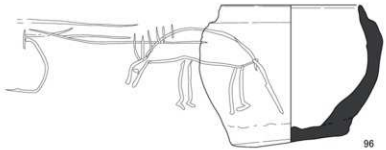

89


93

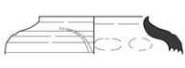

90

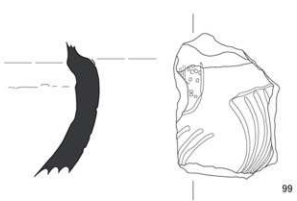

94


95


96

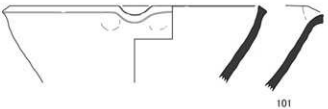
97

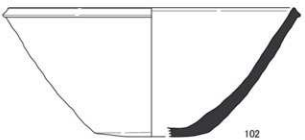

98


99

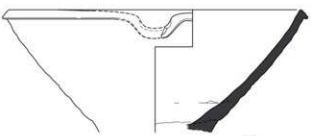
0
10cm

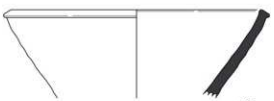
100

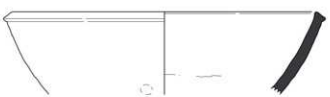

101

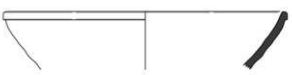

102

103


104

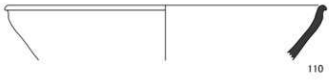

105

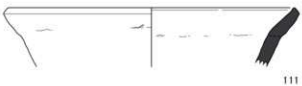

106


107

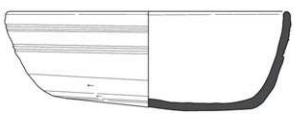
108

109


110


111

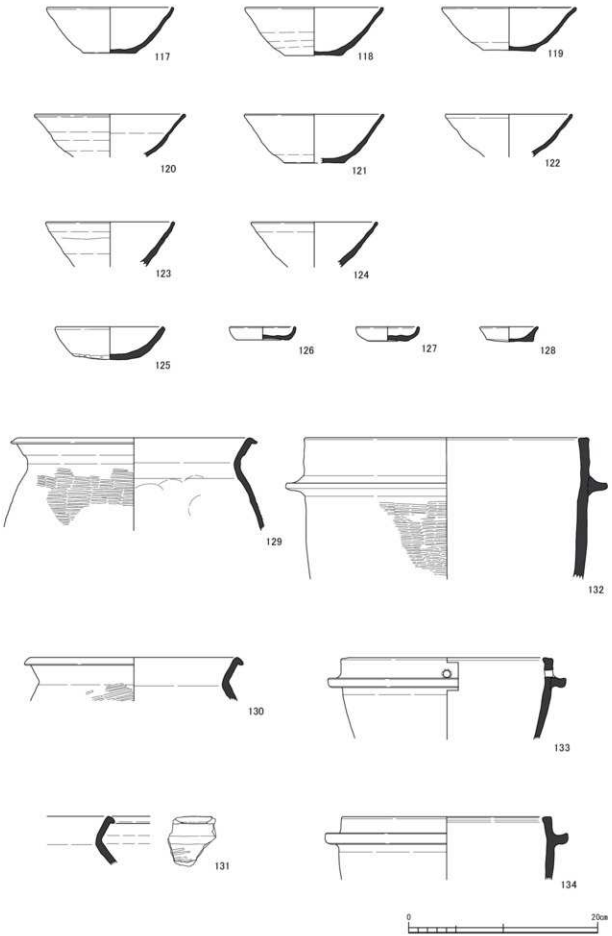
112

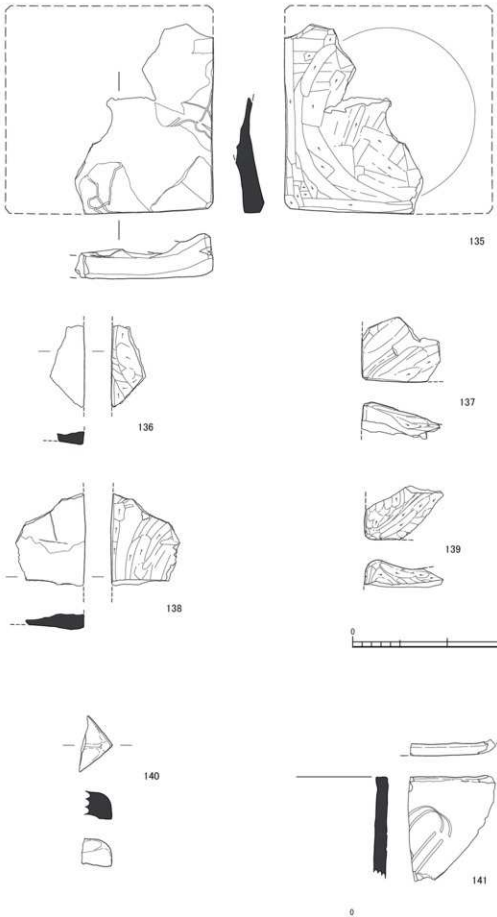

113

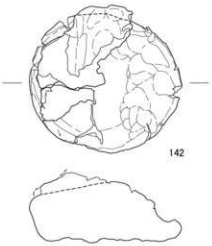
114

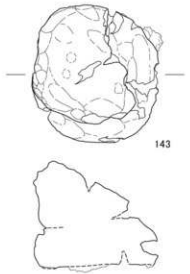
115

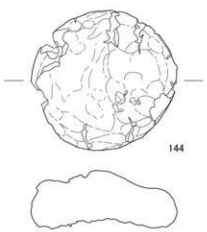
116

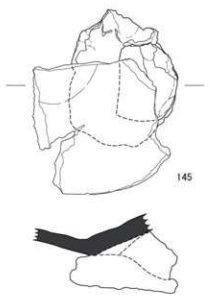

117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
132
130
133
131
134
0
20cm


135
136
137
138
139
0
20cm
140
141
0
10cm

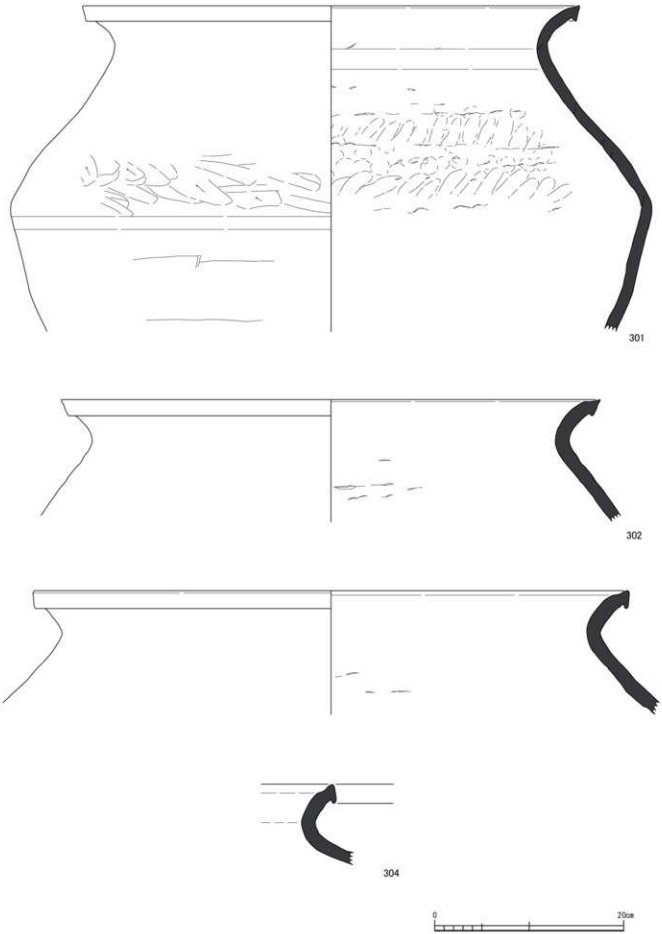

142


143

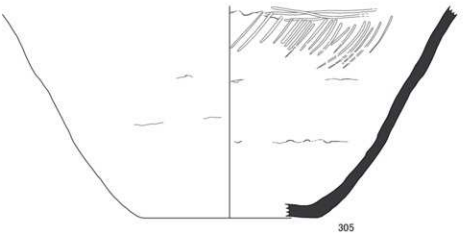

144

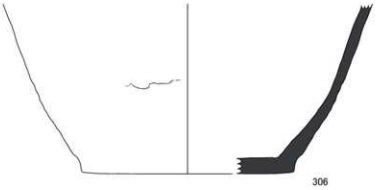

145

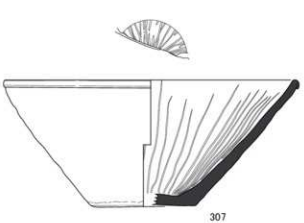
0
20cm

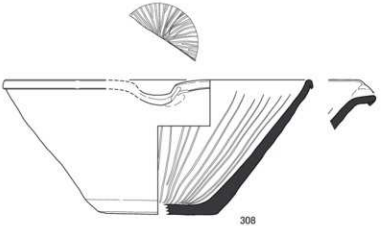


三本峠北窯跡　1Tr出土資料1

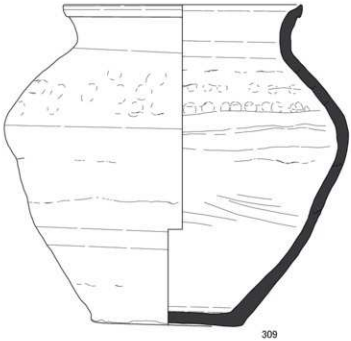


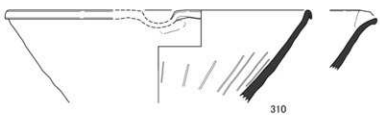


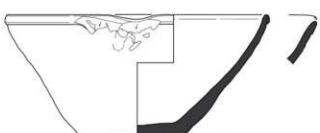




三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 2







三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 3

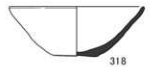
313

314

315

316

317


318

319

320

321

322

323

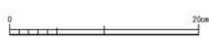
324

325

326

327

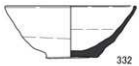
328



329

330

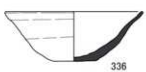
331

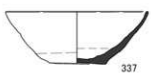

332

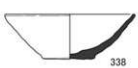
333

334

335


336


337


338

339

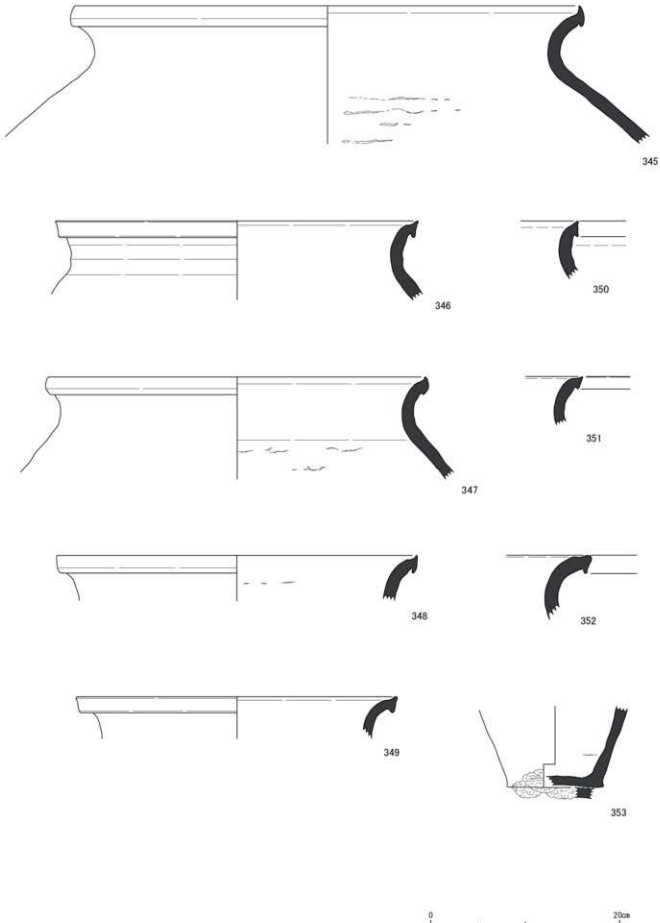
340

341

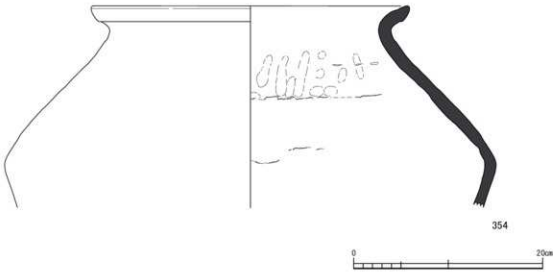
342

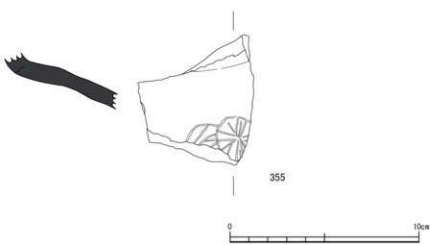
343

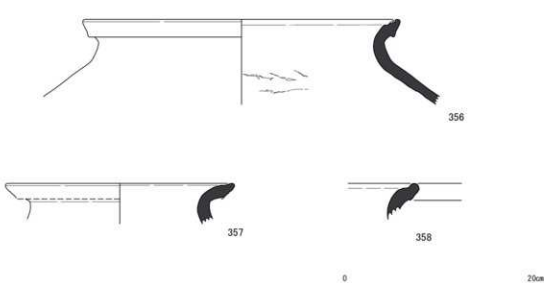
344



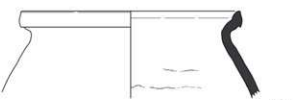
三本峠北窯跡 3Tr 出土資料


354
0
20cm


355
0
10cm

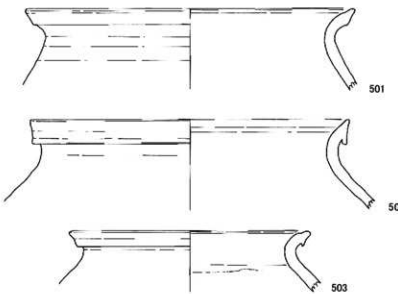

356
357
358
0
20cm

359

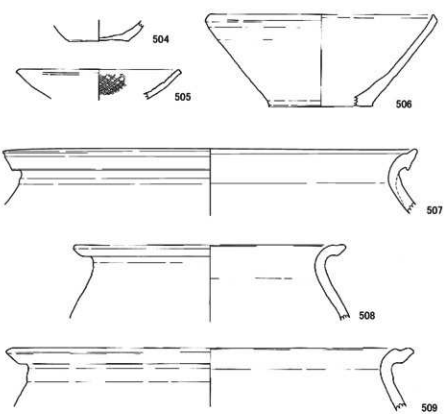

360

361

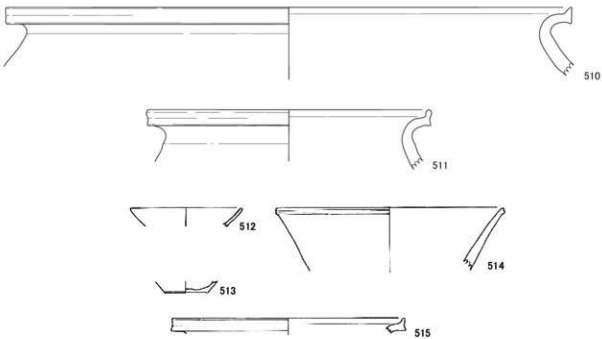
0
20cm



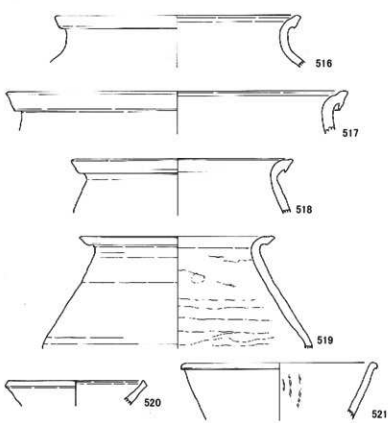
三本峠南窯跡



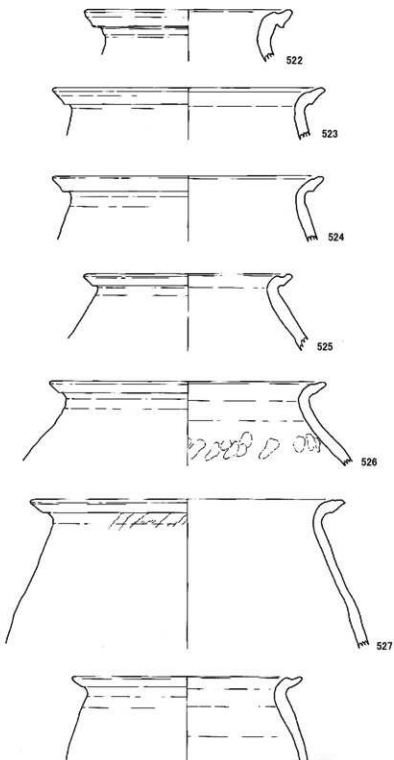
源兵衛山窯跡



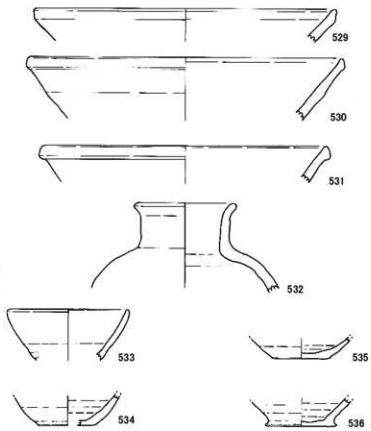
武士ケタ窯跡支群



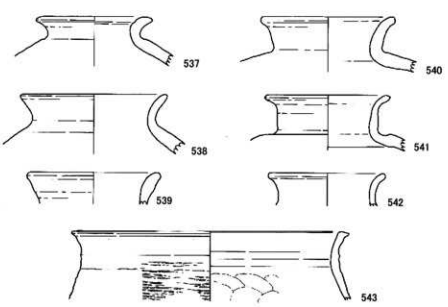
太郎三郎窯跡



床谷窯跡

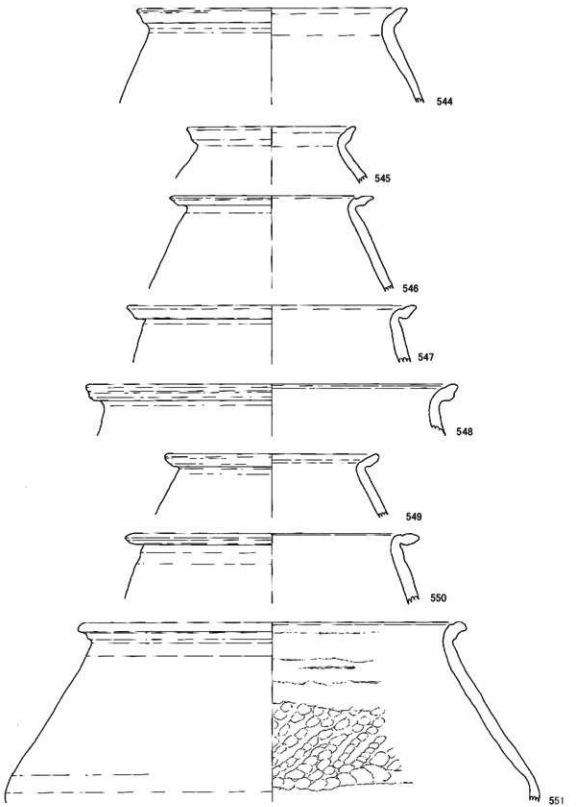


床谷窯跡



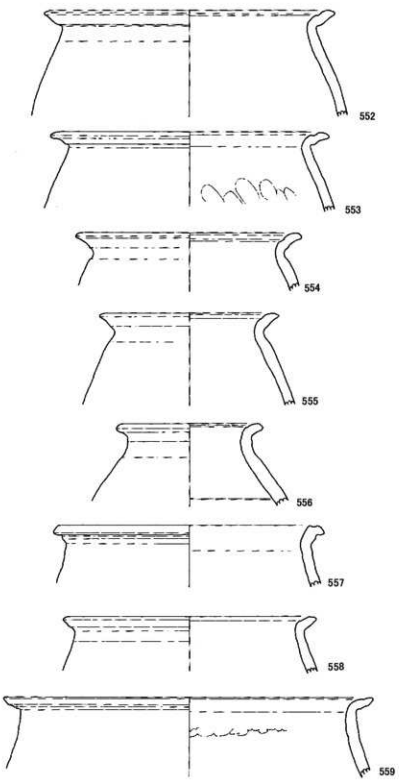
稲荷山窯跡

0 20cm



稲荷山窯跡

0 20cm



稲荷山窯跡

昭和 50 年 5 月 27 日、県道工事の範囲内において現地立会調査。

旧道をはさんで電信柱の場所が三本峠北窯跡。手前が道路工事範囲で灰原調査部分。

調査前遠景
（北から）

調査前遠景
（北から）

調査前遠景
（北から）

調査前調査区全景
（北から）

調査前調査区全景
（北から）

調査前調査区全景
（北から）

調査区北側壁断面
（西から）

調査区道路側断面
（西から）

調査区全景
（南から）

南北灰原土層断面①
（西から）

南北灰原土層断面②
（西から）

南北灰原土層断面③
（西から）

調査区全景
（南から）

東西灰原土層断面①
（南から）

東西灰原土層断面②
（南から）

東西灰原土層断面③
（北から）

東西灰原土層断面④
（北から）

東西灰原土層断面⑤
（北から）

調査区全景
（北から）

調査区全景
（北から）

調査区全景
（北から）

調査前伐採作業①

調査前伐採作業②

調査前伐採作業③

南北土層断面実測作業

掘削作業①

掘削作業②

掘削作業③

掘削作業④

平板測量作業

三本峠北窯跡磁気探査状況

出土資料整理作業（発掘時）

発掘調査参加者集合写真

三本峠北窯跡 灰原出土資料1

三本峠北窯跡 灰原出土資料 2

10

11

12

13

14

15

16

17

三本峠北窯跡 灰原出土資料 3

三本峠北窯跡 灰原出土資料 4

三本峠北窯跡 灰原出土資料 5

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

三本峠北窯跡 灰原出土資料 7

35

36

37

37

37

三本峠北窯跡 灰原出土資料 10

三本峠北窯跡 灰原出土資料 11

40

40

三本峠北窯跡 灰原出土資料12

三本峠北窯跡 灰原出土資料 13

三本峠北窯跡 灰原出土資料14

42

44

45

46

47

49

50

51

三本峠北窯跡 灰原出土資料 15

三本峠北窯跡 灰原出土資料16

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

三本峠北窯跡 灰原出土資料18

68

69

70

71

72

73

74

75

三本峠北窯跡 灰原出土資料 19

76

77

78

79

80

81

82

三本峠北窯跡 灰原出土資料 21

83

84

三本峠北窯跡 灰原出土資料 22

85

86

87

三本峠北窯跡 灰原出土資料 23

88

88

89

90

91

92

93

94

95

97

96

96

98

99

三本峠北窯跡 灰原出土資料 26

108

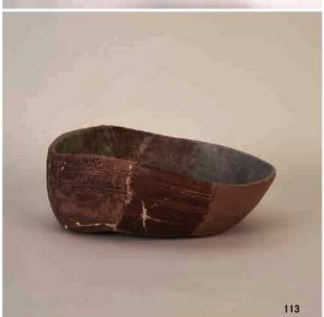
109

110

111

113

114


113

114

112

115

116

三本峠北窯跡 灰原出土資料 29

129

132

130

133

131

134

三本峠北窯跡 灰原出土資料 30

135

135

136

136

138

138

137

139

三本峠北窯跡 灰原出土資料 31

140

141

142

143

144

145

三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 1

302

303

304

305

306

307

307

308

308

310

310

311

312

三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 3

三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 4

320

321

322

323

322

324

325

324

325

326

327

328

三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 5

329

330

331

332

331

332

333

334

335

337

336

337

三本峠北窯跡　1Tr 出土資料 6

338

339

340

339

340

341

342

341

342

343

344

343

345

346

347

348

349

350

351

352

353

三本峠北窯跡 3Tr出土資料

三本峠南窯跡　出土資料（354・355）分布調査資料（356 ～ 358）・大武窯跡分布調査資料（359 ～ 361）

三本峠南窯跡　分布調査資料

源兵衛山窯跡　分布調査資料

武士ケタ窯跡　分布調査資料

太郎三郎窯跡　分布調査資料

床谷窯跡　分布調査資料

稲荷山窯跡　分布調査資料

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひょうごけんようぎょういせきちょうさほうこくしょ　さんぼんとうげきたかまあとのちょうさ
書名	兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ－三本峠北窯跡の調査－
副書名	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第523冊
編著者名	松岡千寿・岡田章一・梶山博史・河野克人・山崎敏昭
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　℡ 079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号　℡ 078-362-3784
発行年月日	令和4（2022）年3月18日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号　℡ 079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
三本峠北窯跡	丹波篠山市今田町下立杭武士ケタ	282219	771016	34° 58′ 01″	135° 7′ 55″	19770917 ～19771024 （771016）	200㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三本峠北窯跡	窯跡	鎌倉時代	窯跡の灰原	丹波焼の甕・壺・鉢・碗など	

要約

従来、三本峠穴窯として知られていた丹波焼の窯跡からすぐ西側で新たな窯跡の灰原が発見された。発掘調査の結果、灰原は9m、南北13mの範囲でひろがり、この灰原からは東海地方でよく知られている当地では珍しい絵が刻まれた刻画文陶器の破片が数多くみつかった。最も数多く出土している甕類も、常滑焼など東海地方の形態をとどめたものである。さらに焼台の存在や製作技術においても、当地の須恵器生産技術とは異なる技術で生産されたことが明らかとなった。この発掘調査によって、従来考えられてきた丹波焼のはじまりは、地元の須恵器の系譜ではなく、常滑や渥美からの技術導入によってはじまったことが明らかになった。

兵庫県文化財調査報告　第５２３冊

兵庫県窯業遺跡調査報告書Ⅰ

－三本峠北窯跡の調査－

令和４（2022）年３月18日　発行

編集：兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印刷：ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39-1